

認知症のエスノメソドロジー

(平成 21 年度 徳島大学総合科学部地域調査実習報告書

& 榎田ゼミ ゼミ論集)

目次

執筆者一覧 藤田 ゆりえ・上久保 友紀・・・3

第Ⅰ部 本文を読む前に

まえがき 榎田 美雄・・・4
トランスクリプト記号一覧 齋藤 雅彦・大上 梨奈・・・6

第Ⅱ部 本文

序章 調査地の概要と調査の概要 藤田 ゆりえ・田村 怜美・・・7
第1章 認知症患者における中空視線を利用したコミュニケーションの達成について
藤田 ゆりえ・田村 怜美・・・9
第2章 起床時間とひじの痛み
―道徳を資源として使うこと 岡田 茜・富永 朝己・・・19
第3章 生活習慣における道徳と笑いの性質 上久保 友紀・田村 理菜・・・33
第4章 相互行為におけるトラブル回避の手法
―経験を参照しないやり過ぎの会話について 小川 拓也・戸川 友希・・・45
第5章 もてなし規範における入居者／学生（ゲスト／ホスト）の相互行為分析
齋藤 雅彦・大上 梨奈・尾崎 諭・・・53

第Ⅲ部 付録

第1章 インタビュー記録
総合的に「学ぶ」ということ 藤田 ゆりえ・田村 怜美・・・73
ゼロ成長な「定常型社会」を目指す直島と出会って
岡田 茜・富永 朝己・・・75
精神力の強さ 上久保 友紀・田村 理菜・・・78
周りに流されずに積極的に 小川 拓也・戸川 友希・・・82
就職活動を振り返って―自然体になるためのプロセス
齋藤 雅彦・大上 梨奈・尾崎 諭・・・86

第IV部 ゼミ論集

- 第1章 Overhearer が志向に埋め込まれた対面的相互行為
ーラジオ番組における子ども科学電話相談 宇都 麻衣子・・・89
- 第2章 医療化する家庭・家庭化する医療
ー在宅医療のエスノメソドロジー 齋藤 雅彦・・・109
- 第3章 吹奏楽練習場面における相互行為分析
ー「理想の音」を生み出すための指導活動に着目して 渡邊 裕美・・・131

奥付け

執筆者一覧

総合科学部人間社会学科 4 年（地域システムコース）

齋藤 雅彦（さいとう まさひこ）

渡邊 裕美（わたなべ ゆみ）

宇都 麻衣子（うと まいこ）

総合科学部人間社会学科 3 年（地域システムコース）

大上 梨奈（おおうえ りな）

岡田 茜（おかだ あかね）

田村 怜美（たむら さとみ）

藤田 ゆりえ（ふじた ゆりえ）

総合科学部人間社会学科 2 年（地域システムコース）

小川 拓也（おがわ たくや）

尾崎 諭（おざき さとし）

上久保 友紀（うわくぼ ゆき）

田村 里菜（たむら りな）

戸川 友希（とがわ ゆき）

富永 朝己（とみなが あさみ）

指導教員

榎田 美雄（かしだ よしお）

[kashida.yoshio@nifty.ne.jp]

第 I 部 本文を読む前に

まえがき

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス（SAS）研究部所属
総合科学部併任（地域創生コース社会学研究室）
准教授 榎田美雄（kashida.yoshio@nifty.ne.jp）
WWW サイト（本冊子の PDF ファイル公開予定）
<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>

この報告書の前半（第Ⅱ部と第Ⅲ部）は、地域調査実習という学部の授業の一環として、作成されたものである。第Ⅱ部では、『認知症グループホーム』での相互行為の分析がまとめられている。第Ⅲ部では、インタビュー実習ということで、卒論生に様々なテーマで話しをしてもらった結果が、「一人称一人語り方式」でまとめられている。後半（第Ⅳ部）は、「地域社会ゼミナール」の授業において提出された自由レポートをまとめたものである。ゼミ生は4名いたが、途中で1名が休学したため、3名分のレポートが掲載されている。そのうち2名は、卒論生であり、中身は卒論の一部となっている。総タイトル『認知症のエスノメソドロロジー』は、慣例から前半の内容に基づいて付けられたものであって、副題（『地域調査実習報告書&榎田ゼミ ゼミ論集』）の方が正確に内容を表すものになっている。各層学生の労力奉仕によって150部が作成された。以下、簡単に各部分の内容紹介と本報告書作成に至る経緯の説明を行い、さらに、謝辞を記していくこととしたい。

まず、若干の経緯説明を含めた掲載内容の紹介からはじめることにしよう。

本報告書の第Ⅰ部は、「まえがき」と「トランスクリプト記号一覧」である。「トランスクリプト記号一覧」は、会話分析において標準的なものであり、ジェファーソンモデルが採用されている。

第Ⅱ部には、「認知症のエスノメソドロロジー」の本体部分として、調査地の概要を記した序章と、5つの班がそれぞれ執筆した研究論文5本の合計6つの論考が掲載されている。授業構想の当初は、個人宅で介護されている認知症者をも調査対象とする予定であったが、うまくラポールをとることができず、「グループホーム」1箇所での調査活動となった。快く調査を引き受けて下さったBグループホームの関係者の方々にあつく御礼を申し上げたい。認知症に関しては、社会学の立場からは、すでに井口高志氏（信州大学）や天田城介氏（立命館大学）の貴重な論考が出されているが、ビデオエスノグラフィー（当事者的な知識を十分に活用したエスノメソドロロジー・会話分析）の業績は未だ存在していない。本報告書の諸論考は、エスノメソドロロジーの立場からの最初の認知症研究としての質を持つものである。ホーム内の日常生活において、認知症の方々が、自らの相互行為能力を総合的に活用して、いかにその場を上手に乗り切っているかが、ビデオの解析から詳細に読み取られている。各班の論考は、医療的視角とは異なる社会的視角のもとで、その様相を相互行為的達成として着実に紙に定着させることに成功していると思われる。一部、先行研究の参照等に未熟な部分も見て取れるけれども、パイオニア的研究としての価値は維持されていると授業担当者としては思っている。この成功を、来年度以降のゼミ活動等に生かしていきたいと考えている。

第Ⅲ部は、インタビュー記録である。本調査実習は、社会調査士の認定に必要な履修科目として指定を受けており、質的調査手法を幅広く学ぶことがカリキュラム上要請されている。そのため、上級生の協力を得て、この部分の作業を行った。インタビューは、簡単な調査項目一覧を事前に作成する「半構造化面接」の手法で行われ、結果は、「一人称一人語り方式」でまとめられた。作業においては、上智大学の岡知史氏のwwwサイトを参照した（<http://pweb.sophia.ac.jp/oka/edu/qr/interviewguide.html>）。記して、感謝する。

第Ⅳ部は、ゼミ論集部分である。第1章の宇都論文は、ラジオ科学電話相談を題材に、「放送」というものが持つ「公共性」が、スタジオ内でのアナウンサーとゲスト回答者との「相互行為」のなかに埋め込まれて存在していることを立証した論文になっている。宇都氏の卒業論文自体は、このゼミ論で紹介された部分以外に、「科学」というものが「ラジオ番組」で「啓蒙」されるメカニズムについての言及部分をも含んでおり興味深い。希望者には、卒

論本体を閲覧できるよう配慮するので、榎田までお問い合わせ頂きたい。第2章の齋藤論文は、在宅医療の現場に泊まり込みで入りつつビデオを回した観察の結果をまとめたものである。嚥下障害に陥る高齢者は多い。ところが、胃瘻を引き受けてくれるグループホームやデイケア施設は少ない。「医療的ケア」の提供体制整備が困難だからだ。けれども、この論文の対象者のお宅のように、「医療的ケア」を「非専門職的に」、「非医療的に」提供することもできるのではないだろうか。たとえば、この97歳のおばあちゃんの在宅医療を実施しているお宅の家族成員は、「転体（てんたい）」という自分たち自身の“専門用語”をつくり、非専門職的で、非分業体制的な、褥瘡防止のシステムを作り上げていた。すなわち、医療専門職による分業体制ではない体制で、褥瘡を防止するシステムを構築していたのである。具体的には、素人同士がそのアドホックに実施した「転体」業務を相互認知して、2時間後に必要なつぎの「転体」をする、フレキシブルで独創的な独自のメカニズムを作り上げていたのである。このようなシステムの整備が、「家庭を医療化している」ということもできるかも知れないが、逆にこれを「医療の家庭化」と呼ぶこともできるのではないだろうか。他にも本論文には興味深い「医療化」と「家庭化」の事例がたくさん報告されている。味読するに足る論文であるといえよう。第3章の渡邊論文は、吹奏楽練習場面を取り上げたものである。現地調査には榎田も同行して撮影を手伝ったが、そのとき、吹奏楽練習場面というのは、インストラクショナル・デザイン的にたいへんよく整った場面である、という印象を強く持った。本論文の分析結果は、その榎田の印象を裏付けるものとなっている。場面が本当によく組織されているので、指揮者の一挙手一頭足が、“（吹奏楽的に）有意味”になっている。日常生活で発声されたならばただ機嫌が良いのだろう、と思われてしまいかねない「オノマトペ（擬態語・擬声語）」が、練習している曲の「曲想」の解釈として、直前の鳴らされた音への厳しい批判として、深い意味をもって、「演奏者」に聞かれている。この理想的な教育場面が、いったいどのようにして成立しているのか、という教育学系の論文としても楽しめる論文に、本論文はなっているといえよう。これも、味読に値する論文であるように思われた。

以下、慣例に従い、謝辞を述べる。

まず、調査に応じて下さった多数の方々へ。皆様のおかげで、報告書を書くことができました。匿名性保持のためお名前を記すことはできませんが、ほんとうにありがとうございました。ついで、研究の中間段階でビデオセッションにおつきあい頂いた研究者の先生方へ。皆さんに頂いたコメントに基づいて、なんとか研究の形を作ることができました。ありがとうございました。とりわけ、朝から晩までの通い合宿におつきあい頂いた井口高志氏（信州大学医学部）と木下衆氏（京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻）には、特別の感謝を捧げたく思います。

さいごに、ビデオ撮影機器の整備等、研究室の業務を日々、手伝って下さっている宮本有美氏と片島由加里氏へ。いつもありがとうございます。科研費が代表・分担あわせて4つ。学長裁量経費や学部長裁量経費などの他の研究費がつねに、3～4個動いているなかで、ぎりぎりになっての資料探索や機材整備をいつも完璧にサポートして下さいありがとうございます。続けてお世話になりたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

なお、本報告書掲載の調査および研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金「臨床教育のビデオエスノグラフィー」および徳島大学学長裁量経費「ボランティア実践のサービス・ラーニング化」によって可能になったものです。諸機関からの人的・財政的サポートに感謝します。

《付録》

この報告書で使用されているトランスクリプト記号

、	下降調のイントネーションで、連続的であることを示す
。	下降調のイントネーションで、発言の区切りを示す
<	急いで発話が始まっている状態を示す
?	語尾の音が上がって区切りがついたことを示す
下線	比較的大きな音、または強調されている部分
:	直前の音が伸ばされていることを示す
(.)	わずかな沈黙を示す
(数字)	その数字の秒数だけ沈黙があることを示す
=	行為や発話が続いていることを示す。
[2人以上の参加者の発話の重なりが始まる箇所を記す
(())	そのつど必要な注記であることを示す
()	何か言葉が話されているが、はっきり聞き取れないことを示す
Ha,huh など	笑いなど
° 文字°	弱声、小さな声であることを示す

第Ⅱ部 本文

1.調査地の概要

本調査では、T県M市にある総合病院A(以後Aと表記)の附属施設である、認知症患者対象のグループホームB(以後Bと表記)に御協力いただき、撮影・聞き取り調査を行った。Bは要介護度1～5のいずれにおいても入居可能であり、施設内を二つに分け、症状の度合により居住を定めている。施設内における入居者の生活スペースは共同空間であるリビング・キッチン・共同トイレバス、各利用者ごとの個室である。Bでは家庭的な環境の中での生活支援を目指しており、施設内のキッチン・バスなど基本的な構造は一般家庭におけるそれとほぼ変わらない。個室は全室介護用ベッドを設置し、また利用者の要介護度・症状進行に応じポータブルトイレを設置するなど利用者の状況に柔軟に対応している。またBはAの附属施設であることから24時間の医療ケアが可能となっている。



写真1 食堂



写真2 個室

2.調査の概要

本調査では、上記グループホームB御協力の元、グループホームにおける認知症患者の相互行為を調査した。調査地Bへは計3回赴いた。1回目の訪問では、本調査に参加した学生計11名と教員1名の計12名で2つに分かれた施設をそれぞれ訪問し、施設の見学と入居者とのコミュニケーションを図った。施設見学では施設職員によるバス、トイレ等の

説明を受けた。2回目の訪問では、学生が1回目の訪問で訪れた方の施設を再度訪問し、入居者とのコミュニケーションを図った。そして最後となる3回目の訪問では、撮影カメラを導入し、施設及び入居者の撮影を2日間行った。撮影には設置カメラが計6台とハンディカメラを計2台用いた。その際、調査許諾を得た入居者を対象に学生によるインタビューも併せて実施した。

第1章 認知症患者における中空視線を利用したコミュニケーションの達成について

藤田ゆりえ
田村怜美

0. はじめに

人の視線には、対象を人とするもの、物とするもの、そしてその対象そのものがないものと大きくわけて3つ存在する。人が人と何かを語る際、この3つの視線は会話というコミュニケーションの中に多分に盛り込まれる。そしてそこには、ある程度の規則性が存在している。例えば、「話し手が受け手を見ているとき、受け手は話し手を注視しているべきである。また話し手が話し手を見ていない受け手を見つけたとき、これはルールの違反行為となり、彼らはしばしば会話の休止や再始動といった会話の中断を起こす。」(Goodwin,1984:230)しかし前述の視線の規則性(「通常の状態」)は、会話場面においてしばしば確実に達成されるものではない。話し手が受け手に視線を向けても、受け手が話し手へ視線を向けていないことは行動レベルにおいて度々起こりうる。そこでその時、話し手側はあらゆるテクニック(会話の中断、復唱、中空視線等)を用いてこの「通常の状態」を回復する。

ここで我々が注目したのが、その話し手側のテクニックのひとつとして見受けられるとした「中空視線」についてである。中空視線とは、視線の先に対象がない状態の視線であるが、この中空視線とは一体何を意味しているのだろうか。聞き手の視線を話し手へと向けさせるためのツール、発話権の継続としてのツール、想起としてのツールとその内容は様々だ。

ところで、この「中空視線」というテクニックは、いわゆる健常者に限られたコミュニケーションツールではない。認知症者にとっても、会話という対人コミュニケーション場面においてはあらゆる場面において利用されているが、しかし健常者が使用するそれとは違い、このツールを例えば想起の意味を含んで認知症者が使用する際、会話のトラブルが発生する恐れがある。なぜなら会話とは、前提として自らの経験を参照した発話によって行われているからである。しかし「痴呆を病む人は経験したことの内容を忘れるだけでなく、経験したこと自体を忘れる」(小澤:2003,3)、つまり認知症者は経験を参照した会話(発話)能力が乏しい。そのため会話テクニックとして、想起の意味での中空視線を利用したとしても、結果として想起に失敗するということが起こりうるのだ。

今回実習で訪れたグループホームでの利用者との会話において、中空視線は語りのあらゆる場面で見受けることができた。本調査では、以下2節で記したグループホーム利用者A、Bへの聞き取り調査から得られたトランスクリプトにおいて、会話というコミュニケーション

ンを介して認知症者が「中空視線」を利用している様子が見受けられたことから、認知症者による「中空視線」を用いたコミュニケーション（会話）の達成はいかにしてもたらされるものなのかを中空視線使用の意味とともに考察していくことを目標とする。

1. 発話主導権継続としての中空視線と場面参加者の代理発話

〈断片 1〉 ウイスキー

日時：2009年7月27日 08:41～

場面の参加者：教員 K、学生 T、F、入居者 A

◎場面の説明

旦那さんがお酒を飲むのかという質問に対して A が非常によく飲むと返答。その後飲むお酒の種類について話す場面。



▽8:41:31

写真1 ウイスキー

01K いや：：ウイスキーは、じゃあ日本のウイスキー？外国のウイスキー？

02A え、あのいや、見てごらん。

03K はい。

04A ダルマいうのがあるで[しょ。]

05K [ダルマは]サントリーですね。

06A うん

07K 君たち知らないかな。あ：：

08F ちょっと分からないですね。

09K ダルマですよね：：

10A うん ((うなずき))

- 11K ね。私は存じております。サントリーですよ。
- 12A は。サントリーはね。あの頃はね。安う(※1)して儉約する人はね、角瓶[飲ん]でたの。
- 13K [角瓶。]
- 14A ね。
- 15K そうです、はい。
- 16K あの、透明の瓶に茶色い液体[が入ってて]
- 17A [こうキラキ]ラキラ
- 18K 四角い、ええキラキラキラって。←写真1
- 19K あの四角いのがこう縞模様が入ってて瓶、角瓶ですよ。
- 20A あれ、私見たらぞっとした。
- 21K あ：：。
- 22F あ：：。
- 23K 飲むから、旦那さんが。あ：：。
- 24A もうねえ、体壊しや[しないかと。]
- 25F [あ：：。]
- 26T [あ：：。]
- 27A ほども(※2)まだ長生きしてるんだからね。
- 28K あ：：。
- 29A そ：と思うよ。ね、お酒がどうこう言うこともない。
- 30A だけど、痴呆症になったっていうのは
(2.0)
- 31A やっぱりお酒関係してるんじゃないかと思う[のよ。]
- 32K [い]ろんな説がありますよね。
- 33K アルミニウム説もありますし、ええ分からないですね。
- 34A うん。
- 35K あのお酒もよくないかもしれないし、ええ。
- 36A ねえ。
- 37K 分からない。
- 38A と思うねえ。

※1：安う→安く

※2：ほども→それでも

1-1. Aの物語会話におけるメイン参与フレーム・サブ参与フレーム

まず断片1の考察に移る前に、「参与フレーム」Goffman(1974,1981)について触れておきたい。「参与(participation)」という概念を、相互行為の分析の中心に据えたのは、E.

ゴッフマンが初めてではないかと山崎敬一（1997）は指摘する。ゴッフマンによれば、会話において発話の受け手には、単純に聞き手として発話場面に参加している者だけでなく、それ以外の役割で場面に参加している者がいるという。

ゴッフマンは、受け手と一口にいってもいろいろな受け手がいることに、注意を促している。たとえば、直接語りかけられている者もいれば、その発話を単に傍らで聞いている者、さらに話し手（及び他の受け手）に気づかれないようなしかたで聞いている者（盗み聞きをする者）もいる。そこに居合わせている（話し手以外の）人びとは、そのつどの発話にたいして、さまざまな水準の受け手として関係している。そのつどの発話にたいする受け手の布置のことを、「参与の枠組み（participation framework）」と呼んだ。（西阪、1997：18）

つまり、会話における「参与フレーム」とは発話者の発話を受ける、聞き手はもちろんそれ以外の様々な受け手の場面内での配置のことを指している。

この断片1の場面で起きていることは、上記の「参与フレーム」の構造であり、かつ「サブ参与フレーム」というもうひとつの枠組みが会話構造の中で見受けられた事例である。

以下〈断片1-a〉ではその場面のトランスクリプトを動作と視線を併せて記載した。

（断片1-a）：断片1における04-09行目

本トランスクリプトは、視線・発話・振る舞いを同時平行的に記しており、また〈断片1〉では表記されていない発話者以外の場面参加者のその発話時点での様子も併せて表記してある。（※2-1についても同様形式のトランスクリプトを使用。）また区切り線の上段の右端と下段の左端は時間的に継続しているものとする。

※視線表記

A→入居者 A	F→学生 F
K→教員 K	メ→メモ
T→学生 T	空→中空視線

KKKKKKKKKKKKKKKK

04A ダルマいうのがあるで[しょ。]

((ダルマの形を手で表現))

AAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

05K [ダルマは]サントリーですね。

((うなずき))

(省略)

F ()
((省略))
メメメメメメメメメメ AAAAAAAAAAAAAAAAAA
T ()
((頭をあげ A をみながら首をかしげる))

KK
06A うん
((うなずき))
TTTTTTTTTTTTFFFFFFFFF
07K 君たち知らないかな。あ：。
(())
KKKKKKKKKKKK
T ()
((首を振る))
KKKKKKKKKKKKKKKKKK
08F ちょっと分からないですね。
(())

AAAAAAAAAAAA
09K ダルマですよね：。
((うなずき))

〈1-1 考察〉

ここでの語りは、会話骨子が A による想起中心に行われていることから「昔語り」であるといえる。そもそも「昔語り」とは話し手を中心に話を進めていくものであり、発話の権利は話し手に独占的なものであるから、断片 1 での「メイン参与フレーム」は、A を語り手に教員 K と学生 2 人を聞き手とする枠組みであるといえる。しかしながらここでは 07-11 行に見られるように教員 K による挿入連鎖が起こっている。これが断片 1 における「サブ参与フレーム」(※3)である。会話規範において発話者はその会話内容における聞き手の理解を把握する必要がある、(ここでは「ダルマ」)それを達するために、教員 K によって A の発話を代理することが行われている。つまり「サブ参与フレーム」としてこの場面で見られるのだ。

更に断片 1 の 11~18 行にあるようにここで教員は自らがその問い(ダルマについて)の答えを知っているにも関わらず、「知らない」と答えた学生 2 人に対しての回答は行わなか

った。これは「昔語り」というこの場面での発話の権利が潜在的に A にあることを示す出来事であり、また「知らない」と答えたにも関わらず問いを立てた教員に対して回答を求めなかった学生 2 人に対しても同様である。これは「物語は話し手が語り続けることができる」(Harvey Sacks : 1995) と述べていることから、ここでの聞き手 3 人による行為は適切であり、前述したことを潜在的に理解していたと推測される。

これらのことから(断片 1-a)場面の形成は、話し手である A 独自に行われたものでなく、「代理発話」を行った教員 K 及び聞き手である学生 2 人によるサポートが合わさったものであるといえるであろう。

※3 : サブ参与フレーム→メインの参与フレームの時間枠の中でその中断中にメインの参与フレームに戻ることを前提にできあがる短期的な参与フレーム

1-2. 会話の主導権継続を示す中空視線

(断片 1-b) : 11-14 行目

AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

11K ね。私は存じております。サントリーですよ。

((うなずき))

KKK 空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空 KKKKKKKKK

12A は。サントリーはね。あの頃はね。安うして儉約する人はね、角瓶[飲んでたの。]

((顔を少し上げる 手振り K へ軽く身を乗り出す))

(省略)

F ()

((省略))

(省略)

T ()

((省略))

13K

AAA

[角瓶。]

((顔をあげる))

KK

14A ね。

((うなずき 手は挙げたまま))

〈1-2 考察〉

ここで A に見られる中空視線 (12 行) は発話権の継続を、他の場面参与者に対し要求す

るとともに表していると推測される。上記〈1-1 考察〉で述べた通り、断片 1 における「参与フレーム」は「メイン参与フレーム」と「サブ参与フレーム」の 2 つの構造で成り立っているが、(断片 1-b) の 12 行で起こっていることは (断片 1-a) で発生した「サブ参与フレーム」から「メイン参与フレーム」への引き戻しである。したがって (断片 1-b) 12 行に見られる A の中空視線は教員 K による「代理発話」の終了を表しているものであり、同時に A 自身の「会話の主導権継続」を表していると考えられる。

2. 想起としての中空視線と参与者によるサポート

〈断片 2〉 起床時間

撮影日時：2009 年 7 月 27 日 08:00～

場面の参与者：学生 S、入居者 B

◎場面の説明

学生がどこから来たのかという話題から、学生の当日起床時間についての話題へと発展。後に入居者の起床時間についての話題へと転換するシーン。



▽8:00:14

写真 2 起床時間

01S 朝 6 時半、朝 6 時、5 時過ぎに起きて 来ました。

(2.0)

02B まだ寝よっただろうわぁ。

03S 寝よった？そう眠たくて。 朝早かったんで。

(8.0)

04B 何時起きになるんだろう。7 時 9 時。 ←写真 2

05S いつも何時くらいに起きられるんですか。

(3.0)

06B 何時くらいって言われたって。 よう分からん。

07S HaHa : : :

上記断片 2 における「中空視線」場面は 04、06 行における B の発話中に見られる。ここで発話者 B が用いた「中空視線」の意味は、自らの経験を顧みる想起であり、会話における典型的な経験参照型であるといえる。ではこの会話達成はいかにして成し遂げられているのか。

以下(断片 2-b)では、1-1、1-2 と同様に、この場面で中空視線が用いられた 03-07 行についてを、視線と動作が同時に表示されるトランスクリプトにより示した。

(断片 2-b) : 03-07 行目

※視線表記

B→入居者 B S→学生 S

空→中空視線

BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB

03S 寝よった? そう眠たくて。 朝早かったんで。

((うなずき))

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

B ()

((手を口元にあてたまま))

(8.0)

空空空空空空空空空空空空空空空空

04B 何時起きになるんだろう。7時9時。

((手元にあてていた手を少し離し、顔を上に向ける))

BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB

05S いつも何時くらいに起きられるんですか。

((省略))

(3.0)

空空空空空空空空空空 SSSSSSSSSSSSSSSSSSS

06B 何時くらいって言われたって。 よう分からん。
(())

SSSSS

07S HaHa : : :

〈2 考察〉

この学生とのコミュニケーション場面において、上記 04、06 行からもわかるとおり B は中空視線を利用した会話に挑戦している。しかし同時に想起の失敗による会話のトラブルも起こっている。そもそも 04 行において、B は自己の起床時間を提示するという形で学生との「起床時間」についての話題を継続しようと試みている。ところがまさにその場面において B は自らの起床時間についての想起に失敗している。

そこで注目すべきはその後の学生による発話である。「いつも何時くらいに起きるのか」というこの発話は、問題となっている「その日」の起床時間についての話題を逸脱せず、且つ B の想起の助けとなりうるサポートとなる発話であることがみとめられる。つまり、「今日」という特定された日の具体的な出来事に対する想起は困難であっても、習慣的には何時ごろ起きるのか、という問いに対しては答えられるのではないかという思惑がこの発話には意図されていると考えられる。ところがここでも、B は 06 行に見られるように想起に失敗してしまう。しかしながら 06 行後半に見られるとおり、B によって想起が失敗したことを告げる「わからん。」という発話が起こったことは、一見して会話の流れとして失敗したように見えたとしても、実際は想起に失敗したことで起こる会話中断というトラブルを回避することに成功していることを表しているのではないだろうか。

これにより、学生による 05 行の発話はいくまでも B との会話継続のためのサポートであったことを窺い知ることができる。

3. 総括

『認知症者による「中空視線」を用いたコミュニケーション（会話）の達成はいかにしてもたらされるものなのか。』という疑問から、今回の検証を行ってきた。それによって「中空視線」は単独でそれ自体に意味があるのではなく、あらゆる相互行為と場面の特徴によって意味を持つものであることが分かった。また認知症の症状の影響があるか否かに関わらず、断片 1 にある物語方式や断片 2 のように会話中に想起が含まれるといった場面の形成に成功しているのは、入居者とのコミュニケーションの連鎖的關係に基づいたものであると考えられる。つまり会話とは語り手単独によって成り立っているのではなく、聞き手による様々なサポートや語り手自らが潜在的に持つ会話のテクニック（中空視線等）が

相互に作用し合うことによって形成される相互行為場面であるといえる。

最後に、今回の報告書執筆にあたり、貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力くださった、信州大学医学部井口高志氏と京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻木下衆氏、また調査協力の依頼に応じてくださったグループホーム B の関係者の方々、入居者の方々には深く御礼申し上げたい。

参考文献・引用

Charles goodwin (1984) 「 Notes on story structure and the organization of participation 」 University of South Carolona,Columbia

ハーヴィー・サックス (1995) 「会話データの利用法 会話分析事始め」『日常性の解剖学』マルジュ社、92-173

葛岡英明・水川喜文・三樹弘之 (1995) 「CSCW 研究とエスノメソドロジー研究の接点」『現代社会理論研究第 5 号』現代社会理論研究会

西阪仰 (1997) 『相互行為分析という視点 文化と心の社会学的記述』金子書房

西阪仰 (2008) 『分散する身体 エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』劉草書房

山崎敬一・西阪仰編 (1997) 『語る身体・見る身体 (附論) ビデオデータの分析法』ハーベスト社

第2章

起床時間とひじの痛み —道徳を資源として使うこと—

岡田 茜

富永 朝己

0. はじめに

認知症患者のグループホームでの会話の分析を元にいくつかの事からここでは考えるが、そのために2つのシーンを取り上げてみることにする。1つは睡眠に関する話題について患者と学生が語り合っている場面であり、もう1つは認知症患者のひじの痛みについて会話が繰り返されている場面である。これらから見えてくるものには、認知症患者に特有のコミュニケーションのあり方もあるかもしれない。だが、それだけにはとどまらない人と人との相互行為の中から浮かび上がってくる構造のようなものもある可能性がある。そのような視点からこれらの会話について考察してみたい。

1. 睡眠に関する話題についての会話

ここでの話題となっている「睡眠」とは、誰にでも共通する内容である。このことから認知症患者であるBさんと学生という普段はあまり関わりのない者同士の会話においても何の補足も必要とせず出来るだけ会話をスムーズに進めることができ、相互のコミュニケーションを図るにあたって適当な話題であると考えられる。しかしBさんは自称80歳という年齢からも分かるように、認知症患者だけではなく高齢者全体に共通する「睡眠障害」がみられる可能性もないとは言い切れない。またBさんには認知症特有の「記憶障害」があることも幾度の調査から分かり、他の入居者に比べてもBさんのコミュニケーション能力は比較的高いとはいえ、この場面での穏当な話題においてもトラブルは起こりかねない。以上のような点に注意を払いながら、普段の生活リズムが全く異なるBさんと学生との会話で起こる出来事をエスノメソドロジー的視点からとりわけ道徳的なことに関することに関する共通理解を会話の資源として用いることに注目しつつ、この場面での会話を分析していきたい。また今回の会話分析を行うにあたり、他の様々な断片でもみられる似たような出来事とも関連する部分を見つけることも視野に入れながら、それを踏まえて考察していきたい。

〈断片 1〉 睡眠について

日時：2009年7月27日10:00:44~

場面の参加者：入居者-Aさん、Bさん、学生-学生①、学生②



▽10:01:22

写真 1 起床時間についての会話

▽10:00:44

(①、あくびをする)

- 01① 朝起きるのが早かったんで、今眠くなっちゃって。
02B ええ：：。
03① 朝起きるのがすごい早かったんで。
04B 早いんで。(※)
05① はい。いつもこれぐらいに起きてるんですよ。でも、そうですね。違う？
06② 私はちょっと早い。
07① 早い？
08② 1時間早い。
09① でも、それくらいだよな。
10B 私や、5時もう。
11② 5時に起きてらっしゃるんですか。
12B 5時6時にもう起きとるけん。

- 13② 5時6時に起きるんですか。早起きですねえ。(7.0)
- 14B 早うもないなあ。夜が明けとるもん。
- 15② いや、早いですよ。
- 16① 夜は何時ぐらいにお休みになられるんですか？
- 17B 夜は、夜は10時ごろじゃなあ。
- 18① ちょうどいい頃合いですね。
- 19B ええ。 ←写真2
- 20① 毎日ぐっすり眠れますか？
- 21B ええ？ ←写真3
- 22① 毎日よく眠れますか？
- 23B 眠れる。
- 24① はあ：、じゃあいいですね。眠れない日とか時々あったりするじゃないですか？
- 25B 前はそじゃったけど、今ない。
- 26① 前はあったんですか？
- 27B 治った。
- 28① ああ、よかったですねえ。眠れないのが一番大変ですもんねえ。
- 29B 眠れんのがえらい。
- 30① ねえ、大変ですよええ。次の日がしんどいですよねえ。
- 31B ええ。

(※)「早いんで。」・・・この地域の方言では「念押し」や「確認」の意味を表す。またこの場面では軽く「疑問」を投げかけながらも、学生の発話に対する理解を示している。

学生①



Aさん

学生②

Bさん

2009-7-27
10:02:08AM

▽10:02:08

写真 2 学生①の言葉に反応する B



学生①

Aさん

学生②

Bさん

2009-7-27
10:02:15AM

▽10:02:15

写真 3 学生①の質問を聞き返す Bさん

この断片での会話では学生①の「あくび」が会話の発端になっている。「あくび」とは退屈を表す行為、また現在の状況へのコミットメント（関与）の低さを表示する行為である。けれどもそれは故意的に行うというより当人の置かれている状況や体調によって何事にも左右されない、いたって自然に起こる現象である。この「もれ出る」行為はそのままなら行為者の本音を表示しているとも捉えることができ、また適切ないいわけが伴えば、本音ではないと取り扱うこともできる。今回の会話の発端から見て取れることは、学生①は「あくび」がその場面で退屈な態度を取ることに繋がる、という社会的、道徳的に義務違反であることを自覚しており、それに伴う他者への配慮が伺えることから、高い道徳的センスを持っていると分かる。つまり学生①は「寝不足」といういいわけをすることによってこの場へのコミットメント意欲は高く持っているが、普段とは違った睡眠時間によって「あくび」が引き起こされたと説明している。加えて学生①はこの日は調査のために普段の起床時間との異なった時間に起きた（普段より早く起きた）こと、また自己の大学生特有の生活（起床時間が遅い、消灯時間が遅いなど夜型の生活）の自覚による、自身への反省の念を抱いていることが会話から読み取ることができる。このような点でも学生①、またそれに続く学生②の、道徳という社会的共有物への理解度の高さが観測できる。このように学生①が「あくび」をしてしまったことに対して自らの道徳違反を丁寧に弁解する行為によって、Bさんが認知症グループホームの被介護者でありながら一人の人間であるということの面子が確立され、そのBさんに対して敬意を払うというコミュニケーション環境が作り上げられている。そしてBさんはその作り上げられた環境の中でのことによって、より人間らしさが触発され、道徳的な会話を営むことに成功している。それが大きく表れている部分が14「早ようもないなあ。夜が明けとるもん。」という自身の早朝の起床時間を謙遜する表現である。幾度の調査の結果Bさんは記憶障害、睡眠障害を持っていること分かっているため実際早朝5時に起床しているかどうか定かではないが、早起きは道徳的に正当化されるべきものでありBさんはその正当性を主張することも可能であったはずだ。しかしこの場面でそれが成されなかったのは、学生①、学生②と共有する空間にBさん本人が身を置くことによって最終的には3人で社会的共有物である道徳、それを踏まえた上での会話が要求されるような環境を作り出していたからではないだろうか。

また、この断片において一番注目したいところ、データの特徴が表れているであろう会話は19-23行目だと考える。学生①の18「ちょうどいい頃合いですね」という同意を求める問いかけに対してBは19「ええ。」と返答している。ここでは学生①はBさんに負担のかからない、あまり深く考えずとも返答することが可能な言葉を投げかけている。そのためBさんは何のトラブルもなく肯定の発話を行い、会話は確実に成立している。このような点からも学生①のBさんへのコミュニケーション上の配慮、面子の維持への協力が成されていることが伺える。しかし次の学生①による20「毎日ぐっすり眠れますか？」という問いに対してBさんは21「ええ？」と聞き返しており、ここでは少し動揺している様子

がみられる。質問自体が聞き取りにくかったため聞き返した、というケースも考えられるが、今回は違った見方でみていきたい。認知症の傾向として典型的な例が、過去のことは鮮明に覚えているにも関わらず、現在の記憶はかなり乱れが激しい上喪失も多くみられる、というものだ。これを踏まえると Bさんは学生①の質問に対して自分自身の「最近の睡眠」に対しての記憶が曖昧だったため、このような 21「ええ？」という言葉が思わず出たのではないか。自分の起床時間は思い込みや刷り込み、勘違いから答えられたとしても、自分が「よく眠れているかどうか」は記憶が曖昧なため即答できない。よって現在自分に起きていることが把握しきれておらず、このような返答になってしまったのではないだろうか。また学生①が 22「毎日よく眠れますか？」と少し言葉を変えて質問しなおした時、Bさんは 23「眠れる」と簡単に答えている。これは二度の質問を学生①にさせることによって質問の意味を理解し、返答する時間を確保して内容を模索していたからではないだろうか。普段から Bさんは明るく、陽気な性質を持っているということではあるが、このような高度な会話のテクニックを駆使する、その余裕を生む環境があったからこそこの会話を成功させることができたのではないか。この会話は「眠れますか」－「眠れる」という肯定的な意味を含んだ隣接対上で成り立っていて何の障害もなく続行されているが、実際では「聞き返す」という行為は立派なトラブルである。しかし上記でも述べたように、それをトラブルとは思わせない、または捉えないような環境が作り上げられているからこそ、ここでの会話は成立している。このような点から我々のような第三者、つまり毎日触れ合っている人間ではない人間と新たな関係を持つことで人間らしさ、道徳的会話を半強制的に求められる環境が構築され、認知症患者のコミュニケーションの向上、新たな能力の発見を見出せるのではないかと考察する。これらの環境下での会話において Bさんの人間的能力が引き出され、また他人に対する道徳も引き出されている。そしてそれは Bさんの人間としての面子を守り、参与者全体にもそうふるまわれていることから、Bさんも人間的で道徳のある振舞いを実践しているかのように見える。以上のように Bさんのような認知症患者の面子を守る環境を作り上げることによって、それがこの認知症グループホーム全体を「人間が住む場所」として作り上げられるということにも繋がっているのではないだろうか。

2. 痛みに関する話題についての会話

以下の場面では、Bさんの右ひじの痛みを中心に会話が繰り広げられている。病気や怪我、体調の不良ということも話題としてよく取り上げられる題材である。ただ、これらは話題としては深刻で重苦しい雰囲気になってしまう場合もあるが、認知症という病それ自体に比べるとBさんのひじの症状は比較的軽微であり、全員が会話に参加できるようなおだやかなものにこの場面ではなっている。また、学生の1人がBさんのひじを触って(さすっていることにより話題の対象が明示され、和らいだ雰囲気の中で会話は進行していった

いる。

〈断片 2〉 ひじの痛みについて

日時：7月27日 10:00:02~
場面の参加者：入居者-Aさん、Bさん、学生-学生①、学生②



▽10:10:07 写真4 Bさんのひじを触る学生②

▽10:10:02

(Bさん②に視線を向ける。②と目が合う)

01B 右手が痛うてな。右手のひびが痛いけん。

02② 痛いんですか。

03B 痛い。

04② 大丈夫ですか。(Bさんの右ひじを触る)

←写真4

05B これもって飲むとものすごく痛い。(カップを口までもっていき飲み物を飲む)

↑ 写真5

06② ああ、曲げると痛いんですか?

07B (30.0) 痛い。(Bさんと①の目が合う。Bさんは②に視線を向け、②と目が合う)

08② 痛いんですか。曲げると痛いんですか?

09B 下げても痛かって。

10② こうやったら。(右手を動かし何かを飲むしぐさをする)

- 11② じゃあ、飲むのも大変ですねえ。
- 12B 飲むのは大変じゃ。
- 13② すみません。
- 14① はい。
- 15② 失礼します。(②、席を外す)
- 16B 痛い。
- 17① 左手は大丈夫なんですか? ←写真 6
- 18B 左は痛くないんじゃ。
- 19① ふーん。え、左で飲んだりはしないんですか? (左手を動かして何か飲むしぐさをする) ←写真 7
- 20B 右手がいい。
- 21① ああ、じゃまた痛くてもちょっとずつでも使ったほうがいいんですかね。ちょっと。
(右手を動かして何か飲むしぐさをする) ←写真 8
- 22B 癖になっとんじゃろな。
- 23① はー。
- 24B 右手でするんがな。
- 25① はー、自分左利きなんですよ。(左手を動かす) ←写真 9
- 26B 左ではようせん。
- 27① 自分は左利きなんで、何、ご飯食べるときも左手で食べます。(左手を動かして何か食べるしぐさをする)
- 28B 右利き。



▽10:10:21

写真5 右手で飲み物を飲むBさん



▽10:11:27

写真6 自分の右手で左ひじを触る学生①



▽10:11:40 写真 7 左手で何かを飲むしぐさをする学生



▽10:11:48 写真 8 右手で何かを飲むしぐさをする学生



▽10:11:58

写真 9 左手を動かさず学生

Bさんは学生②に視線を向け、学生②がそれに気づくと自分の右ひじ(右手も含めて)の痛みについて自分から会話を切り出している。特に7行目の冒頭の30秒の沈黙の後、あえてBさんは自分のひじの痛みについてまた再び主張している。痛みについての話題は会話の中では言いだしにくいことである。少なくとも言い出すにあたって特別の注意を伴わせることが必要なことがらである。なぜならそれは「この痛みを何とかしてほしい」と主張することになる効果を持つものになってしまうからである。つまり、対話者に対して自分への配慮を義務づけてしまう強力すぎる発話だからである。そのような、話題としては非優先であるといえるかもしれない体の不調をテーマにした会話であることも原因の1つであるのだろうが、会話の最初と同様に07行目でもBさんは学生と目が合うとこれをきっかけに自分から会話を切り出している。つまり、相手に自発的な自分への関心が見てとれた時にこの話題を切り出しているのである。¹

¹ 参考として、ある身体障害者療養施設で車いすに乗ったCさんが呼びかけをしたタイミングに注目してほしい。Cさんは発話の前後に特に目立った形では動作はしていないが、自分の近辺を理学療法士が通過しかかったことに触発されて発話がなされている。(檜田2010)

ところで、21行目で学生①は「…するほうがいいんですかね。ちょっと。」と下線部のよ

うに付け加えることで、何かしなければならぬと提案したことを和らげるような表現を使っている。Bさんの20行目がいささかぶっきらぼうで、提案に示された学生①の好意を無にするようなトーンがあったためだ。つまり、BさんにはBさんなりの事情があって右手を使いつづけるという宣言を20行目でしたのだという文脈を可能にする発言を21行目でしている。これはなぜか、またどのようなやり取りを経て有意味になっているのか。先にみたように、会話における相互行為的な規範においては「他者に自分のみじめなところは見せつけてはいけない」「他人から同情されるようなことをしてはいけない」というルールがあると思われる。つまり、学生①の21行目がなければ、Bの20行目はBの性格や配慮のなさにその原因が帰属されかねないあぶない発言だったのである。これに対して、(21行目の学生①の問いに答える形で)22、24行目でBさんは右手でするのが癖になっているからなのだと言い訳めいた発言をしている。すなわちこれはBさんが自分の発言が他人に対して自分に気をつけるという内容になっていることに気づいていて、かつ学生①がそれを中和する理由の発話を自分に求めていることにも気づいていて、その学生①からの配慮にした発言になっているのだと思われる。学生②も痛みについては慎重に配慮しなければならないという配慮を持ってBさんに対しており、会話はこのようなお互いへの気遣いの中で進行していつているのである。

ところで、途中、19行目で学生は自分の左ひじをなでて左手を使ってカップから飲み物を飲むしぐさをしながらBさんに語りかけている。また、21行目で学生が右腕を動かしている時にBさんは手元のカップの方に視線を向けており学生の方を見ていない。また、25、27行目で学生が自分は左利きだと言って左手を動かしているとき、Bさんは学生の方に視線を向けている。この様子を見ると、学生①の行為は「代理身体」と呼ぶべきものであろう。西阪によると「代理身体」とは以下のように説明される。

身振りを行う者が、現に目の前にいる他人（その相互行為の他の参加者）の身体の代理として自らの身体を用いているとき、その身振りを「代理身体」と呼ぼう。…（しかし、一方、）代理身体は、身振りを行う者のその身振りと言語によって、その者自身の身体に与えられた構造であり意味である。その身振りと言語が他の参加者の身体に近接され、その結果、その本人の身体は「代理身体」として構造化される。代理身体とはそのような、身体の構造化のやり方（プラクティス）にはほかならない。（西阪 2008 209-210）

このような相互行為における構造の中で、学生のふるまいや学生からの語りかけに応じながらBさんの会話はうまく流れに乗っているように見える。Bさんの会話のペースはゆっくりとしたものである。だから、学生はその中に割り込んでいこうとするのではあるが、Bさんの反応に戸惑い、うろたえるところもみられる。しかし、これも「痛み」を介在させた会話を使ってなるべくなめらかに会話を持続して成立させようという努力が見られ、

コミュニケーションの困難さは比較的うまく回避されているようだ。「痛み」というものは自分しか感知できないものであり他人はそれを推測するしかない、という考えもありえるかもしれない。だが、相互行為における構造の中においては、「痛み」について言及されたとき、むしろ場合によっては「痛み」を表明した者に対して、配慮ある適切な対応をすることが義務でもある。そして「痛み」についての会話には困難を伴い難しい場合もあるのではあるが、一方でそこに会話をしているものたちの間にこのような一定の配慮が働いていると、トラブルにはならずむしろその「痛み」についての話題は受け入れやすいものとなる。道徳的にふるまうことのできる者たちの間では比較的軽微な「痛み」は標準的な挨拶の話題であったりもするのであり、ここでもその困難は、Bさんのふるまいおよび聴き手の役割をもっぱら果たしている学生たちの努力と気遣いにもより、うまく回避されるように見受けられる。その背後にあるものをどのように考えていけばよいのであろうか。

3. 道徳的であることと「痛み」を感じること

以上、2つの場面を通して認知症者とのコミュニケーションを見てきた。認知症者との意思疎通の場面においては、医学的見地からの視点はさておき、これを社会学的に見れば別のものが見えてくる。それは相互行為の中で成り立つ構造に支えられて会話が成立しているという事実である。そのとき認知症者の抱える能力的な困難さは捨象して考えられている。そして、クルターはこう述べている。

しかしながら、わたしたちは、「わたしは痛い」もしくはそれと同等のことが言えるようになるだけではない。わたしたちは、痛みを表明するとき、それと一緒に様々な記述カテゴリーをもちいることができるようになる。(クルター 1979=1998:131)

そして、この場面でより重要なのはその表明された「痛み」が相互行為の中でいかに扱われるかということであろう。「痛み」というものに対しては、信頼関係のある人間同士の間なら十分な配慮が払われるものである。それは会話におけるトラブルの種というよりは話題として十分受け入れやすいものであり、標準的な挨拶の話題でもある。また、ここでより注意して考えられるべきは、他者の「痛み」を感じている、わかっている、理解しているということよりも、そのことについて発話する権利を誰がどのような根拠において持っているのか、ということなのである。上で取り上げた2つのシーンにおいては、認知症である入所者の「痛み」に対して学生が配慮を示すことが可能であることがわかる。そして、道徳的であることは会話において利用可能な資源であることが示されている。また、会話というものは、その場に参与しているものがいかに協働して会話上のルールを達成しあっているかということが重要になるのである。そのルールの基盤にある道具として利用されているものが、社会的共有物としての道徳である。そこでは学生たちが謙遜すること

が可能になり、認知症者であるBさんもそれにあわせて人間らしい振る舞いができるようになっていく。

だから重要なのは、語ではなくて、その語をゲームのしかるべき指し手として位置づける文法のほうである。そして、「痛み」という語の用法を指し手として位置づける文法を述べたものが、先にあげた、「人は他人の痛みを知ることができる（感じる）ことができない」という命題なのである。あくまでも論理的には、わたしたちは「痛みの振る舞い」を公的な「基準 (Kriterium)」として、他人の痛みを知ることが可能なのである。(前田 2008:59)

認知症者に能力があるかどうかを社会学的に見ればまた別のものになる。境界的ではあるが適切にふるまっている場合も多い。そこには個人の記憶能力によらない意思疎通のあり方が見てとれる。道徳を資源として使用すること—この論文で示されているのはそのような相互行為に基づくもう一つの人と人とのつながりあいの姿である。

最後に、今回の報告書執筆にあたり、貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力を下さった信州大学医学部井口高志氏、京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻木下衆氏、また調査協力の依頼に応じて下さったグループホームBの関係者の方々、入居者の方々には深く御礼申し上げたい。

参考文献・引用

- Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind*, London: Macmillan (=1998、西阪仰訳『心の社会的構成』新曜社)
- 檜田美雄 (2010) 第8章「施設で暮らす」『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社
- 前田泰樹 (2008) 『心の文法』新曜社
- 松永美輝恵,井関智美 (2004) 「認知症高齢者のコミュニケーション量と感情の分析」『新見公立短期大学紀要』25:171-177
- 西阪仰 (2008) 『分散する身体』勁草書房
- 新田智弘「他者の感覚をあらわす語の意味-後期ヴィトゲンシュタインを手がかりに」『人間存在論』8:127-139
- イーヴ・ヴァンカン著 石黒毅訳 (1999) 『アーヴィング・ゴッフマン』せりか書房

0. はじめに

本調査では、2日間にわたり、グループホーム B における認知症患者との相互行為のあり方をビデオ撮影を行いながら調査した。そのデータの中で、私たちが会話をした A さんには、5つの特徴があることを発見した。1つ目は、道徳的規範を知っているが自分はできていないことを自ら主張したことである。2つ目は、道徳的規範を知っていて、自分も実践できていることである。3つ目は、沈黙の後に、A さんから、突然苦労話をするとところである。4つ目は、会話の中に見せる笑いの性質についてである。そして5つ目は、配慮の示し方を使い分けているところである。これらの事例に焦点をあて、相互行為分析を行う。

1. 会話の分析と視点

人間の社会生活とは、物の名前を知っていることだけでなく、場面に合わせて適切なコミュニケーションをすることでも支えられている。コミュニケーションには、相手に配慮を示すという規範的な要素があって、その中には相手を道徳的に貶めないことや自分を道徳的に高い位置にいるという表示を積極的にしない、自慢しないという部分もある。これは、A さんだけでなく、教員や学生においても存在するコミュニケーションの規範的要素であることが今回のデータからも見て取れた。私たちが分析を行うのは、このような、場面に合わせてコミュニケーションをとる（認知症者を含んだ）人々の方法である。

2. 生活習慣について

2-1. 高度なコミュニケーション能力

調査したデータを分析していく中で、A さんの高度なコミュニケーションの能力が、相互行為の中に見てとれた。以下の「断片 1」を見てほしい。この場面では、A さんの生活習慣について話している場面で、学生③が A さんに現在のことについて、起床時間はいつなのかを質問しているところから会話が始まる。しかし、学生③の発話は特に過去のことに関及していない以上、現在の状況について質問しているようにみえるのに対して、A さんは、グループホーム B に入る以前、昔の状況の話をしている。この食い違いにまずは注目してほしい。また、アの部分にある「きつい質問じゃなあ」の部分や、イの部分の「ちょっと言いにくい」という様な表現を使っているところにも注目してほしい。つまり、A さんは、自分は道徳を知っているが、自分の行動が道徳的ではないことをも知っているとして主張してい

るのである。自己を貶めつつ、道徳を知っているということをも同時に主張することの高度さは特筆に価する。また、ウの部分で「つらいのは～」とあるように A さんが突然苦労話を始めるところも興味深い。他にも、A さんが会話中に見せる笑いの性質にも以下触れることで、グループホームの中で「認知症」の入所者が示しうるコミュニケーション上の能力を相互行為分析的に、確認していきたい。

2 - 2. 会話の分析

〈断片 1ⁱ〉生活習慣について話している場面

日時：7月27日 18:39:04～

場面の参加者：A さん…A、教員 K…教、学生①…①、
学生②…②、学生③…③

◎場面の説明

堀江が A さんに(現在の)起床時間は何時ぐらいなのかを質問しているところである。写真下のトランスクリプトで、矢印がついている行が私たちが注目した点である。



▽ 6:39:04～

01③ 朝は何時ぐらいに起きてるんですか？

- ア→ 02A きつい質問じゃなあ；[Ahaha[hahaha
 03① [Ahaha[ha
 04② [Ahaha[ha
 05③ [あ：：：]
- 06A いや、宵にな、11時12時までお人が来て去なんⁱⁱ人があるでえ。
 07③ はあ：：。
 08A 話や[したら。
 09② [へ：。
 10A 早去んでつたと[は言えんでえ。
 11② [Ahaha[ha
- イ→12A [私も会社辞めとるけんなあ。遅おに12時前まで人が
 きたらああこりやいかんもう寝る時間じゃけん去ぬわなあと思う（ ）
 帰るでえ。ほなけん朝はFufu ちょっとと言いにくい、9時まで寝よ[るFufufufu。
 13② [Ahahahaha
 14A 誰っっちゃ寝て怒る人ない[けんなあ。
 15② [あ：：]
 16A 母さんがおるだけで誰っっちゃ、私と2人やけんなあ。うん。
- ウ→ 17A (8.0秒) つらいのは私山なんですよ。よんとう山っていうな、山のふもとから
 学校通ったけん遠かった：：。うん。
 18① 学校まではどうやって行ったんですか？
 19A ん？もちろんタクシーや。
 20① タクシー？
 21教 テ、タクシー。てくてくてくてくて[く。 [タクシー。
- エ→ 22A テクシー。Fufufufu [((Aさんが手を叩く))
 23① [Ahaha[haha[hahahahaha[haha
 24② [あ；ha[haha[hahahahaha[ha
 25③ [あ：[：]
 26A [ごめんなさい
 27① テクシー。えっ、じゃあどれぐらいかかってたんですか？
 28A 40分から45[分かな。一生懸命走るように行つてな。
 29② [え：：]
 30教 ((遠くの職員に向かって))[誰もいないです。
 31① [毎朝歩いて。[40分ぐらい。
 32A [うん。
 33A ((Aさんが振り返りながら))どしたん？

- 34 教 誰か探してるんですけど、誰も今スタ、スタッフさんい、あつ、そちらいらっ
しゃいま：す。なんか、よっ、誰か呼びにいらっしゃいました。
- 35A あつ、この人はこの事務員さん。
- 36 教 あつ、そうですか。
- 37A うん。
- 38 教 呼びにいらっしゃいましたけど。
- 39② (4.0 秒) 早く歩いて 40 分ですか？
- 40A 40 分ではちょっと胸がせこいⁱⁱⁱな。うん。

3. 考察

3-1 道徳的規範と隣接対の秩序

以下、「断片 1」からみてとれることを少し詳しく確認しておきたい。私たちが、現在の
ことについて、「朝は何時に起きていますか？」と質問すると、A さんは、「きつい質問
じゃなあ」と口を濁しているところから、これが答えにくい質問だと A さんが受け取った
ことが伺える。また、イの部分の「ちょっと言いにくい」という発話から、自分が 9 時ま
で寝ていることが道徳違反であることを自ら主張している。このことから、早起きが規範
的に適切なことであるとわかっていることを A さんは示しているが、実践はできていない
ことをも A さん自身は同時に表示している。また、「ちょっと言いにくい」などの会話から
入っているところから、1つ1つの発話に聞き手の関心を持たせることに成功している。

その上、アの部分の発話において、グループホームでは 23 時以降という遅い時間帯まで
来客が在所しているとは考えられないので、A さんが話している状況はグループホーム B
に入る以前のことだということが分かる。A さんは今の状況についての質問に対して昔の状
況について返答している。しかし、時制的にはこちら側の期待する返答とは異なっている
ものの、コミュニケーション的には質問に答える隣接対の秩序を守っている点で最低減の
レベルにおいて対応しているといえる。つまり、私たちが「それは昔の話ですか？」のよ
うに聞いたり「朝は何時ぐらいに起きてるんですか？」という形で問い返したり、質問の
初めに「現在は」という言葉を入れて深く追求したりしていないので、トラブルがなく、
話の流れとしてはスムーズに流れている。つまり、会話の呼応関係が成立している。とこ
ろで、おそらくこのような生活状況についての質問は、身内やグループホーム内ではされ
ない質問である。スタッフは通常のグループホーム内のスケジュールを知っているからで
ある。したがって、日頃話しなれていないことを訪問者である学生が聞いているというこ
とができるであろう。このように話し方のストックがない場合には、その場で答えを作り
出さなければならないが、もしかしたら、そこにおいて「認知症」であることが影響して
今のことが分からないので昔のことを相手に話して、誤魔化している可能性もある（朝起
きる時間の他にも、就寝時間などの会話でもよく似た会話があった）。

3-2 苦労話を使った話し手のテクニック

さて、ウの部分では、私たちの質問からではなく、Aさんの発話から会話が始まる。この発話の冒頭の「つらいのは～」の部分で、Aさんがこれから話す内容が苦労話であることが予想できる。誰かが苦労話をする場合、周りには必然的に注意力を上げてその話を聞くことになる。つまりここで、Aさんは人に苦労話をする事で相手の気を引くテクニックを使っていると考えられる。

その後の会話において、「テクシー(てくてく歩いていくこと)」という言葉がでてくるが、教員Kはその言葉の意味を知っていたが学生①と学生②は知らなかった。エの部分でAさんが笑って手を叩きながら、「ごめんなさい」と言っている。このAさんの発話は、相手に分かりづらいことを言ったので謝っていると考えられよう。つまり、Aさんにはこのような相手の理解範囲を答えたことをいったと理解して謝罪するコミュニケーション能力があるといえよう。この場面は、Aさんが相手の理解力を把握しながら自分が発すべき言葉を選択すべきであったにもかかわらず、そのことができていなかったというAさんの無能力を証明する場面であるともとれるが、教員が「テクシー(テクテクと歩いていくこと)」と付け加えたことを受けて、そのクレームに対して適切に謝罪する能力を持っていることの、つまりはAさんの有能さの証明の場であるともとれる。

また、Aさんの苦労話の途中で、教員が遠くのスタッフに話しかけているのにAさんが気づき、33Aの発話があつて話題がいったん中断されるシーンがある(38行目まで)。まずはこれにより、Aさんは会話をしながらでも周りの状況を見ていることが分かる。その後、沈黙があり、39②が苦労話に話題を戻しても、Aさんはすぐに答え得ている。つまり、主たる話題(トピック)の継続と、それに比べれば従たる存在である話題の挿入をその構造の形式ごと、Aさんは理解しているといえるのである。これらのシークエンスなコミュニケーションを適切に遂行していく能力において、Aさんの示しているの能力は十全なものであると言えよう。

3-3 笑いの性質

ところで、Aさんは会話の合間に時折笑いを見せる。以下しばらくはこのことに注目して分析を行っていくことにしよう。高山・千田(2003:151-2)は、認知症患者の笑いの質に関する研究を行っている。その方法は、中等度・重度痴呆患者5名が対象者で、観察した結果から彼らの笑いが生じた状況を抽出し、次のように分類している。

- ・ 内面世界優位の笑い(思い出し笑い、空想的笑い)
- ・ 対人的一方向的笑い(遠くの人を見ての笑い)
- ・ 他者対応的笑い(不意をつかれた反射的笑い、挨拶的笑い、愛想笑い、照れ笑い(防衛的、羞恥心的)、ごまかし笑い)
- ・ 相互関係の中での笑い

この研究により高山・千田は、「重度の患者でも[他者]対応的笑いは最後まで残っており、これは痴呆が進行して人格が崩壊してゆく過程での彼らなりの自己防衛的な力の現れとも考えられる」(高山, 千田, 2003 : 152)と主張している ([]の内は本論文の筆者による)。イの部分の「ほなけん朝は Fufu ちょつと言いくい、9時まで寝よる」という発話中の笑いは、高山・千田 (2003 : 152) の分類に依拠するならば、他者対応的笑いの中の羞恥心的照れ笑いにあてはまると考えられる。しかし、上記でみてきたように相互行為分析的には、自らの道徳的規範運用能力を誇示する“自己主張的笑い”であると見なすことも可能であるように思われた。

また、エの部分の「タクシー。Fufufu」という笑いの後、全員が「Ahahahaha」と笑っている部分も興味深い。ここでの笑いの展開を少し詳細に述べると、まず A さんが「もちろんタクシーや」と返答しているが、学生①には「タクシー」の意味が分からず、そして聞き間違えたと思ったらしく「タクシー？」と聞き返している。その後、教員 K と A さんの言葉が同時に発せられ、自分が期待する反応がされなかったことと、自分の答え方が相手に分かりづらかったことに対しての申し訳なさを表示する形で A さんがまず笑い、つられて全員が笑いを共有している。この笑いの連鎖が何を意味しているか考察するにあたっては、Glenn を引いての檜田の主張が参考になる。すなわち「ここでの笑いには、Glenn (1995:51) がいうところの、自分自身に対する笑いから、共同的な笑い[へ]の移行が起きているといえよう。この様な笑いの移行が起きている場面は、その場に集まっている人全体の連帯が最終的には獲得されるような場面であり、そういう場面の契機として、自分自身に対する笑いが最初になされ、その笑いが、共同の笑いを励起する、という形が取られている。」(檜田, 2010 : 10、[]内は本論文の筆者による)。ここでの共同的な笑いは、その場にいる人々が、その会話についての理解を共有しているということの表示とみなせるのである。ということはここで、直接的には「タクシー」という言葉の意味の理解がかなり難しいという理解が共有されているということであり、間接的には「聞き手の理解できる程度を配慮して、話し手はその話の難度を調整しなければならないが、今回の場合それに話者 A さんは失敗した。そして、そのような失敗は、謝罪に価することだが、その謝罪すべきであるという「正しい」理解に A さんは率先して達している」という理解が共有されているともいえるのである。01③で学生③が現在の起床時間について聞いているが、06Aで A さん昔のことについて話し出す。ここで、学生③は自分の質問の主旨とは違う答えを A さんがしているので、戸惑い、07③のような曖昧な反応をしている。A さんはそのまま話を続け、11②では学生②が笑う。ここでの学生②の笑いは上記で述べた共同的な笑いではないが、A さんの話を少なくとも相互行為的には適切なものとして理解しているという表示をしているものなのである。

檜田 (2010) の Glenn (1995) 理解によると笑いには、相互行為上の理解の共有を表示する機能がある。実は、理解の表示は簡単なことではない。例えば、会話においてオウム返しをすることは、理解の表示として十分ではない。内容を理解していなくても、人は「オ

ウム返し」をすることができる。したがって、むしろ、会話を理解している人ほど、相手の言葉と違った言葉で発話を返してくる。ただ、どの程度の違った言葉までが理解の表示として認められるかは微妙である。それに比べて、笑いは同時に発話ができ、理解の表示の示し方として簡便である。言語学は、意味論 Semantics、構文論 Syntax、語用論 Pragmatics の3つに分類することができる。ここで我々が言及している笑いは、この3分類でいうと、語用論の分類に当てはまる。語用論とは、実際どんな場面でどのように言語が使われているのかというところに視点を置いている学問であるが、その立場から笑いを考えることは、相互行為上の意味を考えることであり、エスノメソドロジーと親和性がある。

また、高山・千田（2003）による笑いは、言語学で言う意味論でその理解を表現しているが、語用論の立場から見ると、我々の視点と接続を踏むことができる。まず、一つ目の立論は、4つに分類したうちの下二つが相互行為的であり、他者対応的笑いと相互関係の中での笑いが認知症者に長く残っていることは、我々の観察と一致している。これは、すなわち Glenn（1995）がいう相互行為上の笑いと同一視点で、Aさんのコミュニケーションから伺える笑いと同一ものが長く残っているということである。要するに、このAさんの会話に見られる笑いは、Glenn（1995）が述べている相互行為上における理解の表示で説明されるとともに、高山・千田（2003）が分類している他者対応的笑いと相互関係の中での笑いについての議論とも接続のよいものだといえるのである。

4. 日常生活について

4-1. コミュニケーション上の適切さ

ここでは、Aさんの日常生活について話をしている場面で、学生①がAさんにいつもお風呂は何時頃入るのか質問しているところから会話が始まる。Aさんが答え、学生が対応するこの30行強の会話から、Aさんが生活をするにあたって道徳的に守るべき規範を知っており、少なくともAさん自身道徳を気遣いながら振舞っていることを主張しようと思っていることがわかる。また、この場面ではAさんが学生たちに対して気を配っているところが伺える。この第4節で私たちは、Aさんが自らの行動の道徳性を主張することで、同時に、自らがコミュニケーション上適切に振る舞う能力を持っていることを表示することに成功していると主張する。以下はその論証である。

4-2. 会話の分析

〈断片2〉日常生活について話している場面

日時：2009年7月27日19:05:22～

場面の参加者：学生①・・・①、学生②・・・②、学生③・・・③

◎場面の説明

断片2も断片1と同様に、日常生活について質問している場面である。ここでは、学生①がAさんに(現在いる施設では)お風呂には何時ぐらいに入っているのかということ質問している。また、断片2のトランスクリプトにも、断片1と同じように矢印をつけているが、その矢印の行が私たちが注目しているポイントの行である。



▽7:05:22 PM

写真2：日常生活について話をしている場面

▽ 7:05:23～

01① いつもお風呂は何時ごろ入られるんですか？

オ→ 02A それわな：私ちょっとその話が全然違うんやけどな：最初はな、子どもが寝とったら親がな、ちゃんとしよったんやけど、みんながいった一番後でしかかな、さきさきはでしやばらんようにしよるん、親にいわれとったけんな、入れんでえなあ。

03① ふ：ん((うなずく))

- 04A ()
- 05① ふ：ん、(?)
- 06A うん。
- 07A (20.0) ((Aさんが振り返る))
- 08A (11.0) ((Aさんが再び振り返る))
- 09A 隣の人が早自分の部屋に入ってしもた。
- 10② そうですね[: Ahahaha
- 11A [Ahaha
- 12A () よそと違うけん。あんたら大変で：徳島までこれから帰るんだったら。
- 13② Fufufufu
- 14A 明日遅刻せんようにせな[なあ。
- 15① [Ahahaha
- 16A Ahahaha
- 17A 若いけん頑張れるわ[なあ。
- 18① [((うなずく))
- 19A うん。((うなずく))
- 20① も：いつもこの時間帯になったら部屋に入られるんですか？
- 21A うん。もうこの時期みんな去んでしまつて部屋に入つてしまうんよ。
- 22① Aさんはいつもまだテレビ見よんですか？
- カ→ 23A ((後ろを指しながら)) いや、ここの事務員さんが誰かおる限りは起きとるけんな。
- 24① そうなんです[か：。
- 25A [うん。
- 26① へえ：。
- 27A 私は向こうの一番：部屋で1人な、おるけんなあ。((指差しながら)) あのチューリップの部屋。
- 28① ああ：((うなずく))
- 29② (17.0) ((後ろを振り返りる)) いつもここ座つとんですか？ここの席に。
- 30A ここ私の席。
- 31② あ：もう決まつとん。

5. 考察

5-1. 道徳規範の実践

Aさんにいつも何時にお風呂に入っているのかを聞いたところ、オの部分より「私ちょ

っと話が全然違うんやけどな～」と口を濁しながら話し始めている。Aさんは嫁にあっており、嫁はお風呂は最後に入らなければならないと親に言われていたので、いつも最後に入っていたと（この部分ではおそらく）話している。これは、内容は別にして、コミュニケーション的には大変適切な発話であるといえよう。なぜなら、Aさん自身が、質問－回答連鎖における隣接対を分かっていることの表示であると見てとれるからである。質問－回答連鎖における隣接対の観点から見ると、学生①の01①の質問は「時間」に関する質問である。このように第一成分が「時間」に関するものであるとき、Aさんが話すべき回答、すなわち第二成分は「時間」に関するものとなる。しかし、ここで隣接対を理解しているにもかかわらず、なぜかAさんは回答の第二成分を「時間」ではなく、「順番」に置き換えている。要するに、本来答えなくてはならない「時間」の回答を、理由は別として、とにかく答えることができないから「時間」に近い「順番」に置き換えて説明しているのである。このやりとりを我々はどのように理解すればよいのだろうか。これはコミュニケーション能力の発揮という観点から答えることができるように思われる。オの部分の「私ちょっと話が全然違うんやけどな～」というAさんの発話は、言い訳をしつつも入浴順番を会話上の利用可能な資源として話しているように見えるのである。これは、Aさんが、隣接対は強い規範力を持っているから、回答部分の記憶をたとえ忘れていても、できる限りの適切さで答えなければならないと適正に判断したということの意味しているのかもしれない。すなわち、高度なコミュニケーション能力を持っているという判断をAさんに下すことができるように思われるのである。また、Aさんが「さきさきはでしゃばらんようにしよる」と話しているところから、Aさんは自分を第一に考えるようなことはしない性格であると自ら主張しているように見えるが、このAさんの道徳規範の実践に関する主張を私たちはすんなり受け入れてこのトランスクリプトを読むことができる。すなわち、少なくともその程度はAさんは会話にリアリティを持たせることに成功しているのである。さらに、オの部分の会話から、日常生活において、Aさんは嫁に行った立場なので、お風呂は皆が入った後に入らなければならないという規範を知った上で、それをAさんが実践したと主張しているといえる。このようにAさんが話している道徳規範は家族についての規範であり、かつ、断片1では実践しそこなっていたがこの場面では実践してきた規範として論じることに成功している。

5-2. 相互気配り

長い沈黙があった後に、09AでAさんが沈黙を断ち切るように話を始める。そのときに出てきた会話「隣の人が早自分の部屋に入ってしもた」で、いつも19時には部屋に入ってお休みになっているという職員さんの話から、学生は「もう早く帰ってほしいな」と遠まわしに言われたと解釈した。しかし、カの部分の「いや、この職員さんが誰かおる限りは起きとるけんな」という発話から、「早く帰って」とは言っていない。むしろAさんは、私たちに対して気配りができていると考えられる。また、カの部分の発話は、長い沈黙を

断ち切るために、とっさに出てしまった発話ともとれる。

カの部分や 27A の発話は、A さんから話し出している。この会話の他にも、A さん自身から会話を作り出していることから、積極的で自分から話をよくする人であると分析する。その会話で、18 時半から 19 時半の間に「ご飯は食べてきたん？」という学生の晩御飯に関して気を配っている発話は 3 回あった。また、この 1 時間の間に「帰りはどうやって帰るん？」「どこまで帰るん？」「徳島市内までどれぐらいかかるん？」という発話は全部で 9 回あった。この何度も繰り返される A さんの発話は、一見、認知症患者という立場からトラブルが起こっていると見がちだが、03①「ふ～ん」という返答や 10②の笑いを引き起こし、相互行為として 1 つ 1 つの展開を受け入れていることから、A さん単独でしているのではなく、学生たちも加わっている相互気配りであるということが分かる。A さんは、学生をお客さんという立場で場面にふさわしいコミュニケーションをしていることから、この会話は無能さだけでなく、トラブルを最小化にしているという意味で有能さにもなっている。ここでいう場面は、学生らお客さんだが、樫田（2006：173）の場面では、スタッフの人であり、同じことを述べている。養護老人ホームの患者は、スタッフに爪をきってもらうのに「あんたら忙しいけん、自分でするからかんまん」とスタッフが忙しいことに配慮を示している。A さんの場合は、客人向けの配慮の示し方をしており、コミュニケーション上の適切さは十分に確保されている。また、この発話や 12A の「あんたら大変で～」という発話も A さんなりの学生に対する相互気配りだと考えられる。

6. まとめ

これまで見てきたように、私たちは「道徳的規範」「苦労話」「笑い」「相互気配り」をキーワードに分析を行ってきた。その分析の中で、認知症患者は認知症独特の特徴も持っているが、認知症が始まる前に形成し、保持していたコミュニケーション能力も持っていることがわかった。認知症患者は、適切な場面さえ提供されるなら、認知症特有の性質（かもしれないもの）と既存のコミュニケーション能力とを巧みに組み合わせて利用し、相互行為を適切化していく力を持っているように思われた。そういうことの結論として主張して良いだけの証拠をデータの中に見出し得たように思われた。

最後に、今回の報告書執筆にあたり、貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力をくださった、信州大学医学部井口高志氏と京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻木下衆氏、また調査協力の依頼に応じてくださったグループホーム B の関係者の方々、入居者の方々には深く御礼申し上げたい。

参考文献・引用

高山成子・千田友子（2003）「軽度・重度痴呆症患者における笑いの種類と笑いを引き

出す方法についての研究』『笑い学研究』, 10, 149-152, (助成研究報告, 7月19日, 13:00
～13:30, at 401)

榎田美雄 (2010) 「病院に行く—医療場面のコミュニケーション分析—」, 好井・串田編
『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』第2部第7章, 世界思想社

榎田美雄 (2006) 「『弱者の抵抗』の非個人能力主義的解釈—論理的達成と会話的達成」『ソ
シオロジ』, 51-1 : 171 - 177

-
- i 断片1において全ての固有名詞は匿名化している。
 - ii 去(い)なん→去ぬの否定形 去ぬ→方言で帰る、戻るの意。
 - iii せこい→方言で苦しい、大変の意。

第4章

相互行為におけるトラブル回避の手法 —経験を参照しないやり過ぎの会話について—

小川拓也

戸川友希

0.はじめに

本調査は認知症患者のグループホームにおける学生と認知症患者との会話に注目し、認知症患者が会話を行う際に実際に使用しているコミュニケーション上の手法を解明することを目的としている。そのため、この場面の参与者である認知症患者Sと、学生のOとTの三者による会話を以下にトランスクリプトとしてまとめている。また分析を精密に行うために連続する場面を二つに分けて、更に考察についてもSの特徴的な行動として見られた三つの点から述べてある。

1. カテゴリー連関と相づちによるトラブルの回避

1-1. 場面紹介

〈断片1〉 経験を参照しないやり過ぎの会話

日時：2009年7月27日

参与者：O…学生（左端） T…学生（右端） S…入居者（中央）

状況：それまでSと話していた学生二人（写真奥）が夕食を取るために席を外し、それと代わって学生TとOが席に着き、Sと会話を始めるシーン。



写真1 会話のはじまり

2009年7月27日 PM 6:02:55～

1 T : Fufufufufu

2 S : 皆、(二階いったんだらうかい?)

3 T : ご飯食べに行きました。

4 S : ふ : : ん。

5 T : すぐ戻ってきます。

6 S : 皆は食べてきたん?

7 T : 私らは食べてきました。

8 O : はい、食べてきました。

9 S : (3.0) ° 私は、よばれた↓°

10 O : なに食べてはったんですか?

11 S : (4.0) なに食べたんじゃろう、ご飯とおかず。

12 O : ふ : : ん。

13 S : おかずなんじゃったんじゃろう、知らん。

((O が微笑む))

14 S : Fufufufufu

15 O : でも、おいしかったんですよ?

16 S : おいしかった。

17 T : おいしかったですか?

18 S : へ : : ?

19 T : おいしかったですか?

20 S : おなかすいとるけん、なに食べたって [(よおわからん)]。

21 T : [Fufufufufu、そうなんですか? へえ : : 。

((T がテーブルの上の写真を指さす))

22 T : これはなにした時の写真なんですか? ピクニックいつてきたんですか?

23 S : ° キュウリとったん↓°

24 T : キュウリとってますねえ。

25 S : ね : : 。

26 T : ね : : 、ふ[: : ん。

27 S : [どこで (握りよったか) 知らん。

28 T : え?

29 S : キュウリ握っとんの知らん。

30 T : キュウリ握ってますねえ。

31 S : ね : : 。

32 T : ピクニック、楽しそうやねえ。

1-2.考察①：経験を参照していないSの発話とその効果

まず前提として、私たちの会話は自らの経験を参照した発話によって行われている場合が多い。これは自らの会話を思い出していただければ分かることだが、私たちが会話をすすめる際には直接的に過去のことについて話している場合や、そうでない時にも過去の経験をもとにして発話をしている場合が多い。この場面においても前半（1行目から21行目）では主にその日の昼にSが食べたものについて学生が訊ね、Sが自らの過去の経験をもとにしてそれに答えるという形で会話は進行している。またTがテーブルの上の写真を指さしたところから始まる後半（22行目から）においても、Tが写真をもとにしてSの経験について訊ねるという形で会話が始められた。これらは典型的な経験参照型の会話であると言える。しかしここで問題となるのはSが決して軽くはない程度の認知症患者であり、自らの経験を参照した会話をうまくすることができないということである。「臨床的にみても、年をとればだれにでも起きる記憶障害と痴呆を病む人のそれとでは、明らかに異なる特徴が見られる。……痴呆を病む人は経験したことの内容を忘れるだけでなく、経験したこと自体を忘れる。」（小澤：2003：f 3）からも分かるとおりの認知症患者の記憶障害の場合、経験を参照した会話をするのは難しい。またこれは認知症患者と関わったことのある人ならばその多くが感じることでもある。相手が中程度以上の認知症患者ならば、その人は数分前のことを思い出せない場合も多く、それがそのままコミュニケーション上のトラブルへと発展してしまうことが往々としてあるのだ。ここではSがどのようにしてそのようなコミュニケーション上の危機的状況を乗り越え、またトラブルを回避しようとしているかについて考える。

まず初めに、Sは6行目において自らのOとTへの問いかけの後の自然な流れとして、自分もすでにお昼ご飯を食べたということを9行目で述べている。しかしここでSの声がとても弱々しいことから、Sは自分が食べたもののことを、場合によっては食べたこと自体も覚えていないのではないかと思われる。このように、食べたこと自体を忘れるということは先の小澤の引用にもあるように、認知症患者としては決して珍しいものではない。むしろその後の対処の手際よさからも、Sにとってはこれが日常的なトラブルであるのではないかとも思われる。そしてここではそのようなトラブルをどのようにSが回避しているかに注目する。その後Oによって何を食べたのかと訊かれて、Sは「ご飯とおかず」と返答している。これは健常者同士の会話では間違っていないがいささか不適當な返答である。本来ならば自らの経験を参照して、食べたものの詳細について答える場面であるはずだが、Sにはうまく経験を参照することができないので、「ご飯」という話題になっているテーマからのカテゴリー連関によって「おかず」という単語を導き出して返答をしたのではないかと考えられる。しかしその後もOが頷くことでSに更なる発話を促したために、Sはおかずは何を食べたのか覚えていないということを「おかずなんじゃったんじやろう、知らん」と白状する。そのSに対してOは更に「でも、おいしかったんですね？」と、ご飯についての経験参照の問いかけをしまい、Sはまたしても経験を参照しなくてもす

む、やり過ぎしの返答である可能性のある「おいしかった」と答えている。¹その後の T による「おいしかったですか？」という追及の後にも、20 行目において S は「おなかすいとるけんなに食べたって…」と、その場を乗り切る上では実に効果的な返答をしている。これは経験を参照してこそいないが、まるで経験を参照しているかのように聞こえる、まったく不自然でない極めて上級な返答であると言える。

またこの場面では、S の会話をうまく進めようという高い意欲がうかがえる。O と T が経験を参照できなくては答えにくい質問を繰り返す中でも、S はまずそのことについて自分は覚えているかのように振る舞う。そうしてそれがもとで会話が破綻してしまいそうになったその後、一度は自分が昼に何を食べたか覚えていないということを表示しても、すぐにまたカテゴリーに基づきその場に応じた返答をしてトラブルをやり過ぎしている。また最後の 20 行目における巧みな返答もあり、会話は全体としてよどみなく流れているという点にも注目したい。

1-3. 考察② : S の無難な相づちと会話のテンポ

後半においても T が目の前の写真をもとにして S にその経験について訊ねているのだが、23 行目の S の発話の弱々しさやその内容が写真を見たそのままのものであることから、S は自分の姿の写っている写真のその時の出来事についても覚えていないのではないかと思われる。この時に S は経験を参照した返答ではなく「キュウリとったん」と他人事にも聞こえるような、目の前の資料をもとにした返答をしている。そうした S の発話に対して T が同意を示して更なる S の発話を促そうとするが、S は 26 行目において「ねー」と無難な相づちによってその場をやり過ぎそうとしている。しかし T が更に相づちを返して S の発話を促す中で、S はとうとう 27 行目とそれに続く 29 行目の「キュウリ握っとんの知らん」という発話によって、写真に写っている自分がキュウリを握っていることを覚えていないことを表示する。その後 31 行目においても S は無難な相づちをすることで経験を参照することが求められる場面をやり過ぎそうとしている。

前半からも分かるが S は経験を参照して返答を求められる場面において、カテゴリー連関や資料をもとにして答え、また時には相づちを打つことでうまくその場を乗り切ろうとしている。またこの相づちについてだが様々な先行研究でも認識されているとおり、それは無意味なつなぎの語句であり、それらを多用するのが痴呆(認知症)の言語障害の特徴であると考えられる。しかしこの場面では発話のそれ自体には意味はなかったとしても、会話全体の中でのその発話の果たしている機能に注目してほしい。S は自分が答えにくい経験参照の質問をされた時に、分からないということを表示するのでも、カテゴリーから推測するのでもなく、相づちを打つことによってその場をやり過ぎしている。これは初歩的ではあるがれっきとしたトラブルを避けるための手法であると考えられる。また S は経験を参

¹ 同語反復は内容を理解していない場合でも可能な返答なので、やり過ぎしの言い回しの可能性がある。

照する問いかけに対して、最初の一度は上手くやり過ごすための返答をしているのだが、それに続く質問や追求そして沈黙に対しては、割と早めに実は自分が覚えていないということを表示している。健常者と認知症患者との会話において認知症患者が自らの面子を維持しようとして、自分でも覚えていないことをまるで覚えているかのように発話するあまりにそれがもとでトラブルが発生するケースはよく知られているが、Sの場合は逆に見切りを早くつけることによって上手くトラブルを回避している。しかし単にすぐさま覚えていないことを表示してしまうのでもなく、できるだけ面子を維持しながらも、それがトラブルに発展しそうになるとそれを察して手法を変えている。これらはたとえ意識的なものではなかったとしても、Sの会話への意欲が高いことによって起こっていると考えられる。また一見して会話は全体的にスムーズに進行していることから S は認知症ではあるがコミュニケーション能力が一概に低いとは言えなく、むしろ独自の方法によってうまくコミュニケーションを成立させていると考えられる。

2.二重のトラブルとその回避

2-1.場面紹介

〈断片2〉 Sの文字の読み間違い

状況：先ほどの会話の場面が続いて、学生二人と S が会話をしている。右端の学生 T が写真を指さして S に問いかけを始めるシーン。



写真2 写真を指さす T

2009年7月27日 PM 6:04:30～

33T：((テーブル上の写真を指さして)) この近くなんですかね？

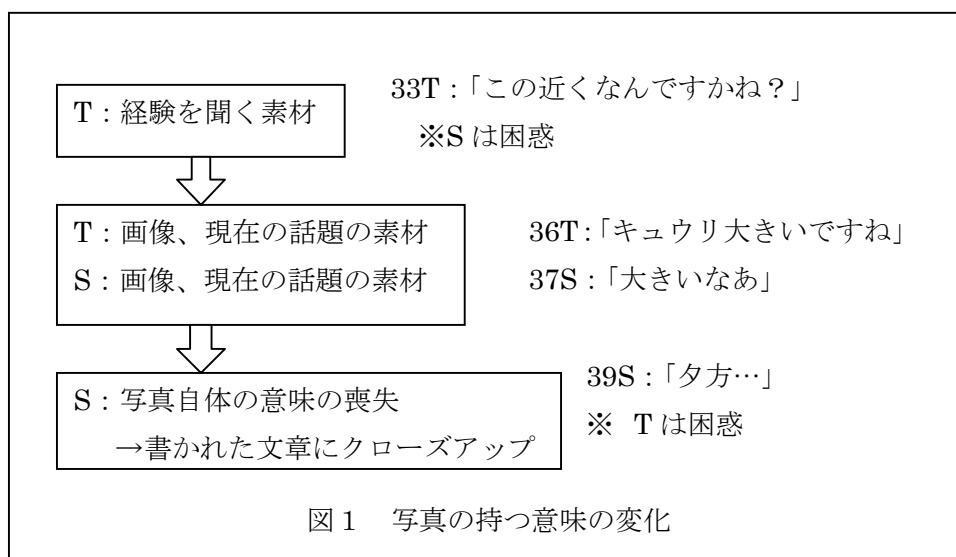
- 34S : ()。
- 35T : ほ : : ねえ。
- 36T : Ahahahaha、キュウリ大きいですねえ、これ。
- 37S : 大きいなあ。
- 38T : 大きいね、すごいねえ。
- 39S : 夕方 : : :
- 40T : ん : : ?
- 41S : 夕方は水道が止まります。
- 42T : Ahahahaha、夕方は水遣りをしますよね、これ。
- 43S : Fufufufufufuf [fufufu
- 44T : [Ahahahaha
- 45T : ほうやねえ。 ん : : 。
- 46S : 何と読むやら分からん字 ()。
- 47T : これですか? ((写真に書かれた「遣り」という字を指さして)) 難しいですね、この字が。 Fufufu、今日はずっとここにおるんですか? [朝から。
- 48S : [ん : : 朝からおる。

2-2.考察③ : 二重のトラブルとそのやりすごし

この場面ではまず、33行目でTがテーブルの上にあった写真(アルバム)を指差してSにその経験について訊ねるのだが、34行目ではTの想定した経験についての返答は返ってこない。その後でTはSに写真を見たままで経験を参照しなくても答えられる「キュウリ大きいですねえ」という問いかけをすると、Sは「大きいなあ」と問題のない同意の返答をする。しかしここでSは39行目において突然に「夕方…」という発話をする。それを聞いたTはSに対して疑問を表示するがSは更に発話を続ける。Sは写真に書いてある文字自体を読み上げていて、それと同時に書かれた文字を読み間違えてしまっているのだということにTは気づいて、42行目においてそれを指摘する。するとSは笑い出しTもつられて笑ってしまう。その後Sは46行目において「何と読むやら分からん字…」と自分がどうして間違ったのかを弁明しており、自分の間違いには気づいていると思われるのだが、なぜ急に文字を読み始めたのかについては明かされていない。

この場面でまず興味深いのは経験参照の話題には返答できないSだが、写真を現代的な話題の材料として質問を振ることによつて的確な返答ができているということである。ここでは最初、Tは経験を訊ねる素材として写真を使いSの経験について聞こうとしているのだが、36行目においてTが質問の中身を写真の画像をそのまま題材としたものに変えることでそこから写真の持つ意味が変化し、写真自体の画像についての話になっている。しかしその後の39行目から突如として始まるSの読み間違いから、話題は更に写真からその側に添えられている文章へとシフトする。特に後のSの読み間違い発話による会話の内容

の変化は急な一方的なものであり、Tが文字の付近を指さしていたということもあるが、ここでいきなりその文章を読み始めるというのは明らかに一般的な会話の規範からは逸脱しており、必ずしも自然な会話であるとは言えない。これはある意味ではコミュニケーション上のトラブルと言えるだろう。事実、40行目においてTは困惑を表示している。しかしこの場面において会話は問題なく進行しているということにも留意しておく必要がある。



またSの読み間違いそのものについてだが、これも確かにトラブルである。突然文章を読みあげた上に、その文章が間違えたものであれば当然他の参加者は困惑してしまい、状況を理解するのにもより時間がかかるだろう。つまりここではSの中で写真の持つ意味が変化して他の参加者と認識を共有できていないということと、更にその文字を読み間違えてしまっているという二重のトラブルが起こっていると言えるだろう。しかし断片1からも言えるように、トラブルが起きた後のSによる43行目の笑いには問題のごまかしの効果もあり、また46行目のSの発言によっても問題は特に問題として表面化せずに会話は流れている。ここにSの会話の巧さがあると言えるかもしれない。

この場面が大いに興味深い理由は、なぜSは急に写真に書かれた文字を読み始めたのかということにもある。これにはいくつかの理由が考えられる。たとえば、グループホームという環境の中で、トレーニングやテストの一環として日常的に指差された文章を読むという習慣があったのかもしれない。つまり反射的な行動であったという可能性だ。また、経験を参照した会話しかできない故に、Sは目の前の写真をもとにした話題の提供をしようとしたという意味があったのかもしれない。他にも理由は考えられるだろうが、残念ながらどれも推測の域を出ない。しかしここではSが間違えた文章にも注目したい。「夕方は水を遣ります」という文章をSは「夕方は水道が止まります」と読み間違えている。「遣」という字から「道」という字を連想または読み間違えてしまったのだと考えると自然だが、ここにおいてSはただ単に文字を読み間違えたのではなくて、ちゃんと意味の通る文章に

作り上げた上で間違えている。この場面では T によって間違いを指摘されてしまったが、このような間違い方は普段の会話の中では気づかれずにそのまま会話が進むということも多いだろう。この間違いの連想による自己修正の速さとの確さに S のコミュニケーションの巧さを垣間見ることができるのではないだろうか。

3.総括

これまでの考察を見てもらっても分かるとおおり、認知症患者と健常者が会話によるコミュニケーションを行う場合には、どうしても記憶力の問題からトラブルやトラブルに繋がる可能性のある問題が多く起こってしまうものである。しかしだからといって認知症者にはコミュニケーションの能力が無いというわけではない。この場面で見られたように認知症者も自らに残された能力を活用し、様々な手法を駆使することによってトラブルを回避しようと試み、実際にそれが成功している場合も少なくない。もちろん能力の差は認知症者の間にも存在する。ここで紹介したのはあくまで S の事例だけだが、他の認知症者にもその症状の程度の差こそあれ、それぞれに応じた独自の手法が見られる。そしてそれは認知症者のコミュニケーションに対する意欲によって成しえたものだと述べておきたい。

またこの事例では、認知症者のトラブルを避けるための手法について主に言及した。しかしトラブルを避けるという意味では当然ではあるが会話のもう一方の参与者でもある健常者にもその役割を担うことはできる。断片 2 においては T が写真を使って S の経験を訊ねるといふ会話から、36 行目に見られるように経験を参照しなくてもよい質問に変えたことで S は難なく返答することができている。この場面では主に経験参照の話題を健常者である O と T が認知症患者の S に振るといふ形で進められたが、健常者が意識して経験参照でない話題を提供することで自ずとトラブルも少なくなると思われる。会話というコミュニケーションはその参与者達の協力で成しえるものである。一般的にトラブルのもとであると考えられがちな認知症者もまた、会話の参与者として協力してその場を作り上げているということには留意すべきだろう。

最後に、今回の報告書執筆にあたって貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力くださった信州大学医学部の井口高志氏、京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻の木下衆氏、また調査協力の依頼に快く応じてくださったグループホーム B の関係者の方々、そして入居者の方々には心より御礼申し上げたい。

引用・参考文献

小澤勲(2003) 『痴呆を生きるということ』 岩波書店

木下みどり(2004) 「痴呆性高齢者との会話における可能性に関する一試論 — 一事例との会話における発話連鎖の分析から —」 『人間文化研究』 pp.33-50
2010,02,08 URL(<http://ci.nii.ac.jp/naid/110004634401>)

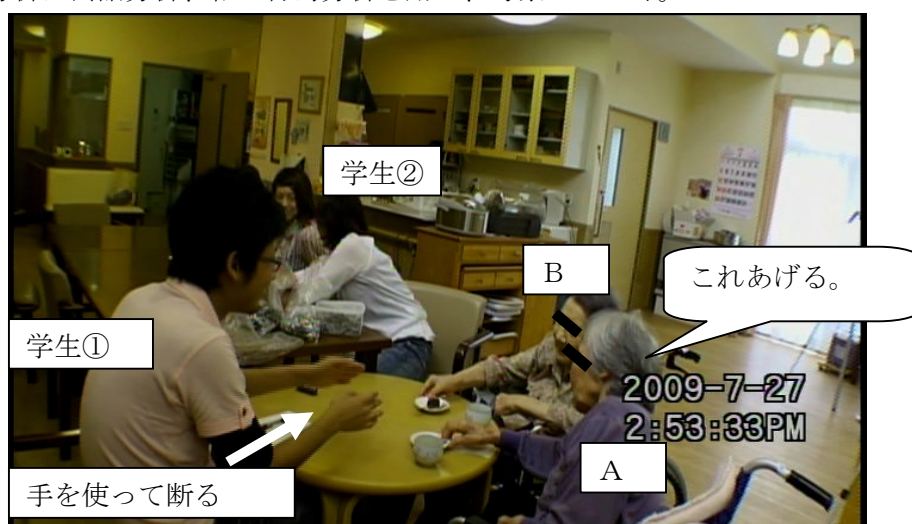
第5章 もてなし規範における入居者／学生（ゲスト／ホスト）の相互行為分析

齊藤雅彦
大上梨奈
尾崎諭

1. 問題関心

本調査では、2009年7月27日、28日にグループホームBにおいて、学生（①、②）と認知症である入居者（A、B）の方との会話を、エスノメソドロジーの立場から会話分析および、相互行為分析を行ったものである。

今回の分析で扱う場面は認知症グループホームにおいてのおやつ時間である。学生が持っていったお菓子が入居者に振る舞われたシーンだ。ここでは、スタッフがお菓子を入居者だけに1つずつ配った¹ことが話題の焦点となる。そのため、14:53:20にBが「みなにあげてくれたらええのに」と発話し、スタッフへの不快感を示す。その後、Aが「これあげる」という発話とともに学生①にお菓子を差し出す。続いて、Bも学生①や学生②にお菓子を差し出すというシーンである（写真1）。つまり、入居者が学生にお菓子を振る舞っている場面だ。そして、最終的には入居者が学生にお菓子を振る舞うことに成功し、学生①、学生②の両者ともお菓子を食べ、入居者の目的は達成される。では、入居者はどのようにして学生にお菓子を食べさせることに成功したのだろうか。この問いに答える為、本分析は会話分析、相互行為分析を用い、考察していく。



▽14:53:33 写真1 学生①にお菓子を差し出すAとB

¹ 最終的には学生にもお菓子は配られたので、入居者分のお菓子の再分配をしていたケースでは、むしろ配布量は均等にはならなかった

2. 予備的考察

2-1. 問題設定—ホスト／ゲストに存在するもてなし規範

では、入居者が学生にお菓子を差し出す行為にはどのような意味を持つのだろうか。入居者は施設にとってのクライアントであり、それ相応のサービスを受けることは至極当然である。実はお菓子は学生が持参したものであるが、そのため、学生にお菓子が配られないことも不思議ではない。ただ、入居者が知らない場合も多分にある。とりわけ、ここで考えられることは、入居者(ホスト)²にとって学生は突然の来訪者であり、お客さま(ゲスト)である。そのため、ここではホストとしての入居者がゲストとしての学生を〈もてなし〉たいと考えるのが自然であり、規範的義務³と言ってもいい。つまり、本分析はホスト／ゲスト間のやり取りにおいて、ホストがゲストにお菓子をどのように食べさせることができたのかを緻密に見ていく。そして、このお菓子を食べさせるという達成が、この場面においてもてなし規範があるということが出来る。つまり、このことは認知症グループホームに住む入居者のコミュニケーション能力を見ていくことにも関連する。

2-2. 規範と行為

ここでは、前節で取り扱った規範と、それに伴う行為についてまとめていきたい。小宮によれば、規範と行為の関係について「規範によって行為を説明するのではなく、私たちが規範をどのように用いて行為をし、また行為を理解しているのかそのやり方自体を研究しよう、というもの」(小宮 2007 : 107) と述べられており、私たちもこの研究法に同調したい。

つまり、今場面ではもてなし規範があるからこそ、入居者や学生が役割に基づいて、行為しているのではなく、どのような行為に基づいて、どのようなもてなし規範が存在するのかを緻密に見ていくことで、もてなし規範における入居者と学生の相互行為を明らかにしていきたい。

² これから入居者のことをホストとする。

³ ホストがゲストにもてなしを考えていると考えられる場面にはもてなし規範があると定義する。

3. 分析①—もてなし規範におけるホストの発話テクニック

ここでは、主に発話に焦点を当てて分析を行なう。いかにホストがお菓子を食べさせようとしているか、それに伴い、いかにゲストが誘いを断っているかについて会話分析をすることで見ていきたい。しかし、今場面では、ゲストのもてなしは失敗に終わる。そのため、ここでは、発話を中心にしたホストの誘いのテクニックを吟味していく。

3-1. 分析視点—もてなすことと遠慮すること

先述したように、この場面ではもてなし規範があるとされるような行為がいくつも見られる。ホストがゲストに対し、もてなしをすることは規範的義務であり、ゲストに無礼があっては、ホストの体面に傷がついてしまう。つまり、もてなすことは好意を示すだけではなく、体面を守ることでもあると考えることができる。また、ここで学生が遠慮することも場面に適切である。理由として、①お菓子は学生が持ってきたものであること、②お菓子は施設に住まう入居者のみに配られたものであることが、まず考えられる。これらは一般的常識から考えられる理由である。では、もてなすという行為そのものについてはどうであろうか。もてなしを受ける側にとって、好意の象徴であるもてなしを承諾することは基本的には優先的に行なわれなければならない。しかし、もてなしをすぐに承諾することには負債感、罪悪感⁴が伴う。つまり、もてなしを受けることは優先であるが、すぐさまもてなしを承諾するのではなく、何らかの断りという緩衝材がはさまれる。つまり、その緩衝材はもらったときの違和を軽減する働きがある。もてなしを承諾しながらも、なるべく負債感が生じない為のテクニックとして遠慮という行為があるのだ。よって、ここで学生が断ることも適切である。つまり、受けとれないことを志向していることが、後で受け取るという行為の適切性を生み出すと考えることができる。

それでは、もてなし規範の中において、ホストにはどのようなもてなしがあり、ゲストにはどのような遠慮があるのだろうか。つまり、ホスト／ゲストの誘い／断りを次節で会話分析をすることで考察していきたい。

⁴ 「遠慮がないと思われる」「礼儀を知らないと思われる」などが相当する。

3-2. 会話分析—誘うことと断ること

〈断片 1〉 1 行目～14 行目

01A 食べときなさいよ

((学生①にお菓子の皿を差し出す))

02① fufu

→03A 若いもんが食べなんだら (*)

((お茶のコップを差し出す))

→04① いえいえ、これたぶん自分がお持ちしたお菓子なんですよ。

((お菓子を指さす))

05A いいや (0.1) [ま：食べない。 (*)

((お菓子の皿を学生①の方へ押す))

06② [あ：：：

((学生①と目を合わせる))

07① いえいえ

→08A (仕事した者が食[べ

09① [いえいえ、それ、み (0.1) みなさん同じような

((Aさんに手を向ける 手で丸を描く))

お仕事された ha んで (0.2) ぜんぜん

((両手をお皿に添える))

→10A わたしやせなんだけん (*)

((皿に手を添えたまま))

→11① いえいえ、も：ぜんぜんぜんぜん

((両手をお皿に添える))

やってることは同じなんで he (0.1) どうぞどうぞほんとお気遣いなく

((両手をお皿に添える Aさんに両手で))

12A はよお食べ (0.2) 若いもんが食べたって

((体勢が後ろへ))

13A

((コップを学生①のほうへ押し出す))

→14A はよ食べなはれた。 (*) これ (スプーンで・すくって) 食べな。

((フォークを持つ 学生①を見る))

*食べなんだら…食べないと

*食べない…食べなさい

*せなんだけん…しなかったから

*はよ食べなはれた…早く食べたらどうですか

まず、注目するのは3行目のAの発話「若いもんが食べなんだら」である。若いもんは学生①を意味する。ここでは、2重の意味が考えられる。年寄りではなく、若い人が食べるべきという志向と、若いから年寄りに気を遣いなさいという志向である。つまり、年寄り：若者カテゴリー対と、先駆者：若輩者という二重のカテゴリー対が見てとれる。しかし、4行目で学生①は「いえいえ、これたぶん自分がお持ちしたお菓子なんですよ。」とあなたに勧められているお菓子は私が持ってきたものだという強い切り替えしがなされる。つまり、もてなしをするホスト／もてなしを受けるゲストというカテゴリー対から、お菓子を持ってきた学生／お菓子を頂いたゲストというカテゴリー対に転換されたのである。さらには、8行目A「(仕事したものが食べ)」や10行目A「わたしゃせなんだけん」と発言する。ここでいう仕事とは、お菓子が配られる前に4人で作業した煮干の頭取り(写真2)である。Aは痛みの為、利き手である右手をあまり使いこなすことができず、作業に積極的に参加していたとはいえない。だからこそ、Aの主張である「わたしは仕事をしていない」はこの場面において適切であるし、Aより作業をした学生①にかかる言葉としても適切である。しかし、9行目の学生①の「いえいえ、それ、みなさん同じようなお仕事された ha んで(0.1) ぜんぜん」や11行目「いえいえ、も：ぜんぜんぜんぜんやってることは同じなんで he どうぞどうぞほんとにお気遣いなく」のように学生①は作業量には差があったかもしれないが、やっている仕事は同じであるとAを気遣いながらも、誘いを断る。

この場面では、入居者は学生をもてなすことを失敗してしまったが、Aのもてなしは終わらない。どのようなもてなしが続くかを以下で考察していく。



▽14 : 27 : 25

写真2 煮干の頭取り

3-3. 動作と発話—お菓子を薦めることと自分を卑下すること

ここではホストの行為と発話 14 行目に着目する。ホストはお菓子を学生に薦めるときに何かしらの発話と何かしらの動作を伴う行為をすることが多い。とくに、発話のみでお菓子を薦めるという行為は今ケースにおいてはほとんど見ることはできなかった。では、その発話と動作が同時に行為として行なわれることはどのような意味があるのだろうか。まず、動作を見ていくと、学生にお皿、コップを近づけるなど、お菓子を学生に薦める行為そのものである。しかし、発話は A の 1 行目の「食べときないよ。」や 5 行目の「いいや (0.1) ま：食べない。」のようにお菓子を直接進める発話だけではない。A の 3 行目の「若いもんが食べなんだら」や、10 行目の「わたしゃ（仕事を）せなんだけん」のように食べてもらいたい意図とは反した一動作とは間逆の一行為を伴う場合が多い（写真 3）。つまり、動作はもてなし規範に忠実に基づいた好意を示しているが、発話はゲストがいかにか学生にお菓子を食べさせるかという志向に基づいていると考えることができる。しかし、14 行目で A は「これ（（スプーンで・すくって））食べな。」と、ともに同じベクトルに志向した動作と行為が初めて為される（写真 4）。（スプーンを持ちながらスプーンに志向した発話をする）よって、これ以降は、動作に重きを置いた分析をしていく。



▽ 14 : 54 : 46

写真 3 お菓子を薦める動作と自らを卑下する A



▽14 : 58 : 00

写真4 スプーンをもつA

3-4. 考察一段階を踏まえた誘い

3節ではもてなし規範をうまく利用するAの誘いのテクニックと学生①の断りのテクニックを見てきた。特に、Aの誘いからはさまざまなトピック転換をするというテクニックが見られた。

まず、Aは3行目において、自らの老いと相手の若さに着目して誘いをした。次に、8行目ではほんの前にした仕事に言及してみせた。そして、最終的には、14行目でスプーンに言及した。これらの誘いの流れは自然でありながら、どこか段階を踏まえていると見ることもできる。詳しく言うと、まずは、普遍的であり、誰にでも理解可能な知識を利用し(3行目)、次には、この場面に参与している者しか理解することが出来ない事象を利用し(8行目)、そして、発話では無理と悟ったAは発話ではなく動作と道具を用いて、誘いをしている。つまり、Aは誘いを受け入れさせやすくするために、誘いの流れをある程度コントロールしていたと考えられる。このことは負債感から逃れるために、学生が誘いを受け入れやすくする段階を踏まえた誘いであるとも考えることが出来る。

4. 分析②—使いこなす資源／使いこなされる資源

本節では、前節でお菓子をあげるが出来なかった A と B の発話と動作に着目して分析していく。

4-1. 分析視点—2つにわけるといふこと

ここでは、14行目から着目していく。Aの発話14行目「((スプーンで・すくって)) 食べな。⁵」から、Bがお菓子を2つに割ると学生2人にわけることができるという考えを思いつき、Bはお菓子を半分に割り、生徒をもてなすことに成功した。このBのお菓子を2つに割り、2人の学生に渡そうとしている行為は、Bの思いやりや配慮の表れであり、もてなし規範を用いて、その場その場にある偶然の産物を用いている何よりの証拠であるといえる。そして、それを見ていたAも、Bと同様に2つに切ろうとするが、Aは身体の不自由さからお菓子を2つに割ることが不可能であった。しかし、最終的にAは学生①にお菓子をもてなすという行為を成功させた。ここでは、Bの成功後、Aがどのようにもてなしを成功させたのかを分析していく。

4-2. 使いこなす資源

まず、1行目「食べときないよ」・3行目「若いもんが食べなんだら」・5行目「いいや まあ食べない」のようにAはお菓子を食べるように誘う発話と同時に、お皿やコップを学生①のほうへ近づける、フォークを持つといったような動作が伴っている。Aは先述したように、右利きであるが右手に痛みがあるため自在に操ることに困難が伴う。また姿勢も常に右に傾いている。このAの身体的能力から考えると、学生①にお菓子を差し出すという行為は、遠くにいる学生②に差し出すよりも、Aにとって距離的に容易なことである。つまり、右しか使うことができないAにとって学生をもてなす方法は、“学生①の方へ差し出す”しか選択肢がないといえる。しかし、Aはいつも身体が右に傾いていて、右手を使うことも容易ではない。それにもかかわらず、わざわざ身体を起こして、お皿を学生①の方へ近づけるという行為は、Aの学生をもてなしたいという気持ちの現われを強く志向している。この場面において、AはAの身体という自らの資源を使いこなすという、ホストとゲストの身体配置を理解した上での相互行為をしているのだ。

⁵ ここでの発話を上手く聞き取ることは出来なかったが、なんらかの器具、道具に志向した発話であることは間違いない。そのため、後の考察についても不備はない。

4 - 3. 会話分析—使いこなされる資源

〈断片 1 部分〉 17 行目～76 行目

- 17B [2つに割ったらええんで (*) (1.0) な
((フォークを持ち、お菓子を切る))
- 18B (14 秒) かたいな
((お菓子を切っている))
- 19A ()
- 20② どうぞ食べてくださいね。
((手を B さんのお菓子の方へ差し出す))
(4.0)
- 21A
((フォークを持とうとするがパッと離す))
- 22A これ食べないよ。若いもんが。
((フォークを持つ))
- 23B
((切った片方を学生①に差し出す))
- 24① fu っじゃ : じゃ : 一口いただきますね。
((差し出されたお菓子をもろう))
はい (0.2) ありがとうございます。ありがとうございます。
- 25A
((フォークを持つ。B さんを見る))
- 26B
((学生②を見る。もう一切れを学生②に差し出す。))
- 27② どう (0.1) どうぞ食べて (1.0) [いや h
((手を B さんに差し出す))
- 28B [これ持ちんさい (*)
((学生②の手にお菓子をのせる))
- 29② ほんとに
- 30B はよあがって (*)
((お茶を飲む))
- 31② どうしましょ :
((学生①を見る))
- 32① いただきます fu
((お菓子を口元に持っていく))
- 33A
((フォークでお菓子をつつく))

- 34② いいんですかね
- 35① うん
- 36B はよ食べなさい。(2.0) (どうする) ことないで
((湯飲みを学生②に向けて出し、机に置く。学生②に手で催促))
- 37② (1.0) いただきます。
((大きくうなずく。口にお菓子を入れる))
- 38② [すみません、ありがとうございます。せっかくのおやつを。
((フォークを B さんのお皿に置く))
- 39A [(お菓子を切ろうとする))
- 40① ((A さんを手伝う))
- 41② ありがとうございます。
- 42B お茶あげなんだな。(*)
- 43② んん!
((B さんのほうに手を差し出す。))
- 44② どうぞ、大丈夫です。
- 45① (4.0) ん fufufu
- 46A ()。私には (ついて) こん。
((フォークでお菓子を切っている))
- 47① そうですね。ちょっと。
- 48A 食べて。
- 49① さっきいただいたんですよ。[でも
((B さんに向かって手を向ける))
- 50A [もういらん。
((フォークを離し、B さんを見る))
- 51① お茶は? いらないですか。
((お茶をさす))
- 52A お茶もいらん。
- 53A (8.0) これはいる。
((フォークを持つ。お菓子を口に運ぶ))
- 54① はい。食べれるかな。一口でいったら、大丈夫かな。
- 55① ha
((A さんの口元に手を持って受け皿のようにする))
- 56① 大丈夫。あっ落ちた落ちた落ちた。
((落ちたお菓子を拾う))

- 57A [fufufu
 →58① [大丈夫?じゃ:これ半分に切ろうか。
 ((お菓子をお皿に置く))
 →59A 半分にしたらええな。
 ((フォークでお菓子をつつく))
 60① うん。半分に、ここ [で
 ((A さんを手伝う))
 61B [食べない。
 62① これでどうですか
 63A よ:食べて
 ((お菓子を口に運ぶ))
 64① よく嚙んでくださいね。
 →65A
 ((フォークを B さんの方へ持っていく))
 66B 置いといて。
 ((A さんの手を押す))
 67① fufufu
 68B (まだ食べよんのに、おまはん。こっちに持って来よったって。)
 ((A さんをさす。自分のお皿を A さんから遠ざける))
 ((B さんと学生②が微笑み合う))
 69A
 ((お菓子をつつき、学生①を見る))
 70① fufufu
 →71A
 ((フォークを B さんの方へ持っていく))
 72B ()。食べないかんで (てで)
 ((A さんの手を押す))
 →73A (3. 0) これ食べて。
 ((フォークを置く。学生①を見る))
 74① いや、も:いらないんですか?
 ((お菓子を指す))
 →75A いらん。
 →76① じゃ:いただきますしょうか。[悪いんでね。

*2 つに割ったらええんで…2 つに割ったら良い
 *これ持ちんさい…これ持ちなさい

*はよあがって…早く食べてしまって

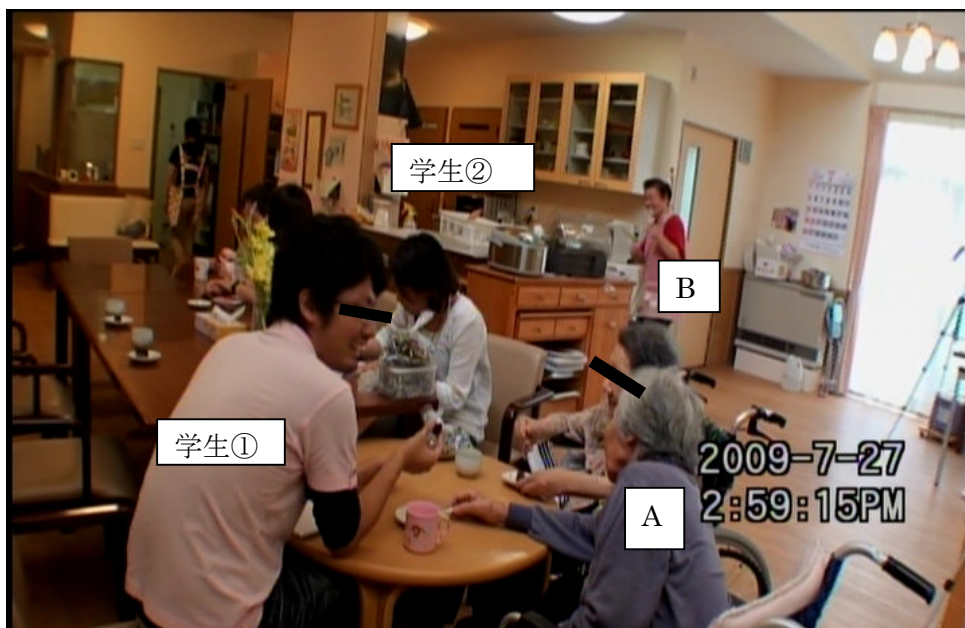
*お茶あげなんだな…お茶をあげなかったね

14行目のA「これ（(スプーンで・すくって)）食べな。」という発話よりBは17行目の「2つに割ったらええんで（1.0）な」という発話で見られるようにお菓子を2つに割るといふ考えを思いつく。そしてBがお菓子をあげることに成功した後のAの動きを見ていく。25行目でフォークを持ち、Bを見たAに見られるように（写真5）、AはBの動きを見て、フォークを持ち、お菓子を切った行為をし始める。33行目のAではお菓子をフォークでつつくだけであった（写真6）が、39行目のAではお菓子を切ろうとしている（写真7）。しかし、Aは右手を使うことができるが、非常に力が弱く、一人でお菓子を切ることができなかった。すると、48行目のA「食べて。」という発話から見られるように、Aは再び学生①に食べるよう発話で誘う。これは2つに切ることでもてなそうとしたが、Aの身体的能力では切ることができず、それでも「もてなす」という規範を成功させるために、“自分では切ることができない”という理由をつけ、直接的に食べることをすすめた発話である。しかし、学生①はBからお菓子をもっていた為断る。Aは再びもてなすことに失敗してしまう。

Aは53行目で「これはいる。」⁶とフォークを持ってお菓子を食べようと口に運ぶが、Aの能力ではフォークを上手く使うことができず、お菓子は落ちてしまった。そこで、58行目で学生①は「じゃあこれ半分に切ろうか」と提案した。Aも59行目で「半分にしたらええな。」と同意している。そしてAは半分食べた後、65行目や71行目のように持っていたフォークをBの皿のほうへ持っていこうとする（写真8）。これは、Aのお皿にはもうフォークを戻すことはできない、もう自分はいらぬという意思表示になっていると予想できる。しかし、このAの行動はBに拒否されてしまう。そして、Bに拒否されたので、学生①をもてなすには口で直接言うしかなく、Aは73行目で「これ食べて。」、75行目で「いらん。」と発言した。48行目でもAは「食べて。」と学生①に言うが、その時点では学生①はもうお菓子をBから半分もっていたことや、入居者が食べるべきものであるという考えがあったため、Aのお菓子を食べることは不適切であった。しかし、73行目で「食べて。」ということは、Aが半分食べていることから、ここで残り半分のお菓子は学生①が食べるべきものになるということが理解可能となった。また、74行目で学生①が「いや、もういらぬんですか？」と最終確認して、75行目でAは「いらん。」と答えている点から、学生①がお菓子をもろうことの適切性が増す。そして、76行目の学生①の「じゃ：いただきましょうか。悪いんでね。」の発話にある、“じゃ：”で学生①が食べることを正当化し、“悪いんでね”で食べることへの意味づけをしているのである。

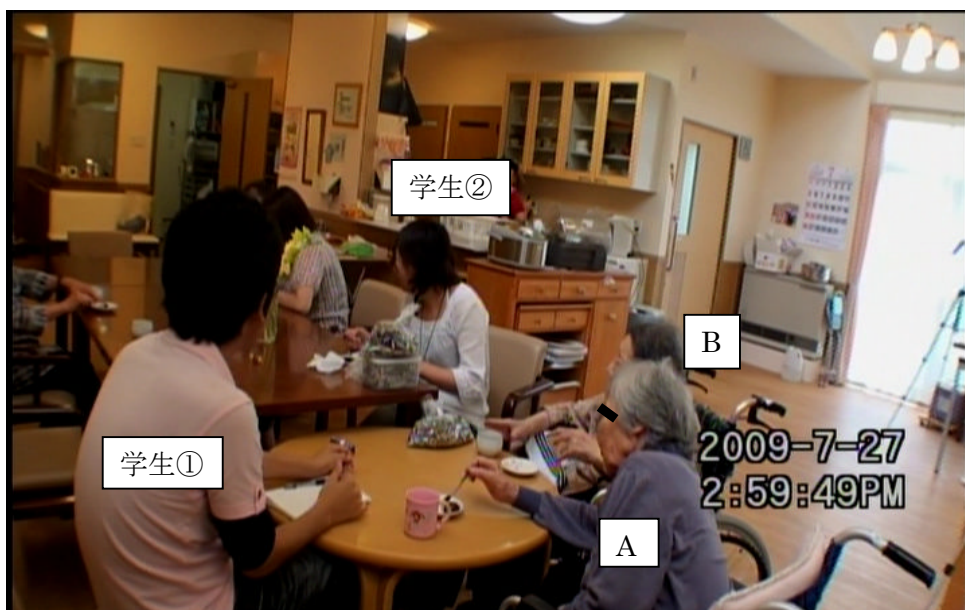
⁶ Aの53行目の「これはいる。」の発話はずじつめの合わない発話である。これは認知症的なものなのか、もてなす為の戦略なのかは会話分析では理解することができない。しかし、この発話を理解しなくても、後の分析は可能であるし、私たちの主張は変わらない。

確かに A はお菓子をあげるというもてなし行為を何度も失敗していた。しかし、最終的にもてなしの行為を成功に導いたのである。その過程は偶然であるかもしれない。ただ、もてなし規範のもと、偶然に起こっている資源（例：お菓子が落ちて、半分に切ることの提案）を扱い、もてなしを成功させたといえる。言い換えると、様々な相互行為において、偶然にも表出された資源は人々によって使いこなされているのである。



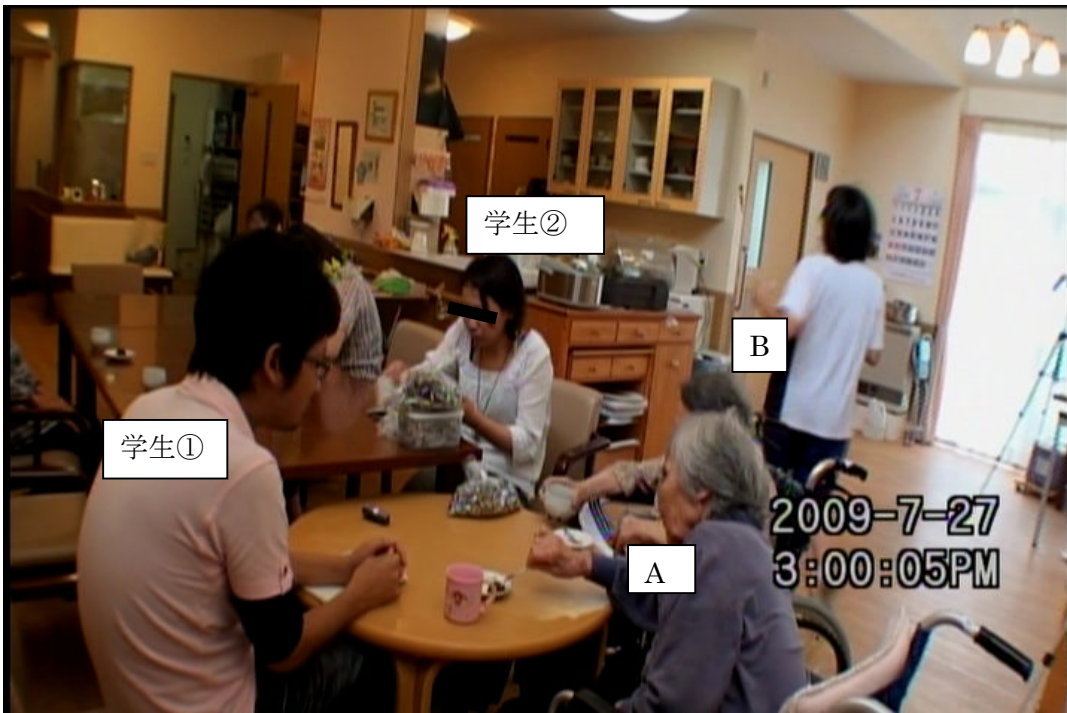
▽14 : 59 : 15

写真 5 B を見る A



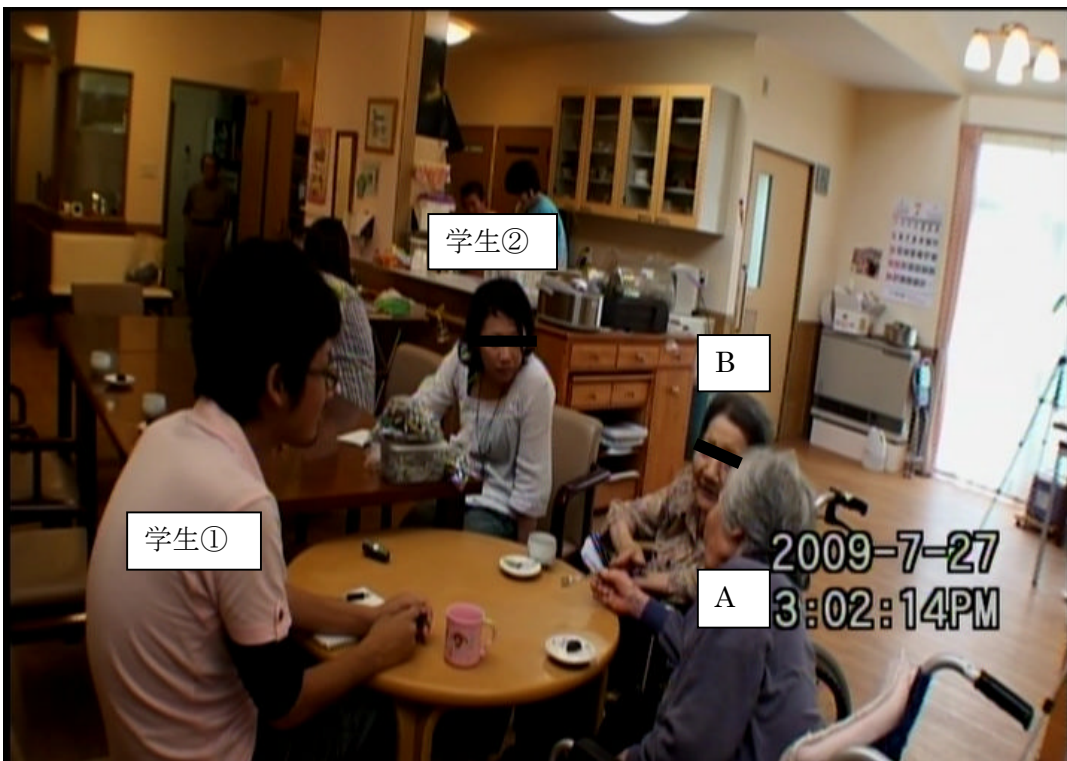
▽14 : 59 : 49

写真 6 お菓子をフォークでつつく A



▽15 : 00 : 05

写真7 お菓子を切ろうとしているA



▽15 : 02 : 14

写真8 持っていたフォークをBのお皿の方へ持っていくA

5. まとめ

今回の分析ではもてなし規範を用いた行為について分析してきた。そこには、発話により見られるもてなし行為（3節）から、動作により見られるもてなし行為（4節）への変化を見ることが出来た。

3節では、さまざまなカテゴリーを使い、さらには段階的な話題転換をするというテクニックを用い、誘いを展開したが、ホストの試みは失敗に終わった。

そして、スプーンという道具を用いるという発話から、次の場面に進行し、動作を用いることへとつながった。

4節では、自らの身体という資源や偶然に起こっている周りの資源を用い、誘いを駆使するホストのテクニックが見られた。

つまり、もてなし規範を用い、さまざまなテクニックを駆使することで、お菓子を食べさせるという目的を達成した。

言い換えると、Aにはその状況に応じ環境に適応する相互行為能力があると言える。

最後に、今回の報告書執筆にあたり、貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力をくださった、信州大学医学部井口高志氏と京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻木下衆氏、また調査協力の依頼に応じてくださったグループホームBの関係者の方々、入居者の方々には深く御礼申し上げたい。

付録

〈断片〉 おやつの時間

日時：7月27日14:57～

場面の参加者：入居者A、入居者B、学生①、学生②、スタッフ

▽ 14:57:08

01A 食べときないよ

((学生①にお菓子の皿を差し出す))

02① fufu

03A 若いもんが食べなんだら

((お茶のコップを差し出す))

04① いえいえ、これたぶん自分がお持ちしたお菓子なんですよ。

((お菓子を指さす))

05A いいや (0.1) [ま：食べない。

((お菓子の皿を学生①の方へ押す))

06②

[あ：：：

((学生①と目を合わせる))

07① いえいえ

08A (仕事した者が食[べ

09① [いえいえ、それ、み (0.1) みなさん同じような
((Aさんに手を向ける 手で丸を描く))
お仕事された ha んで (0.2) ぜんぜん
((両手をお皿に添える))

10A わたしやせなんだけん
((皿に手を添えたまま))

11① いえいえ、も：ぜんぜんぜんぜん
((両手をお皿に添える))

やってることは同じなんで he (0.1) どうぞどうぞほんとお気遣いなく
((両手をお皿に添える Aさんに両手で))

12A はよお食べ (0.2) 若いもんが食べたって
((体勢が後ろへ))

13A
((コップを学生①のほうへ押し出す))

14A はよ食べなはれだ。これ (スプーンで・すくって) 食べな。
((フォークを持つ 学生①を見る))

15A 若いもんが [食べな。年寄りは

16① [fufu ちよつと

17B [2つに割ったらええんで (1.0) な
((フォークを持ち、お菓子を切る))

18B (14.0) かたいな
((お菓子を切っている))

19A (())

20② どうぞ食べてくださいね。
((手を Bさんのお菓子の方へ差し出す))

(4.0)

21A
((フォークを持とうとするがパッと離す))

22A これ食べないよ。若いもんが。
((フォークを持つ))

23B
((切った片方を学生①に差し出す))

24① fu っじゃ：じゃ：一口いただきますね。

((差し出されたお菓子をもらう))

はい (0.2) ありがとうございます。ありがとうございます。

25A

((フォークを持つ。B さんを見る))

26B

((学生②を見る。もう一切れを学生②に差し出す。))

27② どう (0.1) どうぞ食べて (1.0) [いやh

((手を B さんに差し出す))

28B

[これ持ちんさい

((学生②の手にお菓子をのせる))

29② ほんとに

30B はよあがって

((お茶を飲む))

31② どうしましょ :

((学生①を見る))

32① いただきます fu

((お菓子を口元に持っていく))

33A

((フォークでお菓子をつつく))

34② いいんですかね

35① うん

36B はよ食べなさい。(2.0) (どうする) ことないで

((湯飲みを学生②に向けて出し、机に置く。 学生②に手で催促))

37② (1.0) いただきます。

((大きくうなずく。口にお菓子を入れる))

38② [すみません、ありがとうございます。せっかくのおやつを。

((フォークを B さんのお皿に置く))

39A [

((お菓子を切ろうとする))

40①

((A さんを手伝う))

41② ありがとうございます。

42B お茶あげなんだな。

43② んん!

((B さんのほうに手を差し出す。))

44② どうぞ、大丈夫です。

- 45① (4.0) ん fufufu
- 46A ()。私には (ついて) こん。
((フォークでお菓子を切っている))
- 47① そうですね。ちょっと。
- 48A 食べて。
- 49① さっきいただいたんですよ。でも
((Bさんに向かって手を向ける))
- 50A もういらん。
((フォークを離し、Bさんを見る))
- 51① お茶は？ いらないですか。
((お茶をさす))
- 52A お茶もいらん。
- 53A (8.0) これはいる。
((フォークを持つ お菓子を口に運ぶ))
- 54① はい。食べれるかな。一口でいったら、大丈夫かな。
- 55① ha
((Aさんの口元に手を持って受け皿のようにする))
- 56① 大丈夫。あっ落ちた落ちた落ちた。
((落ちたお菓子を拾う))
- 57A [fufufu
- 58① [大丈夫？ じゃ：これ半分に切ろうか。
((お菓子をお皿に置く))
- 59A 半分にしたらええな。
((フォークでお菓子をつつく))
- 60① うん。半分に、ここ [で
((Aさんを手伝う))
- 61B [食べない。
- 62① これでどうですか
- 63A よ：食べて
((お菓子を口に運ぶ))
- 64① よく嚙んでくださいね。
- 65A
((フォークをBさんの方へ持っていく))
- 66B 置いといて。
((Aさんの手を押す))
- 67① fufufu

- 68B (まだ食べよんのに、おまはん。こっちに持って来よったって。
((A さんをさす。自分のお皿を A さんから遠ざける))
(B さんと学生②が微笑み合う))
- 69A
((お菓子をつつき、学生①を見る))
- 70① fufufu
(10.0)
- 71A
((フォークを B さんの方へ持っていく))
- 72B ()。食べないかんで (てで)
((A さんの手を押す))
- 73A (3.0) これ食べて。
((フォークを置く。学生①を見る))
- 74① いや、も：いらないんですか？
((お菓子を指す))
- 75A いらん。
- 76① じゃ：いただきますしょうか。[悪いんでね。
- 77A [え：
- 78① じゃいただきますね。じゃお茶飲んでください。お茶。これ甘いんで。
((お皿に手を添える。 お茶のコップを A さんの方へ持っていく))
- 79A 甘いな。
- 80① ね：。お茶どうぞどうぞ。
((お茶を A さんの方へ持っていく))
- 81① のど渇い [た
- 82A [お茶飲む
((手をコップへ伸ばす))
- 83① うん。() じゃ：いただきますね
((お菓子を持つ))
- 84A (はい、どうぞ)
((お茶を飲む))
- 85① ありがとうございます。(0.5) さっきからもらってばかり。
((お菓子を口に運ぶ))
- 86①
((お菓子を食べる))
- 87 ス (3.0) ごめんな。おそなって
((生徒のおやつを持ってくる))

88 ス

((学生①のおやつを持ってくる))

89① ありがとうございます。

90 ス (3.0) ()

((Aさんの肩をたたき耳元に話しかける))

91A [fufufu

92 ス [fufufu

参考文献・引用

小宮友根 (2007) 「第 5 章 規範があるとは、どのようなことか」、前田泰樹・水川善文・岡田光弘編『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』新曜社、107

第Ⅲ部 付録

〈インタビュー記録 1班〉

対象者：I氏

テーマ：総合科学部について

インタビュアー：藤田・田村

◎「総合的に『学ぶ』ということ」

入学にあたってーオープンキャンパスでの「大学」との出会い

私が徳島大学総合科学部を志望したのは、私が徳島県出身であり、また、家の事情でお金のかからない学校ということで、地元の国公立で志望するコースもあるということからこちらに選びました。当初志望していたコースは心理でした。しかし心理というと絞られてくるので徳島大学の人間行動コースを志望し、決めました。

徳島大学のオープンキャンパスには参加し、改修前の 301 で心理の授業を普通に受けました。超満員でとても暑かったのを覚えています。人気の授業だったので立ち見もいました。そのときの大学の印象はあまり覚えていないのですが、校舎は古いと思いました。それでも、高校生の自分にとっては新鮮に映りました。徳島大学以外の大学のオープンキャンパスには行っていないこともあって、なんだか図書館で古い本を見つけたような感覚がありました。いろんなものが詰まっている、自分の知らない世界がここに広がっている、という感慨があり、このとき徳島大学志望を固めました。

入ってみてー「便利さ」により得られた「目線」

総合科学部という比較的珍しい学部のあり方については、入ってから選べるというのが一番のオシだし自分でも利点だと思っています。失礼かもしれないが便利です。

先に言ったような長所を最大限生かす人もいますが、逆に最初から専門的に学びたい人にとっては 1 年のうちで絶対やらなければいけない一般教養はうっとおしく感じると思います。私は他の授業から学ぶこともあると思いますが、人によっては邪魔かもしれません。

他の授業で学んだことが自分の研究に影響している点は今のところありませんが、物事の考え方に影響を与えられた気がします。あるできごとを一般的な一方向からの目線ではなく、違った目線から見るという姿勢が身についたように思います。一つの物事に対して見方はいっぱいあります。自分では思いつかない目線で見られていたりしますが、それを意識して自分で出来るようになったかと思います。

おいしいところー学外活動で得られたもの

授業が終わったあとの時間利用はほとんどアルバイトでした。そのアルバイトを通して人に接するときの態度、言葉づかいはなんとなく分かるようになりました。以前は初対面の人と話すのが苦手だったのですが、明るく社交的になれたと思います。このように比較的時間に余裕のある時間割を組むことが可能であるのは総合科学部のおいしいところだと思います。

対象者：F氏

テーマ：卒業論文について

インタビュアー：岡田・富永

◎ゼロ成長な「定常型社会」を目指す直島と出会って

「直島」との出会い

最初はボランティア関係に興味があって、それに関連したテーマの論文を書こうと思ったんです。でも漠然としすぎていて、自分が卒論する時に楽しいのかなって疑問に思ったんですよね。で、対象がもうちょっと身近なところだと、もっと興味湧いて楽しいかなって。そう考えた時に、自分の身近なところ、地元が高松といった点から大学2年の時に行った現代アートの島「直島」の存在を思い出したんです。友達がネットに直島のアートの写真(ex.かぼちゃ)を載せていて、最初「どこの写真かな」って思ってたんです。でも香川にいと色々情報も入ってくるようになって、直島に面白そうなアートがあるって話を聞くようになりました。行きたいと思っていたら、ちょうど仲良しの友達4人で日帰り旅行へ行くことになったんです。それが私と直島の出会いです。そこでの体験は凄く楽しかったし、街づくりや活性化に興味を持つきっかけにもなったんです。直島について調べたら、毎回行くのもアートを見られて楽しいし、これなら楽しんで自分の卒論を出来るんじゃないかと思ったのがテーマを決めた理由ですね。

卒業論文の具体的な「中身」

テーマが決定したのは3年の12月ぐらいかな。先輩たちを見て、早めに考えた方がいいのかなとは思ってました。私は商店街の近くに住んでいるので、最初は「発展、衰退する商店街の対比」もおもしろそうだと思う、そちらにも興味があったんです。直島と商店街の二つで悩んでいて、先生に相談したところ「直島おもしろんじゃない？」って言うてくれて、最終的には先生の助言を受けて決めました。

具体的な準備というか、大きなとっかかりとしては、去年の実習でお世話になったコンサルタンの人が「直島の公共交通に関するプロジェクト」に関わっていて、その人を通じて2月ごろバイト行かせてもらったことだと思います。それから3月ぐらいに具体的なテーマの提出とかがあって、読みたい文献を調べたりしました。2月3月ぐらいが始まりで…他の人に比べたら決定は早かったんじゃないかな。でも、テーマが決まってもアプローチの仕方が分からなくて悩んでました。それでも調査を進める内に方針が定まってきて、今はフィールドワークで直島の住民や役場の人を中心に聞いていて、アートが入って来たことによって今までの生活がどのように変化したのかをメインに調べてまとめるつもりです。

卒論の枚数は全部で30枚ぐらい書く予定ですね。多分全体でそれぐらい書かなきゃいけない決まりだったと思います。私は調査に行くのが遅くて、夏休みぐらいまではずっと「直島町誌」を読んでまとめて分析してて、現在のことを調べなきゃいけないのに過去のことばかり調べてたんです。チマチマと…それでちょっと時間をロスしてしまいましたね。それから9月ぐらいに矢部ゼミでやりだした広井の「定常型社会」がいい文献だったので、現在の分析視点はそれをベースに書くことにしました。持続可能な福祉社会の構想というか、「日本を初めとする先進産業国は、もはや経済成長を目標とするのではなく、定常型（ゼロ成長）社会を受け入れるべきだ」という内容は直島の在り方に近いんじゃないかと思ったんです。あとは鈴木の工業都市の階級構造を書いている論文を参考にしていますね。私は凄くラッキーで、指導教官の矢部先生がちょうど直島に興味を持っていたことからこの文献を薦めてもらいました。三菱精錬所が誘致された時の分析視点になっているので、ほんとに助かりましたよ。それから自分で社会学評論を見て、空間社会学の「空間」という視点もあるのかなって。そこで時間と空間の社会学について述べた若林の論文を見つけたんです。この「熱い都市 冷たい都市」の論文は工業都市が終わってからアートへ変化する分析視点で使っています。参考文献は主に4冊で、他はネットで直島がどのように評価されているのか見てみたり、アートの紹介について見たりしています。かなりシンプルに進めていますよ。ただ、直島に関する先行研究がほぼないので、自分で行って実際に調べるしかないんです。でもその調べてきたデータを整理しきれなくて、目次を作った時にも内容が混在していると先生に指摘されました。今は構成の練り直しを目標に、毎日取り組んでいます。

調査自体には今の時点で2回行ってるんですけど、工場見学も含めたらあと3回は行きたいな。それからボランティアスタッフの講習も含めたら…全体で6、7回ぐらいは行くのかな。ボランティアスタッフって空き家を使ったアートとか、作品の制作に直接携われるんですよ。直島の案内ガイドとしての役割も任されるので、直島自体やアートについての知識を身に付けるために講習会にも参加しています。中には神奈川とか関東から来る人もいるぐらいなんです。なかなかない機会だし、活動自体もすごく楽しいんです。だんだん直島の知名度が上がってきてるから、最近では全国でも卒論で取り上げる人が多いらしくて泊まり込みで調査している人いるみたいですね。私はもう一度1月にフィールドワークに行き、今の直島について知識を深めたいと思っています。卒論とは別に来年ある瀬戸内国際芸術祭に関する講演にも参加するつもりなんで、直島との付き合いは長くなりそうです。

あと参考に、類似アートのある新潟の越後妻有に3泊で行ってきたんです。丁度3年に一度行われている「大地の芸術祭」が行なわれていて、1週間かかっても回りきれない程の規模…ほんとに凄かったですね。とにかく広さに驚きました。直島とはまた違った良さがあって、また行ってみたいですね。

「卒業論文」との付き合い方

私は気分の浮き沈みが激しくて、やりたい、やりたくないの差が激しいんです。楽しい時は凄く楽しんで卒論にも取り組めるんですけどね。でも1年生のイベントの手伝いなんかをしてても常に卒論が気になってしまって、いつも頭の片隅にある感じですね。調査や日程の調整なんかは特に考えちゃいます。もう調査行かなきゃいけないよな、とか夏休みぐらいからはずっと気にかけてますよ。逃げたり焦ったりしてしまいますね。最初自分の構想としては夏にはちゃんと調査に行っていたというのがあったんで、

その点では予定とちょっとずれてます。ただ私の場合、結果が見えてるところがまだ楽ですね。とりあえず過去から今までをしっかりまとめたいと思っています!

本当の「直島」

ベースにしている文献を読んでも、経営者層とか労働者層とか、階層関係や力関係が今に至るまでに変化していったのかと思ってました。アートの参入を果たしたベネッセが地主層と繋がり、経済成長を果たしながら発展して住民の生活が変わってしまったのかなって勝手に思ってました。けど実際インタビューに行くと三菱は今でもちゃんとした基盤であるし、人の生活とか特に経済面を支えてるっていうのが分かりました。町誌にも何かあったら三菱の精錬所から寄付金が出たという記録も残ってましたし。あとは三菱が生活を支えてベネッセがアートを発展させるっていう役割を分担しながら、2社が上手く共存して島の活性化に携わっているというのはほんと驚きでしたね。

私がインタビューをさせてもらったボランティアガイドの会長さんは現在81歳で、直島でのガイドを生き甲斐に毎日イキイキと元気に過ごしているそうなんです。アートが入ってきてから、定年して墮落していた生活が一変したんだとか。人の精神に関わっている企業ってすごいなって思いましたね。見た目だけの活性化だけじゃなくて、「見えないものに価値をおく」というように住民の意識にも変化を与えているっていうのがおもしろくなって。住民が直島に住んでいることを誇りに思っているし、インタビューに行くとみんな楽しそうにどんどん話してくれるんです。みんな直島の発展を楽しんでるって凄く伝わりましたね。

逆に「変わらないものに価値をおく」とも言われていて、一度衰退していた芝居小屋で人形劇をする「女文楽」を教育委員会の助けを借りながらも復活させる取り組みも行われているようなんです。実際は意欲的に復興させているのではなく、伝承するのでやっつものようですが。先生には否定されたんですけど、私は女文楽とアートになんらかの関係があるのかなって少し思いました。来年の芸術祭でも女文楽もイベントには組み込まれるので、ほんとの意味で形に見えるものとしての融合っていうか、「変わらないものに価値をおく」部分が見えるのかな。これからアートと一緒にやっていくんだなって思いますけど。でもほんと、直島特有の自然と融合した芸術は本当に素晴らしいと思います。私は就職自体が自分の生き甲斐ではないと思ってるんで、やっぱり町を盛り上げていくってことがやってきて楽しかったから、今後も携わって行きたいです。卒業後も直島には関わっていくつもりですよ。まあ、論文をしているうちに「定常型社会」に影響されたのかも知れないですね(笑)。直島のディレクター、北川フラムの目指す定常型社会に感心する部分が強くなるんですよ。講習会で2013年に直島をモデルとして世界に提言すると聞いて、高松凄いいって感動したし、規模の大きさにワクワクしました。直島の今後が楽しみです。

〈インタビュー記録 3班〉

対象者：U氏

テーマ：就職活動について

インタビュアー：上久保・田村

◎精神力の強さ

就職活動を始めた時期

就職活動を本格的に始めたのは、十二月の初めぐらいからです。それまでは登録したりとか、雰囲気を探んだりとか、まあ大きいイベントとかには出てました。会社説明会にいったのが十二月ぐらいからです。それまでは説明会とかも行ってなくて、どういう企業にエントリーしようかなあとか、ちょっとどういうところがあるのかなあとか自分が何したいのかなあぐらいしか考えてなかったです。あとは適性検査したりとか。

資格・SPIの勉強について

就職活動のために資格を取ることは一回検討はしたけど、結局挫折をしてそれからは何もしてない。社会調査士も取ってないので、資格なしと書きました。SPIの勉強とかは・・・会社説明会が決まったのは、十二月ぐらいに予約したんですけど、そこぐらいから意識し始めたので、そのぐらいから勉強し始めました。勉強法のコツは、小学校で習う基礎的なことばかりなので、それをいかに早くやるか、ページ数をどれだけやるか、要するに慣れですね。私は一通りしかしてなかったんで、時間が足りなかったというのが一番の原因だった。教科書は紀伊国屋でお勧めのものを買ったら大丈夫と思う。

面接において

面接の練習のために就職支援室に2回ほど行った。けどあまりあてにならなかったんで、練習はほとんどしてないですね。あらかじめ質問を出されて用意してきてくださいって言われたときは一応対策はするんだけど、それ以外はぶち当たった感じ。漠然としか考えてなかったんで質問されたらその場でアドリブで答える感じでした。他は受かってる友達とかに話を聞きました。何件も面接をしていたらだいたい流れとか掴んできて、緊張とかも

そんなにしなくなって慣れてきます。1番始めは緊張しすぎてあんまり記憶にないですね。要するに面接も慣れかな。卒論関係の発表会の雰囲気慣れていたので、面接で追いつめられても、負けるかっていう気持ちで立ち向かえられたと思う。自己アピールの答え方は、ストレートに質問で「自己アピールしてください」って言うときと、「あなたの長所短所は何ですか」とか「あなたを表現するとしたらどういう形で表現しますか」とか、いろいろあって、そのときの質問のされ方で自分の心の中にある程度これを言うっていうストックというかネタみたいなものがあるんだけど、答え方を変えて言ったほうがわりと対応はしやすかったと思う。頭の中で暗記するのもいいんだけど、丸暗記じゃなくてちょっと頭にネタを置いてくぐらいで十分じゃないかな。暗記しながら言うと逆に緊張しやすいと思う。私は自己アピールを考えてなかったなって後悔したんで、ちゃんと考えたほうがいいと思う。質問されて、咄嗟に自分が意図したことを始め言ったら、違う方向、全然意図しなかった方向の質問を受けたときに対応出来なくなってしまった。それが多かったんで、やっぱりちゃんと深く考えて、どういう質問のされ方でも対処出来るようにしておいたほうがいいと思う。あとは、その場ではわからないけど「そういう意図があったんだ」って後で考えたらわかるような変な質問されたりするから、そういうときにもちゃんと矛盾なく答えられるようにしておくことかな。私はそういう質問は逆に気付かないことが多くて、後で「そういう意図があったんじゃないの」って周囲から言われたりしたんだけど、もうあんまり覚えてないのよ(笑)でも、面接のときは「何でこの人こんな質問したんだろう」って思っただけで「ん？ん？」ってなっていたから、そういうことにも気をつけたほうがいいよ。例えば、「私の地元で、旅行に来る人に地元の県を説明したいならどういう風に説明しますか？」って漬物屋さんで聞かれて。何で漬物屋で旅行の話が出てくるんだろうって思って、その理由はわからなかったから「はい、とりあえず癒しがある森林のところへ行けばいいですよ」みたいなことを言いました。そのときは受かったけどその質問の意味は今でもよくわからない。

企業を選んだ決め手

初めは好きでこれなら続けられると思った出版を目指していたんだけど、全然受からなくて、私向いてないのかなと思って、分んなくなってしまうけど、就職はしたかったので最後は手当たり次第に何でも受けました。スーパー、百貨店、書店、ゼネコンも受けたし、今受かってるところも全然違うところです。書類を送ったのは全部で30社ぐらい。就職先を決めるのに最重要視したところは会社の雰囲気かな。決まったところは静岡なので、しかも全国転勤があります。出身は和歌山だから、初めは地元がいいかなと思った。まあ地元には執着はなかったけど、寒いところはいやだなとは思っていた。

会社説明会に行くにあたってのアドバイス

説明会のときは、初めに何を重視して聞きたいのかがわかってなくて、自分に何があるかっていうのもわかってなかったから、初めは行きたいところを絞っておいた方がいいと思う。空いている所にパッと入れるような柔軟な形にしておく方がいいかな。

就活で大変だったこと

就職できないとどうにもならないんだけど、それさえもどうでもよくなってくるというくらい精神的に辛かった。あとはお金がかかったのが大変でした。特に東京には2回行ってそれだけで6万ほどなくなった。

やっておいてよかったこと

私はあんまりお金を使う習慣がないんだけど、バイト代を貯めておいてよかったなとは思った。いくらでも使っていいやっという余裕は一応あったので。就活しながらバイトをしている子が周囲にいて、大変そうな子も結構いました。だから就活以外は何もしなくていい環境にしておいたほうがいいかもしれませんね。

やっておけばよかったと思うこと

やっぱり自己分析をもっとしとけばよかったなって思う。あとは周囲の状況を読んで言っている質問と悪い質問をちゃんと考えておけばよかったなとか。ふと思い出したんだけど、いつも最後に「何か質問ありますか？」って言われて面接でいつも「えっ!？」って困ってしまっ。毎回言われているくせに毎回考えてなかったのでもいつも困ってしまうことがありました。だから、段階が上がるにつれて、質問内容も濃くなってきたりするんだけど、面接の状況に応じて分けて考えておけばよかったと思います。

今からやっておいたほうがいいこと

何でもいいと思うけど、人に胸を張って言えることがあったらいいかなって思う。バイトをしていても「ただバイトをだらだらしてきました」っていうんだったら、やっぱり「この子はだらだらしかしてなかったんだ」っていう目で見られてしまうかもしれないけど、「私はバイトでこういうことを学んだし、これからもこういうことをさらに学んでいきたい」みたいなこととか、バイトでも考え方によってはそういう風にはっきり言えることが違って来るから…。普通に過ごしていても大丈夫だけど、目指していることがあるんだらそれについてはちゃんと勉強しよったほうがいいと思う。決まっていなかったらそ

ういう風に考えるだけでも違うかなって思う。

〈インタビュー記録 4班〉

対象者：W氏

テーマ：周りに流されずに積極的に

インタビュアー：小川 拓也・戸川 友希

◎周りに流されずに積極的に

職種の絞込みと決定

私は、販売系の総合職、スーパーの会社に内定をもらったんですけど、就職活動の最初の段階では、職種を特に何かに絞ってするっていうのはあまり自分の中では考えていませんでした。職種とか業種とかを選考中とかでも同じ就活生とかに会う時とかに、どこのどんな職種とか業種とか受けてますかって聞かれることが多いんですけど、そういう時とかもこう色々、なんかひとつの職種に絞ってしまうのは惜しいって思ったので、特に絞ってするっていうことはしてませんでした。

地域システムでの経験

地域システムとしての経験もすごく活かしたというか、私は地域システムっていうので職業を絞ることはしなかったんですけど、その地域システムでやってきたまちづくりとかそういう、Y先生のもとで関わってきたまちづくりとかそういうことだとか、あと自分が社会学で学んできたことっていうのは、その就活をするにあたってすごい役に立ちました。そういう経験の上に今の自分とかがあったので、それを基盤に就活をずっと続けてたと思います。あと面接やエントリーシートとかを書くときに、絞りではないんですけど、大学でやってきたこととかは、自分の今の考えの芯になっているものとか、地域システムのコースでやってきたことで得られたこととか、考えたこととかもあったので、そういうのを書いたり言ったりはしてました。

適性検査について

適性検査とかは一応、企業を受ける前の段階とかでもやりました。でも就活をやってる間もちょこちょこ何回か。自分にどの職種が向いてるとか自分はどういう性格かみたいなのを就活サイトとか、マイナビみたいなのでやってる時にもちょっと変わってきたりして、自分はマイペースだからこういうのが向いてるっていうのが出るときもあれば、すごく積極性があるのでこういうのが向いてるっていうので、自分の気分にもうらがあって色々変わるんで、なんか、私はあんまりあてにはしてなかった部分があります。まあ今の自分はこちらなんだっていう、参考程度でしたね。それに、就職活動をしている段階で、その検査

をやってみると公務員とかそういう系の役所とかそういうのが上に出てきたこともあって、私は普通に民間で就職しようと思っていたので、いまさらこんなこと言われても変えれないよって思ったので、それでちょっと適性検査はあんまりあてにできなかった部分が大きかったりしました。

実際に就職活動をしてみて、実際のイメージと違ったことやギャップ

すごく感じました。自分の進路というか、確かに人生の転機みたいなのを今ここで自分の選択で決めるっていうのは、やっぱり就活っていうのはすごい大きなポイントとなる部分だと思いました。あと、アルバイトとかと違って社会に出て行くっていう、自分が一人、社会人としてひとつの責任を負わなければいけないんだっていうのを、これからその場に立っていくんだっていうその気持ちにさせてくれる感じだったかなと思います。その、人生の転機っていう意味では、確かに怖かったですね。もう止めてしまいたいっていうのは何回も思いましたね。責任をなるべく負いたくなかった。たとえば、そう、バイトだったら、いつでも自分でいっかと思ったら、めんどくさいと思ったら辞めれますから。学生っていうのもあるから、まあいっかって思うのもあるし。でも会社ではそれはできないし、それが求められてるっていうのもありますし、プレッシャーはすごくありました。

SPI や TOEIC について

SPI は勉強しておいたほうが良いと思います。私はぜんぜん勉強していなかったので、参考書をひとつ買ってばらばらとやっていたくらいなので、その部分の対策はあまりしていなかった。したほうが良いと思います。企業を受けるならけっこうこの企業でやっぱりテストセンターとかで受けたとかテストで SPI とかが出たりするので、そういう対策は三年になって直前にするよりはこつこつとやっていって、簡単な問題なので感覚を取り戻しておくのは大事なのかなと。SPI の問題はそれ自体は簡単だけど、時間がかかり早くとかなきゃいけないんですよ。問題自体が解けてもそれに時間がかかってしまったら結局あまり最後のほうまで問題がいかなくて点数が悪いていうことがあると思うので、早く正確に解けるように訓練っていう形で臨んでおいた方がいかなと思います。

TOEIC もぜんぜん受けてないんですよ。でも、やっぱり TOEIC とかを求めてくる企業とかも多いし、会社に入ってから求められたりする場合も多いので、勉強しておくことにしたことはないと思います。

インターンシップや資格について

インターンシップには学校側が開いているのもあるし、自分から見つけるのがあります。どっちでもいいので一応行っておいたほうが士気も高まると思います。自分も就活サイトに載ってる企業が募集をしていたのでそれに応募して、一日だけですけど参加したこ

とがあります。企業の話も聞けるっていうので、そういう面でもよかったし、周りの就活生の人と話ができるっていうので、私は関西のほうに就職したくて、地元には帰らないつもりでいたのです。ここ徳島じゃないですか。関西まで行くのに時間がかかったりして、関西の就活生とのギャップみたいなものをすごくインターンシップに行ったときも感じました。やっぱりこの狭い空間だけを見てたらぜんぜん違うので。そういう意味で自分をがんばる、みんなもっとがんばってるんだっていうのを確かめに行くためにも、まだインターンシップの段階ではまだ就職活動っていうのも本格的には始まってないけど、行ってこれからは備えようっていう、自分の気持ちを高めようっていう形で利用したりしました。あと私は二年生の時に学校側のインターンシップの授業も受けていたんですけど、でも二年の時に受けて失敗したなと思いました。三年のときに行くとけばよかったなって思いました。もう一回、三年の時に受けて授業を聞きつつ、その情報がもらえるから、三年の時に受けてもよかったなっていう。まあでも、士気を高めるのにはいいのかもしれないです。資格は、何も取ってないですね。私の目標には資格は取らなくてもよかったのですが、証券会社とか銀行だとかだと簿記とかいろいろな資格があるじゃないですか、興味がなかったんで取らなかったんですけど、何かそういう系の目標があるのならどんどん取っていったほうがいいと思うし、自分のまわりの友達も、銀行がいいってずっと言ってる子だったら取りに行ったりそれにむけて勉強したり、有利だからっていうので取りに行っていたので、自分の目指す職種とか業種とかもし興味があるんだしたら、取っておいたほうが後々困らないかなと思います。それと地域システムだったら、社会調査士（の資格）はあまり役に立たない。一応見込みで取ったんですけど、そこに突っ込まれることはなかったです。空欄にしておくのもあれかなと思ったので、一応書いたんですけど。あまり触れられることはなかったです。でも、空欄よりはぜんぜんいいと思います。

就職活動で二三年次のうちにしておくべきこと

なんか就活中に言われたんですけど、後で後悔するかもしれないと思うのなら先にやっておけるっていうのをある企業の説明会で言われたことがありました。今朝新聞を読んでいなかったから面接で今朝の新聞のことを聞かれた時に答えられなくて後悔をしたっていう人がいたらしくて、そういう後悔をするくらいなら、先に自分の思いつく限りの準備をしておいて、そういう意味での準備万端で面接とかにも臨んだほうが、もし落ちたときにも自分はやれるだけのことはやったと思えるから自信にもなるし、後悔が少なくてすむので、就職活動の時は思いつくだけのやれることをして、そういう風にして個々の会社にも臨んだらいい。資格とかも今から必要だとわかっているものとか、もしかしたら必要になるかもしれないって思うものがあったら、積極的にまわりとかに流されずにこつこつやっ
くってというのが大事かなと思います。

あと、人とうまくコミュニケーションがとれるようにしておくっていうことは大事だと思います。人とコミュニケーションをとるのって本当に難しいと思うんです。私は口下手なので、あまり前に立って話すことが苦手なので、そういう意味でも人とコミュニケーションをとることがうまくいってないと思うし、かといってすごくおしゃべりな人とか、普通に人の前で話せるっていう人でも、まわりのことが考えられていないとそれはコミュニ

ケーションが取れているとは言えないと思うので、いかにまわりの中で自分がどんな役割を果たしているかとか。まわりを気遣えるかっていうとちょっと変なんですけど、まわりをよく見れる人にはなれたほうがいいっていうことで、コミュニケーションが大事っていうことと、視野と勉強と、そんな感じ。視野を狭めずに。最初から視野を狭くして就職活動をしたりとか、何とかやるやって明るい気持ちで臨むんじゃなくて、真剣に、就職活動をしている間はあつという間なので、それまでに勉強とか、自己分析とかをしておいて、いい意味で自分のことを悪いところとか良いところとか長所短所とかを含めて知っておくっていう作業をしておくとう就職活動はやりやすくなると思います。

〈インタビュー記録 5班〉

対象者：A氏

テーマ：就職活動について

インタビュアー：齋藤雅彦、大上梨奈、尾崎諭

◎就職活動を振り返って—自然体になるためのプロセス

自己プロデュース—企業の求める方向に私を作りこむ作業

本格的に就職活動を始めたのはちょっと遅めで3年生の1月ぐらいです。ちゃんと取り組み始めようと思ったのが1月で、それから色々な企業を見始めた感じです。そこから企業に行ったり、選考とかも受け出したりって感じで、企業と繋がりを持ったのが1月ということになります。大きな説明会とかは12月までにちょこちょこ行っていました。

就職活動サイトの特集とかを見ると、なんとなく似たような企業が気になって、本当漠然な言い方をすると、例えば、色々な人に会えるような職種が多いじゃないかなとか見つかって、そこから広げていくみたいにして企業は選んでいました。私は、人に伝えるのが好きで、特に自分がいいって思うものを伝えた時に人が理解してくれると喜びを得られるなっていうのを感じています。例えば、メーカーの営業とかで自分の会社の製品の良さを相手に知ってもらえたときに嬉しいんじゃないかって思い、メーカーを調べたりしました。

何に関しても知るっていうか、自分であったり、受けに行く会社であったりを知ることが、やっぱり大事です。コミュニケーションにおいても大事だから、社会に出ても知ろうとする姿勢は大事だと思いました。ただ、自分自身を知ることには抵抗がありました。ちょっと逃げたりもしました。だから、具体的に掘り下げることもできてなくて、だけど、エントリーシートを書くときに自分がどういうこと頑張ったかとか、何を学んで成長したかっていうことを考えるようにはしていました。就職活動をして思ったのが、もし気になる企業があったのならば、その企業を調べて、企業の求める方向に作りこんでいくほうが、就職においては大事かなと思いました。例えば、好奇心旺盛を求める企業なら、そういったPRを盛り込むのが大事だと思ったから、まず、それを知って自分をプロデュースすることが大事だと思いました。そのほうが、自己分析よりは作業的には簡単かなと。

後悔—取り繕っていた自己の気付き

就職活動での後悔はたくさんあります。準備不足だったので、企業研究ができていませ

んでした。だから、企業の問題とか、どういう方向性とか全然知らないまま受けて面接で困ったということもあったので、やっぱり企業研究をもう少ししておくべきだったという後悔はあります。企業を知らないままに面接とかして、ちゃんと答えられなかったりとか、就職活動に向けての準備を適当にやっていたりしたことが多かったので、選考を受けるときに苦労しました。自己アピールだったり、頭の中で曖昧に考えていたことを話したりして、自分で判断していたことが多かったから、周りに見てもらえばよかったかなと思いました。自分がいいと思っても、相手もいいとは思わないでしょ。だから、やっぱり第三者、先生とか、友人とか、にも見てもらって、自分の良さが伝わっているかっていう確認作業をしてもらうことを、ちょっとできていなかったのが、後悔しています。

私、この就職活動で頑張れたって思うこと正直無いですね。会社について深く調べるとかの努力もしなかったし反省ばかりですよ。就職活動を甘く見ていて、いつもみたいになんかかなるだろうってすごく楽観的でしたね。「自分を褒めるところがない」ってことが、私の就職活動の最大の反省ですかね。褒められないです。

やっぱり、今の会社に内定をもらえたのは相性でしょう。上手く言えないですけど、その会社での面接は、今までの面接とやりとりから違って、しゃべっている感じが良かったんです。今までの会社ではよく見せようと、取り繕っていたんですよ。

就職活動を始めたころは、面接で自分の考えを言えればいいのかなって思っていて、企業のこともあまり調べないまま面接に挑んでいたんです。それで最初は、とんとんと面接がうまくいって…だったら、「企業に納得させるような良いことを言ったら面接がうまくいくんだ！」って、考えるようになったんですよ。それから、逆にどんどん取り繕うようになって。企業に合わせる感じですね。

反省—自己プロデュースを超えた自然体へ

こんな状態が続いて悩んでいたんですけど、それまでは行動自体を駄目だったって認められず、親からもいろいろ言われたんですが、反発したくなって、ちゃんと向き合うというか、自分の行動を見直すってことをしていなかったんですよ。ただ、その頃に、ちゃんと落ち着いて、自分を見つめなおすと、自分を良く見せようとしていた気持ちが強くなったって反省したんです。そういうのも内定をもらえた要因は大きかったと思います。

そんな反省をしていたときに、今の会社の面接を受けたんです。面接をした時に、この会社だったら、自分の考えを受け入れてくれそうっていう感じがあって、正直な部分を出せたんです。なんか、この人たちには正直に言おうって思えました。その会社は、私の地元で、「女の子は事務」っていう感じでした。今までだったら、取り繕って「事務希望です」って言っていたけれど、「営業をしたい」っていう正直な思いを伝えたことから始まったんですよ。やっぱり、自然体の自分でいけたっていうことが内定をもらえた大きな要因じゃ

ないんですかね。どこの会社も話を聞いてくれていると思うんですが、自分が1番そう感じられたのが、今の会社なんですよ。だから、自分も自然体でいけたと思うんですよ。

もっとしっかり準備とか、OB訪問とかすればよかったですよ。でも、面接で取り繕ってきた自分の行動に対して反省して、入りたいという熱意を伝えることが大事ってことに気づけたことは良かったです。「取り繕う」というのは、その場しのぎでしかなくて、準備とかもほとんど出来てないままに、本当に付け焼刃で面接に行っていて、本当に行きたい企業だったら、その企業の求めるところに作りこんでいく、プロデュースするというプロセスが踏めると思うんですよ。そうしたら、自然体になると思うんです。

銀行とかも受けたんですけど、銀行の事務とか営業とか本当はしたくないのに、企業に受かるために、企業が求めているから「やります。」って言っていたんですよ。本当は、地域に密着した広報とかをやりたかったんですけどね。今になっては、逆に言ってもよかったかなと思います。それで駄目だったら、自分を選んでくれなかったら、「それでいいや。」っていうぐらいの気持ちで望めばよかったって。

期待—説明会から得た志望動機

どこでも出来ると思うけれど、私は働いて自分を内面的に成長できたらいいなって思っています。そして、内定をいただいた企業は何でも一から教えてくれるのではないから自分で聞かないといけない、でも、わかること、わからないことを判断した上で聞かないといけないという厳しそうだけれど、成長できそうという社風に魅力を感じました。後、小さなことかもしれないんですけど、説明会の工場見学のとときに二グループに分かれたんです。そのとき、先のグループが帰り際に説明してくれた部長さんに挨拶をしなかったらしくて、それを帰りのバスの中で社員さんが叱ったっていうのを、後のグループだった私たちにも伝えてくれて。就職活動中の学生にまで叱るのなんてなかなかないと思って、厳しいけれど、成長できるんじゃないかなと思ってます。

これから就職するんですが、私は人に対して失礼なことを言ってしまうたり、フランクな態度で接したりするところを就職活動でも反省していたんですけど、自分が思っている以上に、相手によって捉え方が違うから気をつけたいと思っています。あとは新しい環境に入るってことは、やっぱりわからないことばかりだと思うんですよ。だけど、なんでも聞くのではなくて、自分の中でわかること、わからないことっていうのをしっかり考えて、わからないことは積極的に聞いていきたいですね。その会社では、今までと違って技術職なんです。設計とかキャドとかやらせてもらえるので、できるか不安ではあるんですが、今までの環境も違うという刺激もあって楽しみだなって思います。

第IV部 ゼミ論集

第1章 Overhearer が志向に埋め込まれた対面的相互行為 ～ラジオ番組における子ども科学電話相談～

宇都麻衣子

0. はじめに

テレビやラジオ、新聞にインターネットなど、様々なメディアが存在する。とりわけ、テレビやラジオで放送されているものは、一見日常と何ら変わらないやりとりのように思える。例えばバラエティ番組であれば、その場の参加者たちは好き勝手に話をしているようにも見えるだろう。しかし、実はそうではない。

メディアをメディアとして成り立たせるには、そこに必要不可欠な存在がある。視聴者——つまり、その場には直接参加はしていないが、その場で行なわれているやりとりを聞いている存在、オーバーヒアラー¹である。もし公共の電波でこのオーバーヒアラーの存在を無視し、場の参加者だけに通じる会話を一方的に行なえばどうなるだろう。視聴者はそんなやりとりに興味が生まれず、番組を変えてしまうかもしれない。また、視聴率の取れない番組の援助を行なうスポンサーも援助をやめてしまうかもしれない。

このように、メディア、とりわけテレビやラジオというものは、何ら造作ない日常の切り出しのようでありながら、実は視聴者、つまりオーバーヒアラーを大変意識し、緻密に構成されているのである。

しかし、それが実際にメディアにおいて、どのように表れているのだろうか。本稿の関心はそこにある。よって、本稿では「いかにメディアにおいてオーバーヒアラーが志向されているのか」ということを目的に、論を進めていきたい。

1. 調査概要

いかにメディアにおいてオーバーヒアラーが志向されているのか、という点に対し、今回は「夏休み子ども科学電話相談」というラジオ番組を取り扱いたい。

このオーバーヒアラーが志向された対面的相互行為分析において、まず最も注意したいのが、「生放送であること」である。なぜ「生放送」を重視するのか。その理由は、いかにその場においてオーバーヒアラーが志向されているのかを知るためには、その場面における参加者の振舞いが大変重要なものとなってくるからである。通常の番組のように、あらかじめ録音されたものを編集して流したものでは、その空間における参加者の振舞いがいかにオーバーヒアラーを志向し、対面的相互行為研究を達成しているのかを、正確に分析できない可能性がある。そのような点において、この「夏休み子ども科学電話相談」というラジオ番組は大変ふさわしい題材である。

また、この「夏休み子ども科学電話相談」という番組は、リスナーである子どもの相談に、電話を介して答える場面を放送する、というものである。つまり、普段はオーバーヒアラーであるはずのリスナーが、電話を介してメディアに埋め込まれるという点においても、大変面白い分析となるだろう。

それでは、以上を踏まえた上で、調査の対象として扱うラジオ番組「夏休み子供科学電話相談」の概要に入りたい。

番組名	夏休み子ども科学電話相談	
	NHK FM ラジオ第1放送	
ラジオ概要	動・植物、天文・宇宙、科学、心と体の疑問点を全国の小・中学生から募集し（放送前に電話や電子メールで受け付け）、それについて放送時間中に、電話口で専門家の回答者が判りやすく解説しながら回答する。	
録音日時	8月25日（火） 午前9時05分～午前11時55分 8月26日（水） 午前8時38分～午前11時55分 8月27日（木） 午前8時42分～午前11時55分 8月28日（金） 午前8時35分～午前11時55分 8月29日（土） 午前8時35分～午前11時55分 ※電話の受付は、放送当日の朝8時から放送終了の30分前まで。	
録音機材	MDCD ラジオと IC レコーダーをケーブルで接続し、録音したもの。	
出演者	進行役	鎌田正幸
	回答者（動物・魚）	川口幸男・林公義
	回答者（昆虫）	矢島稔・高家博成・佐々木洋
	回答者（天文・宇宙）	永田美絵
	回答者（植物）	藤田智
	回答者（野鳥）	松田道生
	回答者（科学）	高柳雄一
	回答者（心と身体）	篠原菊紀
	回答者（環境）	小出五郎

録音したラジオ番組は、トランスクリプトにおこした上で、会話分析に基づいて検証していく。会話分析とは、「会話のなかでどのように一定の活動が成し遂げられ相互行為が組織されているのかを明らかにする」（西坂, 1999:74）ものであり、このラジオという映像の存在しない音声だけの世界で行なわれる相互行為を研究するに、ふさわしい方法であると思う。

2. 夏休み子ども科学電話相談の全体の流れと特徴

2-1. 『夏休み子ども科学電話相談』の流れ

それでは初めに、『夏休み子ども科学電話相談』全体の流れをみてみたい。場面に登場するのは、「進行役」であるアナウンサーと、それぞれ専門分野を持つ「回答者」が数名、そして「相談者」である子どもである。

まず子どもが掛けた電話は、最初このラジオ番組を担当するスタッフが取り、簡単な説明および質問（名前や出身地を聞くなど）をした後、進行役に回す、という形だ。よって、このラジオにおける会話開始の合図は「はい、次は、〇〇（県名）のお友達です。もしもし」という進行役が告げるところから始まる。

次に会話が始めると、進行役は名前や学年、質問を聞いてから、回答者に場の主導権が移行する。そこでは相談者の質問内容によって次の発言者が決定され、指名された回答者が答える、という構図が描かれている。基本的に、一回の電話で相談できる内容は一つである。ただし関連した相談のみ2つすることもある。また、担当する回答者が答えを言っている間、話すのは当の回答者のみである。進行役や他の回答者は話さない。ただし、時おり進行役や他の回答者が笑ったり、相槌、感嘆を入れたりすることがある。

最後に、相談者が「はい」「わかりました」などで納得した返答をし、進行役がそれで相談に対する説明が終了したと判断すると、再び場の主導権は移り、進行役が握ることとなる。会話終了のやりとり²は、相談者と回答者、進行役との間で明確に「さようなら」と言うことはめったになく（時おり進行役や回答者が「バイバーイ」と言うこともあるが）、相談者が「ありがとうございました」と言うことが、その代わりとなっている。また、相談者と回答者の会話が終了後に、進行役が先に行なわれた会話の中から気になった点について質問し、回答者が答えることがある。

2-2. 『夏休み子ども科学電話相談』の特徴

先の項ではこの「夏休み子供科学電話相談」の全体的な流れについて述べたが、ここでは私がこのラジオを聴いていて感じた特徴を述べていく。

まずこの番組を聴いていてもっとも思ったことは、進行役のアナウンサーおよび、回答者達は相手が子どもであることを明確に意識して会話をしているという点である。例えば、進行役は新しい相談の導入場面で、子どもを「お友達」と呼んで紹介し、進行役および回答者は、個人を識別する符号として、「〇〇（名前）くん」もしくは「〇〇（名前）ちゃん」と呼びかけている。さらに、進行役および回答者は、できるだけ子どもが理解しやすい言葉や例に置き換えて説明しているし、子どもと話す際には、語尾を伸ばさず、比較的ゆっくりと話すなどしている。

このような行動は、一見なんらおかしくない行為に思える。この番組には先ほども紹介したが「進行役、回答者、相談者」という地位、つまりカテゴリ³が存在する。しかしまた同時に、番組名に「夏休み子供科学電話相談」とあるとおり、相談者は「子ども」であ

ると明確に理解することが出来る。そしてそれに対して、番組の進行役を勤めるアナウンサーや相談に答える回答者が「大人」であると理解することは、やはり同様に容易であろう。彼らは{進行役、回答者、相談者}という地位カテゴリーにあると同時に、{大人、子ども}という地位カテゴリーでもあるのだ。そうであるならば、呼び方や話し方に特徴が見られても、その対応は適当だと判断されるかもしれない。

もちろんそうであろう。しかし、この場はただのラジオ番組の場ではない。ここはラジオ番組であると同時に、相談場面でもあるのだ。串田は、「平行して利用可能なカテゴリー集合が複数ある場合、参加者たちは参加の連携の配置を維持したまま、カテゴリー化を切り替えることも可能である」(串田, 1999:129)と述べている。

つまり、このように複数カテゴリー集合が並行する場合、その場に参加する者はそれが適当な場面に応じてそれを使い分けられることができるということだ。そうであるならば、当然ながらこの複数のカテゴリー集合は、番組構成に決して無関係でないし、むしろ積極的に番組を構成する要因となっているはずである。そして私は、ここにラジオ番組としての特徴を一つ見ている。

つまり何が言いたいのかというと、先ほど私が提示した特徴が、一見すると進行役、回答者が大人であり、相談者が子どもであるからそのような会話となるのだと思えなくもない。しかし、この場は大人と子どもの相談場面でありながら、また同時にラジオという公共のものでもあるのだから、進行役であるアナウンサーや回答者達は、そのことを志向してその場その場で自らのカテゴリーを巧みに使い分け、番組を構成しているのではないだろうか。そして、先ほど上記に載せたこのような語り方や呼び方は、子どもに対する配慮であると同時に、そのラジオという公共的な存在を意識した行動のほんの一例ではないか、ということである。

そして、このカテゴリーをいかに場面に応じて使い分けなのか、ということが、本稿の目的である「オーバーヒアラーを志向した対面的相互行為」に重要なかわりを持ってくる。それがどういうことなのかを、以下の節で見ていきたい。

3. Overhearer を意識した場面構成

3-1. 「ビジョウ突起」の正体

「夏休み子ども科学電話相談」というラジオ番組が、実は複数のカテゴリーを使い分けて構成されている、という事を述べた。さらに、そのカテゴリーが本稿の目指すところである、「オーバーヒアラーを志向した対面的相互行為」にどう関連してくるのかを、この節で述べていきたい。

なお、以下では実際に「夏休み子ども科学電話相談」においてなされた1つの相談場面「ビジョウ突起」の中から、第1項で断片1、第2項で断片2、第3項で断片3を引用し、分析していく。具体的に断片を見る前に、軽く「ビジョウ突起」の相談場面について触れ

ておく。ここでは、まずこの場面で、相談者Aは「チョウチョの仲間には：アゲハチョウなどは（.）ビジョウ突起が羽の下の方にあるけれど：ないものも（.）あるので：ビジョウ突起の付いている りゆ：うを教えてください」という相談をしている。それに対して、「ビジョウ突起」という語が、アナウンサーおよび回答者Yに馴染みのない単語として振舞われ、ここから、この「ビジョウ突起」という単語の特殊性が窺える。その後、「ビジョウ突起」に対する回答者Yの解説が始まるわけであるが、その過程で、すでに「ビジョウ突起」が虫の口の一部である「下唇」の「髭の一部」が変化したものであることが知らされている。

次に扱う場面は、その「ビジョウ突起」である「下唇」の「髭の一部」に特に変化したチョウの代表的な例として、回答者Yがテングチョウを挙げているところである。この場面が直接、「オーバーヒアラーが志向に埋め込まれた対面的相互行為」の分析になるわけではないが、後で重要となる部分なのでここにも触れておきたい。

〈断片1〉 ビジョウ突起の典型例

日時：2009年08月26日 10時15分42秒～

場面の参与者：アナウンサー、回答者Y（=矢島）、相談者A

- 001 回答者Y でもあなた テングチョウって知ってる？
002 相談者A テングチョウ？ あ 何か聞いたことがある
003 回答者Y 聞いたことある あれはチョウチョだからね
004 相談者A はい
005 回答者Y テングチョウってのはね： なぜテングチョウって言ったかっていうと
006 その： 鼻状突起が ダ： と伸びて長いものだから：
007 相談者A あ：
008 回答者Y 初めて見た人が 天狗の鼻に見えちゃったんだね [へへへ
009 相談者A [はい
010 回答者Y のように見えるっていうことで
011 相談者A はい
012 回答者Y それでテングチョウって名前が付いたんですよ：
013 相談者A （.） は：：

ここでまず注目したいのは、001-012 行目にかけて、回答者Yが「ビジョウ突起」、つまり「下唇」の「髭の一部」が変化した虫の典型例として、テングチョウを例に出しているところである。とりわけ 005-008 行目にかけて、のテングチョウの「テング」とは、下唇の髭の一部が伸びて大きくなったものを、天狗の鼻と間違えたためにつけられたものだと、述べている。ここから、すでにアナウンサーは「びじょうとつき」が「鼻状突起」である

ことに気づいていると推測できる。

また、カテゴリーに関係する部分があるのでここに触れておく。001 行目で回答者Yがした「テングチョウって知ってる?」という発言に対して、相談者Aは次の行で「テングチョウ? あ 何か聞いたことがある」と返している。ここで回答者の問いに対して、まず「テングチョウ?」と繰り返している。この繰り返しは、その語句に聴き覚えがない、もしくは相手の言い間違いを暗に指摘する時などにされる物言いであり、この場合、「テングチョウ」という語が回答者Aに馴染みのない言葉として扱われていることが読み取れる。さらにその後、「あ」という感動詞の後に「何か聞いたことがある」という風に答えていることから、相談者Aが「テングチョウ」という語にあまり馴染みがないという振る舞いが読み取れる。

さらに、012 行目で回答者Yが「それでテングチョウって名前が付いたんですよ:」と言ったことに、013 行目で相談者Aが「は::」と返している。この「は::」とは、001 行目から 012 行目までの回答者Yの教示を受けての返答であり、相槌や納得、感心などを意味する感動詞である。この感動詞は、回答者Aが言うテングチョウについての知識を教授され、新たな知識として受け止めたことを意味している。

ここで言えることは、回答者Yの方が相談者Aよりも知識が多く、自らを教授する立場「専門家」として志向し、相談者Aもまた自らを「素人」と志向して振舞っているということである。ここからのやり取りから、{相談者A：回答者Y＝素人：専門家} のカテゴリーが成り立っていることがわかる。

3-2. 相談者Aとの会話終了の達成

先ほど断片1で「ビジョウ突起」が特に変化した例として「テングチョウ」が挙げられ、このチョウの「テング」とは、発達した「ビジョウ突起」が「天狗」の鼻に間違われたために名づけられたのだと回答者Yが発言している。そこから、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるということが、聞いているアナウンサーに推測されたのではないかと記述した。

次に取り上げる断片2は、すでに相談者Aが相談を終了し、会話の主導権が回答者Yから進行役であるアナウンサーに再び移ろうとしている場面である。この場面で見たいことは、いかに相談者Aと回答者Y、そしてアナウンサーが会話の終了を協同で行っているのかである。少し余談であるようにも思われるが、相談が終了しているというところに注目したいがためであり、それが次の第3項で行なう分析、つまり本稿で本命にも繋がるのである。

〈断片2〉 ビジョウ突起の相談終了場面

日時：2009年08月25日 10時11分26秒～

場面の参加者：アナウンサー、回答者Y（＝矢島）、相談者

- 001 回答者Y ね: こうやって口を調べること 口を比べること
 002 相談者A はい
 003 回答者Y 分類を知る一番大きな手がかりなんで ぜひ 続けてください
 004 相談者A はい
 005 回答者Y は:はい
 006 アナウンサー はい
 007 回答者Y わかりました:?
 008 相談者A はい ありがとうございます
 009 回答者Y は:はい
 010 アナウンサー は:はい じゃあ また質問してください
 011 相談者A はい [ありがとうございます:
 012 アナウンサー [びじょうと
 013 アナウンサー はい (.) ビジョウっていうのは

まず、上記の断片 2 を見ただけで、この相談者Aによる相談が終了しているということが読み取ることができる。これ自体は、なんら変わらない、ごく普通に行われている会話終了の際のやりとりである。しかし、その会話が終了するとは実際どういうことなのか。この項で見ていくのは、まさにそのようなことである。

シェグロフとサックスは、会話における順番取得装置⁴に言及した後で、会話の終了とは「発話が完了しうる場所での移行適切性⁵の停止をいかに調整するか」であると述べ、そのための方法として「最終交換」(terminal exchange)を挙げている。この最終交換とは、「さようなら - さようなら」のやりとりのような慣習的な成分から形成されており、発話対偶(utterance pair)¹、つまり隣接対偶⁶(adjacency pair)が構成成分である。このように、最終交換として機能する隣接対偶の構成成分は「ありがとうございました」など多種存在し、また終了交換だけで使用されるとは限らない。ここで重要なのは、会話の終了とはそのような最終交換の語がどこに配置されるかによって決まる、ということである。また、最終交換となる語を導くためには先終了句(pre-closing)⁷というものが存在し、シェグロフおよびサックス(1974=1989)は、このような先終了句およびその後が続く最終交換をまとめて、終了部分と呼んでいる。

要するに、会話とは、会話参加者同士の協同作業であり、その終結は参加者全員の了承のもとで行われるものなのである。例えば 2 人で話しているときに、片方が何の脈絡もなく会話を終わらせたならば、もう片方は相手が何か怒っているのかもしれないと推測するだろう。またある会話の区切りがつき、片方が会話を集結させようとしても、もう片方がそれを拒み新たな話題を展開したならば、会話を終了することはできないだろう。このように、会話を終結するためには「最終的な隣接対の交換を成功に導くために、これからお

互いに新しいトピックの導入は避け、会話の停止を確実にするためのプロセス」(山田, 1999:21)が必要となってくるのだ。そしてそれが、先ほど述べたような先終了句や、最終交換に相当するわけである。

それでは、断片2に当てはめつつ説明していきたい。ここまでの前提として、すでに「ビジョウ突起」が何であるかの説明がなされ、このラジオ番組の主題である相談に対する答えは与えられている。つまり、相談の主要目的はすでに達成されたといってもよい。そのことを踏まえたうえで、まず003行目の発言を見ていく。ここで、回答者Yは相談者に向かって「分類を知る一番大きな手がかりなんで ぜひ 続けてください」と述べている。この「ぜひ 続けてください」とは、この会話が終了した後に、相談者Aがすることに対してのアドバイスである。似たようなアドバイスは、相談中にもたびたび行われており、回答者Yがこの場で再びそれを勧めたのかがここで一つ注目すべき点となってくる。なぜなら、会話中になされた「題材がその会話の終局で用いられるならば、その会話の終了に正当な理由を与えることができ」(シェグロフ・サックス, 1972=1989:210)、回答者Yのような「ぜひ 続けてください」といった言い方になれば、それは終了の正当な理由が宣言されたことになるからである。この宣言が、相談が終了した後という、まさに適切な配置でなされるならば、これは先終了句として機能しているといえる。そしてさらに、続く004行目で相談者Aも「はい」と述べ、これに同意している。この同意は移行適切性の終了の了解であり、相談者Aがもはや新たに話題を繰り返す気がないことを意味している。

先終了句のやり取りに了解なされ、その続く005行目で回答者Yは「はい」と言い、同じく先終了句となりうる語を発している。この先終了句の後に続く先終了句とは、発話の順番が自分にまわってきた時に、もう話すべきことがないことを示すために、先終了句を用いてパスをしているのであり⁸、やはりこの相談者Aに対する回答が終わったことが読み取れる。

しかしここまででは、まだ相談者Aによる相談が完全に終わったとは言い難い。確かに、相談内容に対する答えが与えられ、また003行目で回答者Yにより終了の宣言が為された(「ぜひ 続けてください」)。それに対して相談者Aも同意したわけであるが、これはあくまでも先終了句、つまり先終了となる可能性のある句」(シェグロフ・サックス, 1972=1989:198)にしかすぎないということだ。先ほども書いたとおり、会話の終了とは話者同士が協働で達成するものであり、言い換えれば、終了が行われている間中でも、話者が望めば会話をいつでも再開することができてしまうのだ。

つまり、相談に対する回答を述べた回答者Yおよび進行役であるアナウンサーにとって、いかに会話を終了するかが課題となるわけである。その意味で、004行目の発言からは、相談者Aが再び形式的に不適な返答をしたと読み取ることも可能だ。その直前の003行目で回答者Yは終了の宣言を行ったわけであるから、続く言葉には了承の先終了句と、それに続く最終交換が必要となってくる。しかしここで相談者Aは先終了句(004:「はい」)しか述べなかつたために、回答者Yは発言をパスする意味の先終了句を述べることもしかできな

かったのである。

さきほど会話の終了は会話参加者による協同の達成課題であると述べた。しかしそのような意味からすると、次にくる 006 行目のアナウンサーの発言は少々異質である。というのも、回答者Yと相談者Aの会話が始まってから、アナウンサーは相槌や笑うことはあっても、基本的に発言としてとれるものは何一つなかった。それも当然である。なぜなら、この相談という場において、アナウンサーは素人であり、答える権利があるのは昆虫の専門家である回答者Yのみであるからだ。この断片 2 の 007 行目において、もはやその過程に入っているとはいえ、まだ場面は相談者Aによる相談が終了していない。それなのに、なぜアナウンサーは発言し、それが違和感なくこちらに読み取ることができるのだろうか。

それは、彼がこの場で「素人」としてのカテゴリーではなく、「進行役」としてのカテゴリーから行動しているためである。進行役というこの空間での責任者にとって、場を円滑に進行していくことは、権利であり義務でもある。そうであるならば、このような会話に入り込む振る舞いは可能となる。

それは果たしてどういうことなのか。私たちは、普段規範が行為を制約するものだと考えがちである。しかし実はそうではない。喫茶店で他人の会話に「静かにしなさい」と注意すればおかしい行為であるが、教師が授業中、生徒に「静かにしなさい」を注意することが正当な行為とされる。このように、人は自らがどのような地位カテゴリーにいるかによって、つまりカテゴリーの有する規範によって行為が可能になっているのである。その意味で、アナウンサーが相談途中で口をはさむことは、「進行役」として振舞うにおいて適切な行為であるといえる。

つまり、時間が限られたラジオという場において、進行役が今円滑に達成すべき課題は会話の終了である。今まで発言をしてこなかった彼が、ここで「はい」という先終了句を述べることによって、場に新たな終了の宣言がなされたと推測することができる。そのため、回答者Yは 007 行目で最終交換を述べることができ、また相談者Aもその了承として「ありがとうございました」と最終交換を交わしているのだ。

続いて 010 行目のアナウンサーの発言「はい じゃあ また質問してください」に、相談者Aは再び回答をしてはいるが、その言葉は「はい ありがとうございました:」であり、アナウンサーの「じゃあ また質問してください」という発言に対しての了承である。そしてそれは、やはり先終了句である「はい」と、そして最終交換と読み取り可能な「ありがとうございました:」と述べているだけである。

これら断片 2 のやり取りは、相談に対する答えが与えられた後での会話である。つまり、すでに本題は話された後だと判断できる。その意味において、上記のように終了部門が配置された箇所が回答者Yと相談者A、そしてアナウンサーによって適切であるように振る舞われ、会話が終了したということが理解可能であると思われる。

3-3. アナウンサーによる「ビジョウ突起」への理解表現

ここまでで、「ビジョウ突起」が虫の口の一部である「下唇」の「髭の一部」が変化したものであることが知らされ、とりわけ「ビジョウ突起」が変化した例として「テングチョウ」が挙げられた。またこのチョウの「テング」とは、発達した「ビジョウ突起」が「天狗」の鼻に間違われたために名づけられたのだと回答者Yが発言している。そこから、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるということが、聞いているアナウンサーに推測されたのではないかと思われる。

また先ほどの断片 2 では、相談者Aとの会話の終了を達成するかという点について、先終了句や最終交換などを用いながら述べてきた。

次は、いよいよ本稿の目的である「オーバーヒアラーが志向に埋め込まれた対面的相互行為」に触れるところを分析していきたい。それでは、いかにそれが達成されているのかを次の断片 3 を見ながら述べていきたい。

〈断片 3〉 ビジョウ突起によるすれ違い

日時：2009年08月26日 10時11分42秒～

場面の参加者：アナウンサー、回答者Y（=矢島）、相談者A

- 001 アナウンサー はい じゃあ また質問してください
002 相談者A はい [ありがとうございました:
003 アナウンサー [びじょうと
004 アナウンサー はい (.) ビジョウっていうのは
005 回答者Y 要するに
006 アナウンサー は は [はなじょう ってことですか] ええ
007 回答者Y [鼻のように伸びたっていう:]
008 アナウンサー あ:
009 回答者Y 意味なんです
010 アナウンサー ええ
011 回答者Y 今いったようにそれは下唇の髭の
012 アナウンサー ええ
013 回答者Y 一部が伸びたものなんで:
014 アナウンサー ° あ ()°
015 回答者Y あの あくまで: このビジョウっていうのは人間が感覚的に あ 鼻み
016 たいだ:
017 アナウンサー あはは
018 回答者 って言って
019 アナウンサー ええ

- 020 回答者Y ま 俗称なんですね
021 アナウンサー ° あ°
022 回答者Y はい
023 アナウンサー 漢字で書くと は はなじょう と書く
024 回答者Y そうなんです
025 アナウンサー >° び あ はい° < あ わかりました
026 回答者Y はい
027 アナウンサー はい (.) では次の質問です

それでは、断片を見ていく。先ほどの第 2 項で、すでに相談者 A による相談内容は解答が与えられ、会話が終了されたと読み取り可能であった。私がここで注目したいのは、なぜ相談者 A による相談が終わったにもかかわらず、アナウンサーは引き続き「ビジョウ突起」について言及するような発言をしているのだろうか、ということである。

進行役であるアナウンサーにとって、その適切な行動とは番組を円滑に進めていくことだといえる。この夏休み「子ども科学電話相談」というラジオ番組において、相談する権利を持つのは相談者であり、進行役にはない。その点で、すでに終わった内容について発言することは奇異に思える。ではこの質問をすることで、アナウンサーはいったい何を志向していたのか。具体的に、データを見ながらそれらを検討していきたい。

まず、003 行目で「びじょうと」言いかけ、相談者の終了交換と重なってその発言を一度止めている。続く 004 行目で再び「ビジョウっていうのは」と切り出し、それに回答者 Y が「要するに」と言う発言で答えている。それに対して、アナウンサーは回答者 Y に続く行で「は は はなじょう ってことですか」と回答者 Y の発言を引き継ぐような形で、問いかけている。

この発言は、別にアナウンサーが「ビジョウ突起」というものの正体がわからずになされた質問であるとは言い難い。なぜなら、先ほど断片 1 で扱ったように、「ビジョウ突起」が変化した例として「テングチョウ」が挙げられ、このチョウの「テング」とは、発達した「ビジョウ突起」が「天狗」の鼻に間違われたために名づけられたのだと回答者 Y が発言している。そこから、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるということが、聞いているアナウンサーに推測されたのではないかと思われる。

もちろん、それだけではただの推測にしかすぎず、実際にアナウンサーが「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるかどうかを理解しているかどうかは分からない。しかし先の発言から、彼が「ビジョウ突起」が何であるのかを、理解しているような振る舞いが読み取れるのである。なぜそう読み取れるのか。具体的にデータを見ながら詳細に分析していく。

まず 006 行目でアナウンサーは、先の行で回答者 Y により発言された「要するに」という語を引き継ぐように、「は は はなじょう ってことですか」と述べている。この「はなじょう」の前に繰り返される「は は」という語は、次に発言する言葉探しと推測され

る。では「は は」の次に発言されているのは何なのか。それは「はなじょう」である。しかし、なぜ「はなじょう」と言い表すために、アナウンサーは言葉探しをしたのか。

その答えは明確である。つまり、このアナウンサーの頭の中には、「ビジョウ＝鼻状」という構図がすでにあり、その「鼻状」という字を他者に分かりやすく表現するためにはどんな語が適当か、それを探すために、「は は」と言葉探しをしていたのである。もちろん、その言葉が実際にそのような意図を持ってなされた、ということはこちらには判断できない。しかし、そのように理解できる振る舞いとして、読み取ることは可能である。なぜなら、理解とは、その理解したことをそのまま示すだけでは不十分である。例えば会話で相手の言った内容をそのまま繰り返せば、それは相手に理解していないと取られかねない。理解を示すのであれば、相手の言ったことに対して「笑い」や演技といった何らかの応用を利かせることがふさわしいのである。その意味で、このアナウンサーが「はなじょう」と表現したことは、「ビジョウ」の応用であり、彼が「テングチョウ」の例から十分に理解したという振る舞いであると読み取れるのである。

3-4. 回答者Yの助け舟と勘違い

さて、再びアナウンサーがなぜ相談が終了した後で「ビジョウ突起」の話を持ち出したのかについて、再び論じていきたい。007行目を見れば分かるように、アナウンサーの「はなじょう ってことですか」に被さるように、回答者Yは「鼻のように伸びたっていう」と述べている。通常このようなことは、会話する上では形式的に不適當である。私たちは相手が話しているのならその発言が終わるまで口を開かないようにするだろうし、もし同時に発話したとしても、相手の発言が先であるのならすぐに黙るだろう。もちろんそうでない時もある。例えば、あえて相手の発言を遮ることで自らの怒りを表現したりもする。ではこの場合、なぜ彼はこのようにあえて被さって発言したのか。

もう一度先の文を思い出していただきたい。ここでアナウンサーが話題にしているのは「ビジョウ突起」であり、それに関して、006行目で「は は」と言葉探しをしている。ここで「ビジョウ突起」について専門家であるのは回答者Yであり、その意味で発言しているアナウンサーは素人である。そうであるからには、この007行目の回答者Yの発言は、「はは」と言葉探しをしているアナウンサーへの助け舟として言われたものと推測できる。なぜなら005行目の発言も、その前のアナウンサーの発言（004: ビジョウっていうのは）を遮る様であるし、007行目では先の言葉探しの「は」を受けて、「は」で始まり「ビジョウ突起」に結びつく語を推測し、「鼻のように伸びたっていう」と発言したのではないかと考えられるからだ。

またさらに、この場において彼は{専門家、素人}というカテゴリー集合で振る舞っている。専門家は素人に対して説明する義務や知識を持ったものとして振る舞う権利を持っている。この意味で、回答者Yが素人であるアナウンサーを遮るように発言していることはある意味妥当な行為であるとも推測される。その証拠に、007行目で回答者Yが発言した

あと、「ええ」という承諾の返答を返している。これはアナウンサーが回答者Yの行為を「不適切」な行為であるとみなしていない証拠ともなる。その意味で、この回答者Yの行為は、アナウンサーの発言を先読みしたものであると同時に、助け舟として読み取ることができるのだ。

しかしこの行為はまた、同時にお節介としても読み取ることができる。なぜそう思うのか、続きを見ていきたい。011行目から022行目にかけて、回答者Yは再び「ビジョウ突起」について一から説明している。しかし回答者Yが「今いったとおり」と断りを入れているように、これらの発言は耳新しいことではない。すでに公共に埋め込まれた知識である。それゆえ、「ビジョウ突起」が「下唇」の「髭」の一部が伸びたものであり、「人間が感覚的に あ 鼻みたい」であるという発言において、アナウンサーはそのことに相槌は打つものの、その声は小さい。

回答者が説明を始める011行目から説明を終える022行目までにかけて、アナウンサーが比較的通常の音量を出すのは017行目の「あはは」と019行目の「ええ」のみである。そのため、これは次の話の促しである相槌であると判断される。アナウンサーが017行目で笑いを浮かべたのは、015-016行目の回答者Yの「あ 鼻みたいだ」という演技に対しての笑いであり、続く019行目の「ええ」は020行目の「と言って」という回答者Yのとりわけ強調した言い方に対する促し、つまり、この「言って」という語の後にこの回答者Yの語る一連の話題のオチが来ることを予測し、それに対してはっきりとした声の音量で促しをしているわけである。

注目したいのは023行目のアナウンサーの発言である。ここで彼は「漢字で書くと は はなじょう と書く」と述べているが、これはまさに006行目の「はなじょう ってことですか」の言い直しとして読み取ることができる。しかし、007-020行目の間で回答者Yから「ビジョウ突起」について説明が与えられたにもかかわらず、なぜアナウンサーは再びこのように言い直しをしているのだろうか。これが意味すること、それはここでアナウンサーの求める回答は、回答者Yより与えられる「ビジョウ突起」についての説明ではなかったということである。

そもそも、アナウンサーが「テングチョウ」の例、および「はなじょう」という応用した発言から、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であると理解していたと推測できる。しかし相談者Aとの会話が終了したあとで、アナウンサーが回答者Yに「ビジョウ突起」について何か発言をしようとしたために、回答者Yはそれが専門家である自分への「ビジョウ突起」の説明の要請だと推測し、発言をしたのではないかと考えられる。

しかしこの判断は勘違いである。なぜなら、アナウンサーは回答者Yの発言が終了した時点で再度同じ質問を繰り返しているからである。つまり、006行目の問いは、回答者Yの007-020行目の説明からは解決されなかったのである。ではなぜ、このようなすれ違いが生じたのだろうか。そしてアナウンサーは、いったいどのような答えを求めていたのだろうか。

3-5. カテゴリーが生み出すずれ違いと公共性

アナウンサーにとって、005-009 の回答者Yの発言が助け舟となり、また同時に続く011-020 行目の発言がアナウンサーの求める答えとならなかったのだろうか。

そこには、双方が意識するカテゴリーの違いが潜んでいる。011 行目で回答者Yは「専門家」として発言をしている訳であるが（「今いったようにそれは下唇の髭の」）、上記にある第4項の助け舟の分析でもふれたように、回答者Yはアナウンサーを「素人」として扱っている。しかし回答者Yが011 行目で「今いったように」と断っているとおり、「ビジョウ突起」における説明は既になされており、「はなじょう」と言ったことから、アナウンサーがそれを理解していたということも、推測できる。つまり、アナウンサーこの時点ですでに「ビジョウ突起」について「知る者」であった。ではなぜ、アナウンサーはすでに知っている知識について尋ねるような発言をしたのか。

この疑問は実のところ、本稿で私が最も重要としている疑問に深く結び付いている。つまり、アナウンサーが相談者Aによる相談が終了した後に、「ビジョウ突起」について言及したこと、それはとりもなおさず、このラジオを聴くリスナー、つまりオーバーヒアラーを意識してその発言をしたからではないだろうか。

ここで、西阪仰が「箱庭療法」を事例として扱った相互行為空間について取り上げたい。西阪は「箱庭療法」を作る場面を通して、その場に参加する、それぞれの参加者の立場の違いについて述べた後、こうまとめている。

私たちが生きる空間は、その空間（における活動）に参加するしかた、もしくは参与のあり方の布置としての参与フレームとして構造化されている……。一方、参与アイデンティティのそのつどの集合である参与フレームは、規範的に構造化されている。参与アイデンティティおよびその配分まつわる**権利と義務**の全体布置が、参与フレームにほかならない……。 (西阪, 2001:57) (強調は西阪)

つまり、私たちの生きる空間には、それぞれ人びとの活動が存在し、その活動に参加するにはそれにふさわしい配置やタイミングというものが存在する。いくら会話を聞いていたからと言って、かなり距離のある位置から見知らぬ他人の会話にいきなり参加すれば、かなりの違和感を伴うだろうし、逆に自分の話題が出され話しかけられている場面でそれを無視すれば、これまたかなり不自然であろう。このように、会話には視線や配置、や話している内容などでそれぞれ参加する権利と義務が付随してくるのである。

先ほども扱ったとおり、「進行役」であるアナウンサーに、相談する権利はないし、「ビジョウ突起」について説明する権利もない。しかし、この番組はラジオという公共の電波を通してなされている。当然のことであるが、そこには、このラジオを聞いている、その場に参加していないが存在する聴衆、つまり、オーバーヒアラーの存在が前提とされているのである。つまり、この番組がオーバーヒアラーを対象としている以上、彼らに分かる

ように番組を構成していく義務がるし、逆にオーバーヒアラーは理解して聞く権利がある。その意味で、番組を滞りなく進めていく振る舞いを持つカテゴリーが「進行役」なのである。

それを踏まえたうえで、もう一度 006 行目、023 行目のアナウンサーの発言を見ていきたい。ここでアナウンサーは二度にわたって「はなじょう」と問いかけている。つまり、ここでアナウンサーが問いをしているのは「ビジョウ」が「はなじょう」と書く、つまり表記である。アナウンサーは回答者にここで「ビジョウ」の表記を尋ねているにもかかわらず、それに関する直接的な回答は得ることができなかった。そのために、彼は再度「漢字で書くと は はなじょう と書く」という問いをし直したのである。

このことが、オーバーヒアラーを志向した、行動として読み取ることには可能である。つまり、先ほどの回答者Yとアナウンサーの会話のすれちがいと読み取られる箇所の要因は、単に「専門家」として振る舞う回答者Yと「進行役」として振る舞うアナウンサーの志向性の違いと推測されるのだ。

専門家として、回答者Yの発言は正当なものである。しかし、「進行役」であるアナウンサーにとって、より正確な表現をオーバーヒアラーに伝えるために、表記を明示することは大変重要なことである。しかし、005 行目から 022 行目までの発言では「ビジョウ突起」についての説明や、それが「俗称」であるという新たな知識は与えられたものの、「表記」についての発言をしなかった。そのために、ここである種すれ違いが生じているのである。そしてそれは、すでに述べたようにお互いが振る舞うカテゴリーの違いによって、生み出されたものに他ならず、ここでアナウンサーがこのように「表記」にこだわる姿勢が、ここで一つこの番組の「ラジオらしさ」を表しているのである。

またさらに、この双方が振る舞うカテゴリーの違いが生み出した、公共性が現れている箇所がもう一つ存在する。

断片 3 の 011-022 行目の間、アナウンサーは回答者Yが話している間そのことを訂正していない。通常、自分がした質問に対して、意図と違った答えが帰ってくれば、相手にその間違いを指摘し、修復して適切な答えを得ようとするだろう⁹。しかしアナウンサーはそれを行わない。彼はここでただ「ええ」と肯定の意味を示す相槌で先を促し、相手の演技に対しての理解を笑いで示すだけである。そうして 022 行目で回答者Yが一つの話題の終了を意味する発言をした後で、ようやく修復をする。なぜなら、回答者Yが話題を修復しないうちに修復を促すことは、非優先的¹⁰な行為であると社会的にみなされているからである。そのため、アナウンサーは回答者Yに自己修復の機会を最後まで与えた後、ようやく他者修復を行うわけである。

しかし、それも回答者の発言に対して、あえて相手の発言のどこが間違いであったかを強調するような言い方はしない。つまり、自己修復を求めるような言い方をしていないのである。もともとそこにはミスなどなかったかのように、あくまでも回答者Yの発言を受けて、「漢字で書くと は はなじょう と書く」と、回答者Yの発言につながりをつけて

発言をしている。そしてそれによって、回答者Yは専門家としての面子が維持され、またアナウンサーは専門性に適った回答が得られたと考えられるのである。

このような言い方をすることは、ただ回答者Yの面子を保つだけでない。ここで回答者Yの面子を保つことは、番組の面子を保つ意味でもあるのである。ここであからさまに回答者Yの反応の形式的な不適を指摘することは、相手が間違えたということ指摘することに繋がる。つまり、回答者Yの信頼性に関わってくるのだ。そのような信頼性のかけた相手の発言に、どれほど重きが置かれるだろうか。ここで回答者Yの面子を保つことは、番組が、回答者Yの発言の信頼性を維持するために適った行動であり、また同時にここがそのような間違いを指摘する場でもないという、アナウンサーの2重の意味での「公共性」が表現されているのである。

4. まとめ

本稿の関心は、メディアにいかにかオーバーヒアラーを志向した振る舞いが表れているのか、ということであった。そしてそのため、今回は「生放送」であり、またオーバーヒアラーであるリスナーがメディアにおける参加者となる点で、大いに面白い分析が出来ると期待した「夏休み子ども科学電話相談」を調査対象とした。その結果がどうであったかどうか、ということはすでに見てきたとおりだ。

この「夏休み子ども科学電話相談」において、ラジオ番組参加者たちがいかに複数のカテゴリーを場面ごとに使い分けているのかが読み取れた。それも、ただ使い分けるのではない。例えば、相談者Aとの会話終了の場面において、「進行役」として場を円滑に進行させるための回答者、およびアナウンサーの振舞いや、「ビジョウ突起」という語をめぐり、「進行役」という立場から「表記」の説明を求めるアナウンサーと、「専門化」という立場から「説明」をする回答者Yとのすれ違いがみられた。

そのような例から、「夏休み子供科学電話相談」というラジオ番組において、それぞれのカテゴリーが場面に応じて使い分けられていることが読み取れた。そこには、時にすれ違いはあるものの、番組の構成にふさわしい振舞いをするのですれ違いもなかったことにされ、相手の面子だけではなく、番組の面子も保つことができた。

それらは得てして、その番組において振舞うにふさわしい行動を意識してのものであり、まさにカテゴリーの有する規範がその振舞いを可能にしていたのである。このように、「夏休み子ども科学電話相談」とは、ラジオの電波から流されているからラジオなのではない。番組の参加者たちが、巧みにカテゴリーを使い分け、それぞれの属する地位に基づいて適切な行動をしようとする中で、達成されているのである。

今回はその典型例として、番組の「進行役」がいかにそれを達成しているのか、という点だけを見てきたが、もちろん、それは他の場面参加者達にも当てはまるだろうと、ここで断っておく。

そのような意味で、まさにメディアというものは、「オーバーヒアラーを志向した対面的相互行為」という場として、参与者達の共同作業によって達成されていると見ることができるのだ。

¹ オーバーヒアラー：「Goffman (1976) や Clark and Carlson (1982) は、会話の参与者を、会話に参加していることが他の成員によって知られている、承認された参与者 (ratified participant) と立ち聞き者 (overhearer) に分け、前者をさらに、話し手 (speaker) ・受け手 (addressee) ・傍参与者 (side-participant) に分けている」 (榎本・伝, 2003:25)

² 会話終了のやりとり：会話の終了については、第3節2項で扱う。

³ カテゴリー：もしある人が勉強を強制される時に、「学生だから勉強をすべきだ」というような言い方ならば、多くの者が納得するだろう。つまり、「学生」が「勉強すべき」という規範が成り立つのは、その者が「学生」という地位だからこそなりたつものであり、この例から言えるように、「説明を行なう人は、説明の対象となる人をなんらかの地位によって特徴づけている」 (小宮, 2007:102) のである。これを、サックスは「カテゴリー化」と呼んだ。またこのような地位のカテゴリー化は、「性別」や「年齢」など一人の人に複数あてはまるため、ある人の行為を説明するときは、「その行為者が今何者として行為しているという、行為者の帯びている意味にある」 (小宮, 2007:104) (強調は小宮) のである。

⁴ 順番取得装置：「(1) 単一の会話においては、少なくとも一人の、かつ一人の話してだけが一時に話すこと、および (2) 話し手の交替が繰り返されること」が特徴として挙げられ、「会話を交わしているものどうしは、会話をしながら話し手の順番を継続的に秩序付ける「装置」を用いて、この特徴をそれぞれ、あるいは、むしろ、二つの特徴を同時に確保する」 (シェグロフ・サックス, 1974=1989:181)

⁵ 移行適切性：『次の話し手』の選択を組織する一組の手続きと、他方で、どのようなきっかけで次の話し手への移行が起きるのか」が決まるのは、「現在行われているそれぞれの発話の内部においてであり、また、このような選択が効果を得て、次の話し手への移行が適切になされるのは、まさに現在行われているそれぞれの発話が完了しうる場所においてなのである。これを、発話が完了しうる場所での「移行適切性」 (transition relevance) 』と呼ぶことにする」 (シェグロフ・サックス, 1974=1989:181)

⁶ 隣接対偶：シェグロフとサックスは、隣接対偶の特徴として以下のものをあげている。

(1) 二つの会話からなり、(2) この構成成分として二つの発話は隣接した位置に置かれ、(3) 各々の発話をそれぞれ別々の話し手が生成する……。 (シェグロフ・サックス, 1974=1989:185)

また、隣接対偶には類型化が存在し、そのような発話類型のうち初めに発言されるものを「第一対偶成分」 (first pair part) 、それに対してされる発言を「第二対偶成分」 (second pair part) として、分割している。さらに、「第一対偶成分」と「第二対偶成分」を密接に関連付けることにより、それは一つの「対偶類型」 (pair type) と呼ばれるものを形成する。そのさい、隣接対偶はさらに以下の特徴をそなえることとなる。

(4) 各対偶成分に相対的な順序が存在し (すなわち、第一対偶成分が第二対偶成分に先行する)、(5) ある対偶成分はもう一つの成分を特定化する関係にある (すなわち、ある第一対偶成分を構成要素としている対偶様式は、どのような第二対偶成分を選択したらよいかに影響を与える) ……。 (シェグロフ・サックス, 1974=1989:186)

⁷ 先終了句：会話を終了するための開始として、用いられる句である。「(降下音調曲線をと

もなった)「うん……」・「わかった……」・「そうだね……」などのいずれかの形態をとるもので、この発言をすることにより「もはやこれ以上もしくは新たに話す事柄が何も無いことを示す」ものである。しかし、またそれは同時に、次の話し手に「話題の一貫性をおかすことなく、新たな話題、たとえば、以前に言いたかったが言えなかったことを導入する機会を」与えるものでもあるために、「先終了句となる可能性のある句」にしか過ぎない。(シェグロフ・サックス, 1974=1989:198)

⁸ 発話順番のパス：発話順番が自分にまわってきた時に、もう話すべきトピックがないことを示すために、「は:い」などの前終結 (pre-closing) のことばを使って順番をパスする (山田, 1999:21)

⁹ 会話のトラブル：会話のトラブルにおいて、修復をするための特別な実践がある。トラブルの修復とは必ずしも「間違いの訂正」とは限らず、あからさまに間違った表現がされても、その内容が伝わるのであれば訂正されずにそのまま会話が進むこともある。トラブルの修復とは、「その会話のなかでは修復されるべきものであるという意味を示す」(小宮, 2007:141) し、「私たちはどこから修復が始まって、どこでそれが終わるのがわかるように修復を行なう」(小宮, 2007:141) (強調は小宮)。そしてそこには、「修復の開始」と「修復の操作」という別々の作業が存在する。この「修復の開始」と「修復の操作」を誰が行なうかが、ここで一つの論点となってくる。これについて、小宮はそれらの作業を誰が行なうのかを「トラブルの源を含む発言をした人」「その発言をした人以外の人 (他人)」(小宮, 2007:142) の2つにわけ、以下の4パターンを定義している。

(1) トラブルの源を含む発言をした人自身が修復を開始し、自分で修復の操作を行なう

(2) トラブルの源を含む発言をした人自身が修復を開始し、他人が修正の操作を行なう

(3) 他人が修復を開始し、トラブルの源を含む発言をした人自身が修復の操作を行なう

(4) 他人が修復を開始し、他人が修復の操作を行なう」(小宮, 2007:143)

つまり、(1)であれば「えっとこの前ニュースに出てた……あの人だれだっけ。あ、鈴木さんだ」といったものであり、(2)であれば「えっとこの前ニュースに出てた……あの人だれだっけ」「鈴木さんだよ」というやりとりである。また(3)であれば「この前ニュースに出てた佐藤さんってさ」「佐藤さん?」「あ、鈴木さんだ」、(4)では「この前ニュースに出てた佐藤さんってさ」「佐藤さん? 鈴木さんでしょ」「あ、そうそう」といったやりとりが、ほんの一例として挙げられる。このような修復はどのようになされてもよい、というわけではなく、「修復のなされ方のさまざまな可能性のうち、どれを優先的に行なうかということに気をつけながら修復はなされる」(小宮, 2007:145) (強調は小宮)。修復においては、トラブルの源を含む発言をした者自身が「自己修復」を行なうことが優先される。また、他人が修正を開始するのは、相手の発言が明確に終了したときであり、相手の発言順番中に割り込んだり、相手の順番が終わってもよい場所で即座に修復を開始したりはしない。「トラブルの源を含む発言をした人自身が修復を開始する機会をまず与えて、そこで修復が開始されなかったときに初めて他人が修復開始する」(小宮, 2007:146) のである。さらに、このように他者が修復を開始する場合でも、他人は修復を開始するだけで修復の操作はあまり行なわず、自己修復が優先される。

¹⁰ 非優先：例えば「映画に行かない?」といった誘いに同意する際には、すぐさま「行く行く」という言葉が返されるだろうが、断る場合には、しばしば口ごもったりする。このように「同意のときは、誘いに対して応答が近接するのに対して、非同意のときは、応答の前に言いよどみや間合いが入り込む (近接性が破られる) ことがしばしばある」(西坂, 2008:111) と述べ、そのような行為連鎖のことを「優先組織」と呼ぶ。また、そのような優先組織の規範的期待という程度の特徴として、以下の2つを挙げている。

・非優先的応答は、近接関係を破る。あるいは、非優先的行為は、遅延される。(西坂,2008:112)

・非優先的行為は、拡張される。(西坂,2008:112)

この拡張されるとは、非同意となる場合には、明確な否定の言葉がなくとも、「言い訳として理解可能なこと」(西坂,2008:112)を語るだけで断りとなることを言い、つまり、一言以上の(拡張された)構成を取るようになるためである。

また、さらに優先組織の特徴として、もう一つ挙げられるものがある。

・形式的に一致しているものは近接する。すなわち、形式的に一致した応答が優先的である。(西坂,2008:115)

この「形式的に一致しているものは近接する」とは、例えば「明日空いてる？」と誘われたが非同意の場合、形式としては「うんん」という語が来るだろう。しかし、「明日空いてる？」という語は、翌日の用事を訪ねる一方で、それだけですでに勧誘も含意されている。この場合、通常答えるなら「うんん、明日はちょっとバイトがあるんだ」というように、拡張された構成で返答されることとなる。決して「明日はバイトがあるんだ。うんん」とは言わないだろう。このように、形式的に尋ねられたことに対する答えが優先的に近接するのである。

謝辞

本稿を書くにあたって、多くのご指導、ご助言、ご支援を賜りまして、本当にありがとうございます。いつも根気強く指導してくださった樫田先生。そして温かい助言をいただきましたゼミ・友人の皆様。いつも優しいお言葉とお心遣いくださった宮本さん。

この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

参考文献・引用

榎本美香・伝康晴, 2003, 「3人会話における参与役割の交替に関わる非言語的行動の分析」, 『人工知能学会研究会資料』, SIG-SLUD-A301: 25-30.

(<http://mika-enomoto.info/pdf/SIG-SLUD-A301.pdf>, 2009年11月26日)

Emmanuel Schegloff and Harvey Sacks, 1974, “Opening up Closing” in R. Turner (ed.), *Ethnomethodology*, Penguin: 223-264. (=1989, 北澤裕・西阪仰訳, 「会話はどのように終了されるのか」, G・サーサス/H・ガーフィンケル/H・サックス/E・シェグロフ, 『日常性の解剖学——知と会話——』, マルジュ社: 175-240.)

Harvey Sacks, 1972, “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology”, Sudnow, D. ed., *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, 31-74. (=1989, 北澤裕・西阪仰訳, 「会話データの利用法——会話分析事始め」, G・サーサス/H・ガーフィンケル/H・サックス/E・シェグロフ, 『日常性の解剖学——知と会話——』, マルジュ社: 93-173.)

串田秀也, 1999, 「お助け舟とお節介——会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」,

-
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰編,『会話分析への招待』,世界思想社:124-147.
- 小宮友根,2007,「規範的があるとは、どのようなことか」,前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編,『ワードマップ エスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』,新曜社:99-120.
- 中村和生・檜田美雄,2004,「<助言者—相談者>という装置」,『社会学評論』,55(2):80-97.
- 西阪仰,1997,「認識と文化 13 相互行為分析という視点」,金子書房:73-103.
- 西阪仰,1999,「会話分析の練習——相互行為の資源としての言いよどみ」,好井裕明・山田富秋・西阪仰編,『会話分析への招待』,世界思想社:71-100.
- 西阪仰,2001,「現代社会学選書 心と行為——エスノメソドロジーの視点——」,岩波書店
- 西阪仰,2008,「分散する身体——エスノメソドロジー的相互行為分析の展開」,勁草書房
- 前田泰樹,2008,「心の文法—医学実践の社会学—」,新曜社:120-137.
- 山崎敬一編,2004,「実践エスノメソドロジー入門」,有斐閣
- 山田富秋,1999,「会話分析を始めよう」,好井裕明・山田富秋・西阪仰編,『会話分析への招待』,世界思想社:1-35.

第2章 医療化する家庭・家庭化する医療—在宅医療のエスノメソドロジー

齋藤雅彦

- 1節 問題意識
- 2節 予備的考察①
 - 2-1. 方法論—エスノメソドロジーとビデオ・エスノグラフィー
 - 2-2. 概念規定—医療と介護
 - 2-3. 研究目的—医療化する家庭と家庭化する医療
- 3節 ビデオ・エスノグラフィーとしての調査概要
 - 3-1. 曾祖母Aの特徴
 - 3-2. A家の在宅医療のあり方
 - 3-3. A家特有の取り組み
 - 3-4. 全体構想—医療化する家庭から家庭化する医療へ
 - 3-5. まとめ
- 4節 分析
 - 4-1. 分析方法
 - 4-2. 分析視点—在宅医療でのリスクマネジメント場面
 - 4-3. 予備的考察②—理想的リスクマネジメントと在宅医療的リスクマネジメント
 - 4-4. 場面紹介分析
 - 誰が何をしたのか・誰が何をすべきかトラブル
 - i) 応じることと志向すること
 - ii) トラブルに伴うリスクを呈示する祖母
 - iii) 父の問題追及テクニック
 - iv) 祖母の問題回避テクニック
 - 4-5. 考察—在宅医療におけるアフオーダンス
- 5節 まとめ
- 6節 卒業論文完成に向けて—これからの分析視点
 - 主要参考文献
 - 資料—トランスクリプト

1 節 問題意識

在宅医療は、家族を家庭内で医療を施す介護者、医療を受ける被医療者へと分ける出来事である。家族であった者が被医療者として家で暮らすこと、それ自体はなんとも否定的に捉えられがちだ。「あんなに明るかった人が」なんて言う話もよくある話だろう。

例えば、天田は在宅介護ⁱⁱの中で「どのようにして家族介護者が『痴呆性老人』を介護することへと不可避に巻き込まれ、いわば“拒否権”さえ剥奪された状況の中で苦悩・葛藤し、自らが『介護すること』＝『呆けを看とること』を意味付け・解釈してゆくのかを明らかに」（天田,2003:238）するために、「『痴呆性老人』と家族介護者の相互作用過程を、家族介護者のケア・ストーリーの視点から明らかにし、家族介護者が、身近な他者が『痴呆になること』と自分自身が『介護すること』に対してどのように定義し、意味付与していくのかを抽出」（天田,2003:258）している。

また、同様に井口は「家族介護者の困難として表明されている、家族介護を生きる経験のリアリティに迫る」（井口,2007b:145）ことを分析している。

しかし、それでも在宅の中での医療は日常の業務として行われなくてはならないし、実際、行われている。つまり、医療者がどんな心情であれ、在宅医療という日常の業務は、ほぼ滞りなく行われている。そこで、私は在宅医療というものが、どのように綿密な形でその場面に参与する人びとによってデザインされているかということに興味を持った。

今回は、在宅医療という場面である点や、その場面に参与する参与者—〈家族〉、〈医療者／被医療者〉、〈福祉従事者〉—に焦点を当て、そこでの医療の様子をエスノメソドロジ－的視点で分析していく。つまり、在宅医療のビデオ・エスノグラフィーやワークプレイス研究、および在宅介護の会話分析、論理文法分析を通した相互行為分析を行うことで在宅医療を作り出している家庭のリアリティに迫っていく。

2 節 予備的考察①

2-1. 研究視点—エスノメソドロジ－とビデオ・エスノグラフィー

今研究の視点はエスノメソドロジ－的方法論をとる。なかでも、ビデオデータを用いたビデオ・エスノグラフィーという新たな研究手法により、より当事者性に密着した（≒エスノメソドロジ－的態度に密着した）ワークプレイス研究を行う。

まずは、以下でエスノメソドロジ－の説明をする。

エスノメソドロジ－の『エスノ』は特定の民族や集団をあらわすのではなく、『人びと』あるいは『メンバー（成員）』という意味（水川,2007:4~5）である。また、「メソドロジ－」は「方法論」を意味し、「人びとの方法論」と言われている。

そして、エスノメソドロジ－の創始者 H.Garfinkel は、エスノメソドロジ－について、以下のように述べる。

Ethnomethodological studies analyze everyday activities as members' methods for making those same activities visibly-rational-and-reportable-for-all-practical-purposes, i.e., "accountable," as organizations of commonplace everyday activities. エスノメソドロジー研究はメンバー（社会の成員）の方法論を目に見えて合理的で、実際には報告可能なメンバーの方法論として日常の活動を分析する。すなわち、ありふれた日常の活動の組織として説明可能である。（H.Garfinkel,1967:7）

つまり、エスノメソドロジーはどのようなメンバー（社会の成員）であれ、彼らが行っている活動を社会学として分析可能であるし、さらにはメンバーにおいても、その分析は理解可能であるという研究である。その場に参与する専門家ⁱⁱⁱの活動を社会学として分析すると言い換えることもできよう。つまり、今研究では在宅医療を行う参加者をその場の専門家として扱い、その専門家が行う行為を社会的見地から考察していく。

以上が、簡略であるが、エスノメソドロジーの説明^{iv}とする。

次にワークプレイス研究とは、「あらゆる社会的な実践に対して、つねに『具現化された実践』として関心をもつという点」（水川・池谷,2007:48）から仕事の場面（＝ワークプレイス）の社会的実践に社会的考察をする研究である。つまり、「ワーク研究とは、現象を社会的に組織化されたものとしてとらえ、その組織化がどのようになされ、その際の方法がどのようなものなのかを解明することをめざして」（水川・池谷,2007:45）おり、今研究も在宅医療での実践をつぶさに考察していこうとする立ち位置は同じである。しかし、ワークプレイス研究の中でも、私はビデオ・エスノグラフィー的なワークプレイス研究を行いたい。ビデオ・エスノグラフィーとは、「当事者的知識を十分に摂取しながら行うビデオ分析」（檜田,2008:1）である。もう少し説明をするために岡田の言葉を借りるならば、ビデオ・エスノグラフィーは「聞き取りや参与観察によるフィールドワークによって現場の進行について大まかに理解し、また現場に詳しい人々とともにビデオを詳細に検討することで、さまざまに起こる出来事を社会的に組織され、一貫した活動として解明していく研究手法である。」（岡田,2008:163）つまり、ビデオ・エスノグラフィーは、従来のワークプレイス研究より、エスノメソドロジー的態度に対し、より真摯であり、当事者性にも溢れた研究手法である。私は、この研究手法で在宅医療のエスノメソドロジー、ワークプレイス研究にあたる。また、私がエスノメソドロジー的無関心^vを持って、今研究を進めることもここで表明しておく。

2-2. 概念規定—医療と介護

今回、在宅医療^{vi}のエスノメソドロロジーと銘打っているが、家族の行う行為に対し、どこまでが医療で、どこからが介護であるかという疑問を持つ人は少なくないだろう。もちろん、医療社会学の相互行為分析をしている立場としては医療と介護（在宅医療と在宅介護、医療行為^{vii}と介護行為）の区別をきちんとすべきである。しかし、それらの区別はかなり難しく、現在もその判断基準は不明瞭だ。そのため、今章では、医師法や厚生労働省の通知を元に、医療と介護における流れを紹介し、それから今論文における医療と介護の区別をさせてもらう。

従来、医療というものは医師、看護師の業務独占であるとされてきた。医師法第 17 条においても、「医師でなければ、医業をなしてはならない」と明文化されている。しかし、医療行為が何であるかについてまでは明文化されてはなく、何が医療で、何が介護であるかの判断に明確な基準はなかった。そのために、施設において介護が必要とされている被介護者が医療を必要とする場面での対応には常に注意がはらわれてきた。そのため、厚生労働省は平成 17 年 7 月 26 日に「医師法第 17 条、歯科技師法第 17 条、及び保健師助産師看護師法第 31 条の解釈について（通知）」を公示した。しかし、そこでの解釈においても、被介護者が要求している医療行為に相当するかもしれないニーズを介護士がどこまで関与できるかという点においては、いまだ問題が残るものとなっている。また、在宅場面においては、被医療者本人とその家族には医療行為はある種、認められている。しかし、訪問介護師については上述の通りである。

今研究では家族が為す行為を全て医療行為として扱う。家族においては、医師から説明を受けたほぼ全ての行為が許されているのであるし、医療行為と介護行為の区別はそこまで緻密にしたところで、私の主張が変化するものではない。しかし、訪問介護士の行為については繊細な注意を払う。

2-3. 研究目的—医療化する家庭と家庭化する医療

前述の通り、在宅医療は家族を医療者と被医療者に二分する出来事である。つまり、〈家庭〉という組織かつ、〈家族〉というカテゴリーで生活してきた人びとに対し、新たに〈医療者／被医療者〉カテゴリーをラベリングする事象だ。それでは、家庭に医療が侵出してくる事象に対し、家庭はどのように変容するのであろうか。もちろん、家庭生活における医療の進出が家庭を医療化させていること—医療化する家庭—は想像するにたやすい。しかし、それだけではなく、在宅医療にしかみることのできない医療らしさ、すなわち、医師、看護師が活躍する医療現場では決して見ることのできない在宅医療の医療現場が発見できる—家庭化する医療—のではないだろうか。

私は、この点に強く興味を持ち、以下の分析で、明らかにしていきたいと考えている。まとめると、私の興味は①在宅医療はどのように家庭を医療化させているのかということ、そして②在宅医療はどのように医療を家庭化させているのかということの 2 つである。

3節 ビデオ・エスノグラフィーとしての調査概要

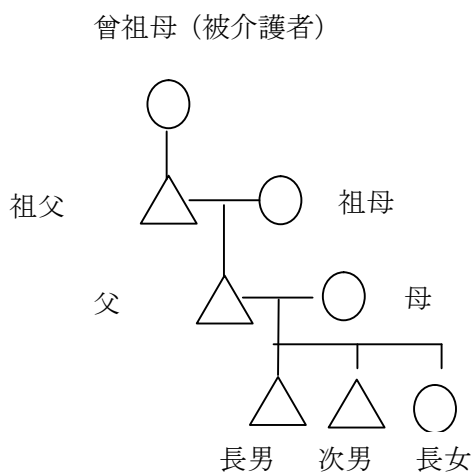
【日時】 2009年6月25日11:00~26日11:00

【機材】 HDDカメラ3台

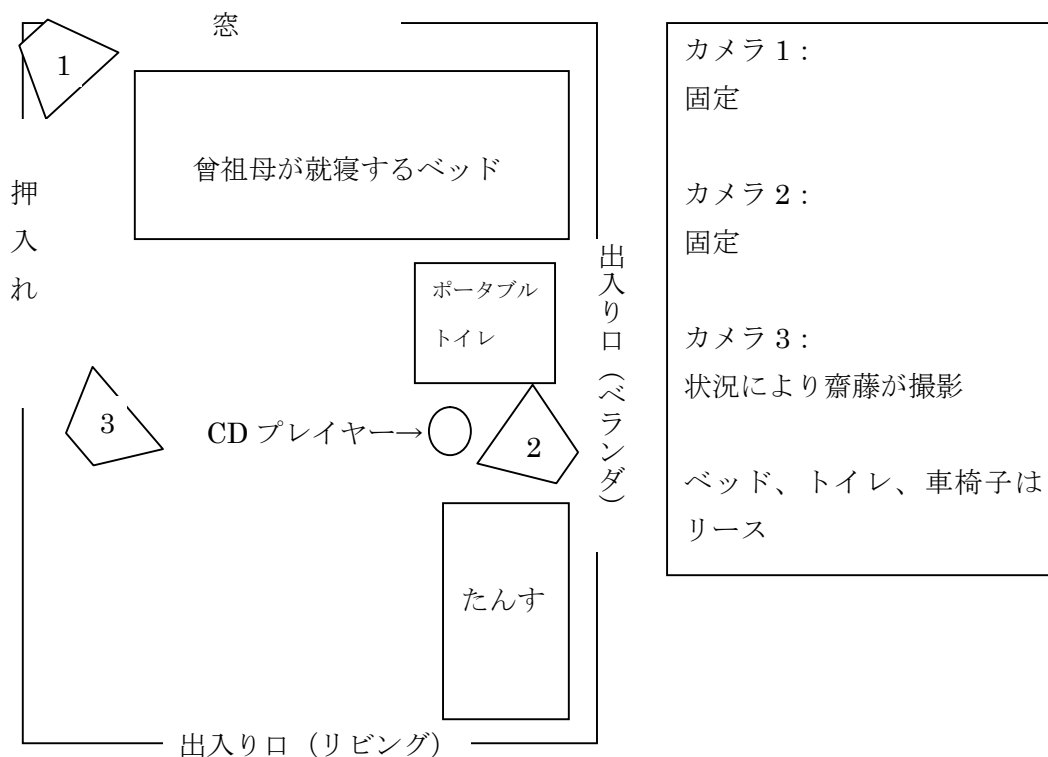
【撮影者】 榎田美雄、齋藤雅彦

【被撮影者】 A家（曾祖母 {被介護者}、祖父、祖母、父、母、長男、次男、長女）
入浴時のみ医療従事者達4人

【家族構成】 撮影時A宅に居住している人のみ



【配置図】



3-1. 曾祖母（以下 A とする）の特徴

A は 97 歳と高齢である。脳出血、脳梗塞を経て、入退院をし、現在はほぼ寝たきり状態となっている。今回は在宅介護の現場を取り扱うが、A は退院後、数日後しか経っていない。つまりは、家族も在宅医療を慣れておらず、その意味合いで現場はトラブルが多発している。また、A は 嚥下障害^{viii}により 胃瘻^{ix}が施されている。さらに、視力、聴力はあるが、自分からは意思を持った言葉を発言することができず、失語状態である。しかし、周囲の呼びかけに対する応答を A が行える場合もあり、その際には、首ふり（縦振り、横振り）、脚ふり、手ふり、口を動かす、言葉ではない音を発する、目をぱっちり開けるなどの行為がなされる。しかし、反応がない場合も多く、A の心情を読み取ることは困難である。また、右半身麻痺もあるが、普段から足を振ることは多い。

表 1 調査対象者 A の概要

性別	女性
年齢	97 歳
撮影時の状況	・脳梗塞を経て退院 ・失語状態、寝たきり状態 ・嚥下障害により胃瘻が施されている
身体の状況	・右半身麻痺 ・身振り（手、足、首）は行える

3-2. A 家での在宅医療のあり方

A 家での在宅医療を主に担っているのは祖父、祖母の 2 人である。A 家では、祖父、祖母は共に農業をしており、農業と介護を共に二人で分担している。そのため、どちらが何をしたかわからなくなるというトラブルが起きやすい。また、母も仕事から帰宅後に介護をする場面が多く見られる。

まず、1 日の日課としては、1 日 4 回のオムツ交換がある。これは朝、昼、夕方、夜に行われる。また、1 日 3 回の食事も胃瘻から行われ、1 回の食事に約 4 時間かかる。さらに、褥瘡^x防止のため 2 時間ごとに 体位変換^{xi}が行われる。体の傾きを変えるために A の身体とベッドとの間に座布団を差し入れ、傾きを作る。その傾きの向きは、時間に応じて、適度に変えられる。他にも、血圧低下のために食後に薬を飲ませる。また、不定期であるが、目ヤニが溜まれば目薬を差し、口の中に異物が溜まれば、口掃除も行う。さらに、朝の日課として体温測定と血圧測定を行っている。朝の日課は医者^{xii}の指示ではなく、祖父の判断であるようだ。

そして、訪問看護であるが、週 2 回入浴介助と月 2 回往診が A 家では行われている。今調査では入浴介助のシーン撮影に成功した。

3-3. A家特有の取り組み

ここでは、一般では考えられない—特に医療に携わる人にとっては驚きかもしれない—A家特有の医療の取り組みの実際を紹介する。

まず、「体位変換をした時間を刻むための時計」がある。これは農業と介護の兼用作業を行わなければならない夫婦が相談なしで介護できるようにつくられた祖父が考案したシステムである。体位変換させた際には、動かない時計の針を体位変換させた時間に印すことで記録をつけている。この作業によって、何時に体位変換をしたのかを独力で判断できるようになり、介護がスムーズになる。

また、「2本つなぎ合わせていた胃瘻につなぎチューブ」がある。これはベッドと栄養剤の位置関係を克服するためにチューブの長さを2倍にしている。被介護者を受け入れる場面に対応するためにA家の人びとによってデザインされたシステムだ。

これらの注目すべきA家特有のシステムは、A家が在宅介護をしやすいようにするために創出したメカニズムである。しかし、これらのシステムが不備を起こし、新たなトラブルを招く事例が起こる場合も多い。例えば、時計の針の回し忘れやチューブの付け間違いなどがある。

さらに、A家では体位変換を特別に「転体」と名づけている。新たな言葉を創出しているというこの行為は、まず、その言葉自体が特異である。また、言葉数も少ないため、介護者間の会話もスムーズになる。さらには、この言葉はA家の人びとにとって、お互いに理解可能な形でデザインされていることを見逃してはならない。つまり、「転体」という言葉はA家の介護をさまざまな意味で円滑にするための役割を果たす。どのような専門的な場面でも専門用語と呼ばれるものは存在するが、この「転体」は在宅医療という専門的場面で体位変換という医療用語に対応したA家だけの専門用語である。

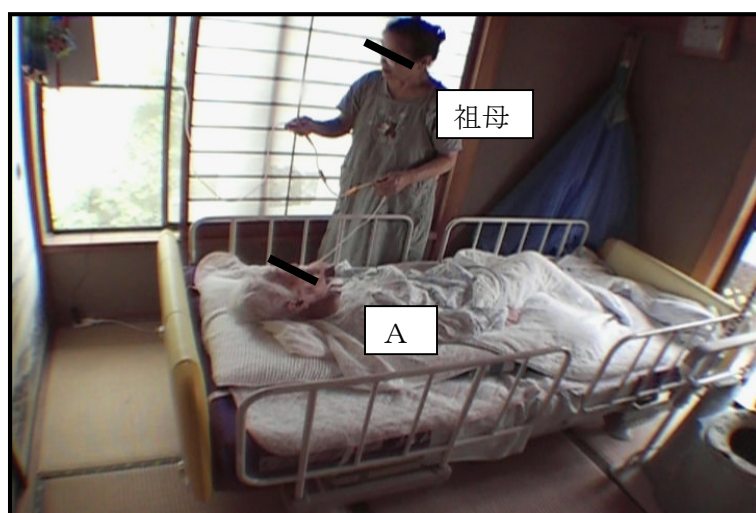


写真1 チューブを2本つないでいるA家
栄養剤は画面左上にあり、長くするためにチューブをつなぎ合わせている

3-4. 全体構想—医療化する家庭から家庭化する医療へ

3節では調査概要をビデオ・エスノグラフィー研究、ワークプレイス研究としてまとめた。3-1ではAの特徴を断片的にとらえ、3-2においても、A家での在宅医療のあり方を至極簡単にまとめた。しかし、ここでは家庭生活＋在宅医療という日常業務の増大から、単純に家庭に医療が侵食してくる様子をくみ取っていただけたと思う。

そして、3-3では、A家以外ではなかなか見られないであろう行為^{xiii}を特筆することで家庭の医療化を浮き彫りにした。今までの家庭生活に新たな医療の侵食は今までの家庭生活から新たな家庭生活＋医療へと家族が柔軟に対応していかざるを得ないことが求められる。つまり、家庭が医療に柔軟に対応するさまは家庭に医療が侵食してきたからこそである。言い換えると、医療化する家庭そのものである。

しかし、ここで、ある種のパラダイム転換が起こる。確かに、新たな専門用語の創出は在宅医療というものを生み出した医師たちの医療行為の指針があったからこそである。しかし、その医療行為の指針を実行している家族は、医師の指示通りのことをするわけでは決していない。例えば、体位変換をした時間を刻む時計は病院のような組織では考えられない。それは、単に存在しないというだけではなく、病院には病院のシステム構築がなされており、今ケースのように誰がいつ体位変換を行ったかわからなくなるというミスが起こりうる状況には、まずならないのだ。さらに、胃瘻につなぐチューブを2本にする行為は病院では決して許されない行為である。しかし、A家においてはチューブを2本につなぎ合わせる必然性があった。つまり、A家特有の在宅医療への取り組みは、A家にとって便利なようにデザインされている。つまり、医療というものをA家の人びとは使いこなしているのだ。このことは、単なる医療ではなく、A家が在宅医療としての専門家であることを意味する。もちろん、A家のみならず、全ての家庭が在宅医療の専門家であることは言うまでもない。つまりは、医療というものは、それ自体が医師や看護師に与えられたものではない。とくに、在宅医療というケースにおいては、医療は家庭化しているものであると言えるのではないだろうか。

3-5. まとめ

〈家庭は医療化するもの〉だと思われがちな在宅医療場面を、ビデオ・エスノグラフィーの視点を持って、調査概要をまとめることで〈医療は家庭化するもの〉というパラダイム転換をすることができた。次章からは、在宅医療場面の会話分析をすることで〈家庭化する医療〉について深く考察していきたい。

4節 分析

4-1. 分析方法

今回はデータを分析するにあたり、会話分析、論理文法分析という手法をとることでデータを緻密にみていく。とりわけ会話を一行一行分析することの繊細さを感じ取っていただけたらありがたい。

まず、檜田によれば、「会話分析がしているのは、記述、批判、侮辱、不満、助言、記述、要請、謝罪、冗談、挨拶といった数多くの日常的な諸活動を記述し分析しようとする試み」（檜田、2004：194）であり、西阪によれば、「言語そのものの研究ではなくて、あくまでも、会話をフィールドとした、社会的行為の組織にかんする研究」（西阪、1997：3）である。つまり、社会学者がする会話分析とは、言葉や文法ひとつひとつが問題なのではなく、発話ひとつひとつが何を志向し、その場面の参加者によってどうデザインされているかが研究対象である。

また、論理文法分析とは、「私的で個人の『内面』にあるとされる『心』『意図』『考え』などが、言葉や概念の使い方（言語使用）を見ることによって、誰でもやりとりの中で示しあっている公的なものであることを明らかにした。」（水川・池谷、2004:36）とされており、会話分析と論理文法分析を今研究で取り扱うことで、在宅医療の現場に接する当事者性に密着した研究が出来ると考える。以上が、簡略ではあるが、分析方法の説明とする。

4-2. 分析視点—在宅医療でのリスクマネジメント場面

今回の報告で取り上げる場面は祖母がAの食事の世話を終了する場面である。もう少し詳しく言うと、Aの胃瘻から注射器を用いて白湯を注入するために、注射器の準備を祖母がしている場面である。前述したように、この家庭では複数人の医療者がいるため、誰が何をしたのかというトラブルが起きやすい。今回の事例でもそれが起きていて、チューブに入った液体が白湯なのかミルトン（消毒液）なのかわからないと祖母が困惑している場面である。白湯と消毒液を間違えて、Aに注入することは、もちろん医療ミスに相当し、Aには死の危険があるかもしれない。つまり、誰が何をしたのか・誰が何をすべきかというリスクマネジメントを図る場面であり、そのトラブルとしてのリスクを如何に解決していくかという場面である。つまり、この場面は在宅医療をすることになった家庭であり、家庭の中で医療のリスクマネジメントを図られる場面だとも言える。ここでは、祖母の実息子に当たる父が発話の相手となり、家族構成上は「祖母—父」ではあるが、わかりやすい関係対 (Relational Pair) ^{xiii}で表現すると「母—子」であり、「家族—家族」である。

今分析では、参加者のトラブルが解決に至るまでの過程を一つの相談場面として解釈し、分析に当たる。そこでは、「家族—家族」が「質問—応答」を互いに繰り返しながら、トラブル解決を図る場面があった。つまり、今研究が取り扱う場面ではサックスのいう「質問

一応答^{xiv}」連鎖という隣接対^{xv}を為しており、その連鎖構造を緻密に見ていくことで、場面に何が起きているのかを明瞭にしたい。「隣接対は、参加者が互いの協同の理解を構成する場」(山崎,2004:32)であり、それゆえに、何を理解し、何を疑問に思い、何を了解したのかを表明している様子がとてもわかりやすい。そのため、この隣接対関係を分析することで場面を構造化していく。

4-3. 予備的考察②—理想的リスクマネジメントと在宅医療的リスクマネジメント

ここでは、先行研究としてリスクマネジメントをまとめる。まず、用語の確認であるが、リスクマネジメントは「危険因子を早期に発見して除去または回避することで、事件・事故の発生を未然に防ぐことを目的とする」(瀧野,2006:163)ことであり、「通常、事故対応と考えられがちであるが、基本的には介護事故(利用者個人が引き起こしたものではなく、介護者の介護行為に伴って引き起される障害を意味する)を予防する働き」(橋本,2004:78)とも言われている。また、ケアに寄り添った書かれ方^{xvi}をしているが、丸山は「単に事故への対策というのではなく、現場をシステムの、予防的に管理することでリスクに対処し、利用者が人間らしく生きること、生活に質の向上を支えるものであり、ケアの質の向上によって支えられるものである」とらえる。また、組織活動に及ぼすリスクを最小にするための管理」(丸山,2005:28)と定義づけている。さらに、2002年3月に厚生労働省が公示した「福祉サービスにおける危機管理(リスクマネジメント)に関する取り組み指針」^{xvii}においても、「昨今、福祉サービスの分野で議論されているリスクマネジメントは、『福祉サービスを提供する過程における事故の未然防止や、万が一にも発生した場合の対応(特に損害賠償等、法人・施設の責任問題を含む)』にその中心がおかれています。」と定義づけられている。つまり、リスクマネジメントとは、組織活動に起こりうる危険因子を未然に防止するためにシステムを構築すること、さらには、事故が発生した場合の対応処置方法を構築することと言い換えられよう。

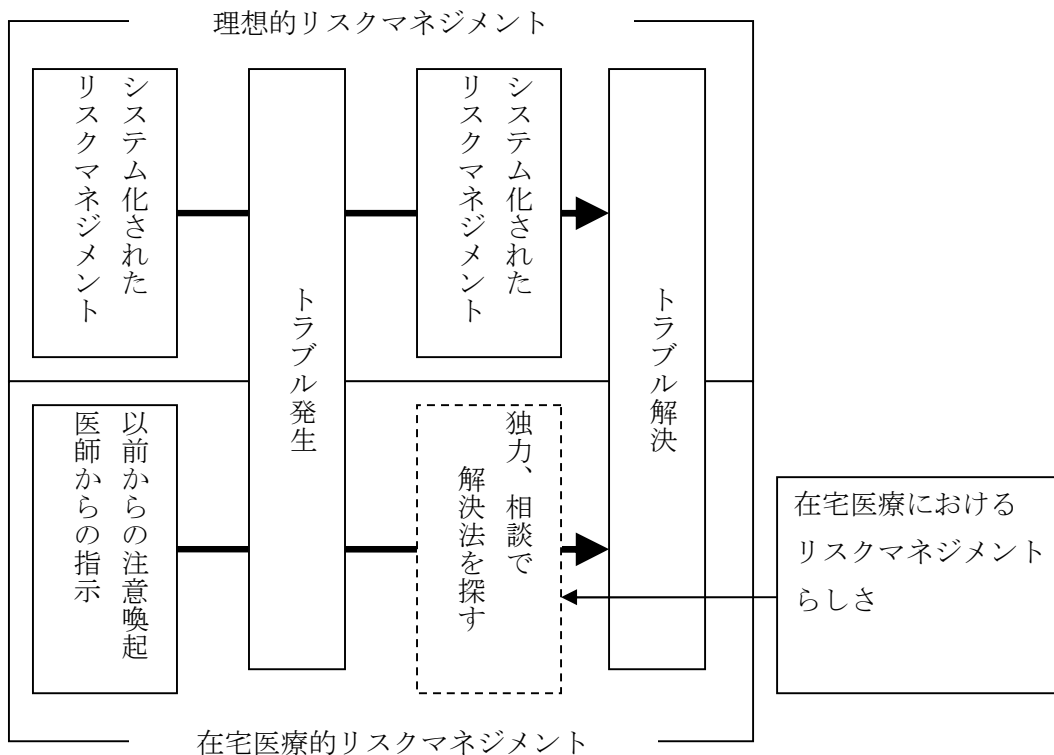
それでは、どのようなリスクマネジメントが実際には考えられているのであろうか。例えば、川上によれば、「介護事故予防への取り組みとしては、①まず、現場でどのような事例が生じているか把握し、再発防止策を立てること。②事故対応を適切にする。③事故予防の意識づけを日々の業務の中で実践し、事故を起こさないようにする。という3点が重要になる。」(川上,2007:9)とされており、三田寺(2005:87~90)はリスクマネジメントプロセスを(1)リスクの発見・確認—リスクの洗い出し—(2)リスクの評価・分析(3)リスクの処理(4)結果の検証とまとめている。他にも、橋本(2005:102~103)は、「品質(介護サービスの質)に関わるマネジメントシステムの継続的な改善と維持を行うISO9001規格の手法をもとに、Plan—リスクの認識、リスクの分析、Do—対策の実施、Check—対策の評価、Action—必要に応じた取り組みの改善というPDCAサイクルをまとめている。」

しかし、上記のリスクマネジメントの定義、および方法は理想的なリスクマネジメントである。よって、上記したように、事故につながりそうになった事例^{xviii}を参照し、起こり

うるリスク、もしくは起こってしまったリスクを構築、解決する方法を理想的リスクマネジメントと定義付ける。

しかし、いくら未然に防いでも防ぎきることはできないのがアクシデントであり、事故である。とりわけ、在宅医療の場面では、理想的リスクマネジメントに基づき、リスク管理を行なっているとは考えにくい。実際の医療場面のように^{xix}システム化されているリスクマネジメントであるのなら—理想的リスクマネジメントに基づいた医療なら—ごくまれにしか起こりえないトラブルが、在宅医療の現場ではシステム化されていないがゆえに頻発する起こるトラブルもあるはずだ。例えば、今ケースでは複数人の家族が医療に携わる為に、誰が何をしたのかわからなくなるトラブルが頻発している。つまり、在宅医療の場面では気がついた人が、手が空いたときにするシステムになっているからだ。しかし、このようなことは実際の医療現場で起こることは、まずない。それは、徹底的に管理されたリスクのもと、誰が何をしたのかについては決まっていることであるからだ。つまり、実際の医療現場では見ることはまずできないが、在宅医療の現場では頻発しているリスクももちろんあると考えることができ、もちろん、そのリスクがいかに在宅医療の現場にいる家族の力で解決されているかも考察することができる。よって、この在宅医療現場におけるリスクマネジメントを在宅医療的リスクマネジメントと定義付ける。すなわち、今分析では、在宅医療的リスクマネジメントを考察することで、在宅医療の現場らしさを提示できればと考える。

表1 理想的リスクマネジメントと在宅医療的リスクマネジメント



4-4. 場面紹介分析—誰が何をしたのか・誰が何をすべきかトラブル

ここでは、実際に会話分析を行う。一連の会話の流れを細かく場面を分けて紹介することで、会話の流れを追いながら分析をしていきたい。

i) 応じることと志向すること

〈断片1〉

- 01 父 いけるんか。ちゃんと。
02 祖母 いける：。あ：。ちゃんと入れてあるわ。パパが。注射が白湯だろな？（（注射器
03 を見ながら）消毒ではないだろな？
04 父 ちゃんと（見とけよ。）
05 祖母 え？（（Aの寝室からキッチンへと引き返す））

まず、分析するのは1～5行目の場面である。この時点では祖母と父は互いにAの寝室とキッチンにいるため、会話は声かけ的なものとなっている。

1行目の父「いけるんか。ちゃんと。」という発話は祖母に志向しており、この会話から場面は始まる。注射器の中身をよく確認しろという物言いである。2～3行目の発話で祖母は、まず、「いける：。」と父に同意を示す。しかし、この「いける：。」は同じ部屋にいないがゆえ（＝互いに対面していないがゆえ）の『私は大丈夫』という相槌的なものであるため、後に6行目で父から「いけるんか。」という同じ質問が為される。さらに、2～3行目では、私ではない「パパが」注射器に液体を入れたことを述べており、その上で注射器の中の液体が「白湯だろな？消毒ではないだろな？」と疑う。この発話も父に向けられたものというよりも、自己確認としての発話であると考えられる。そして、今までは相槌という応答を返していた祖母が5行目で父が何かを発話しているということに志向した発話（「え？」）をすることで（＝父への志向が向いている私を父に呈示している祖母）、この場面を完結する。



【写真2】祖母が注射器の中を確認しながら、Aの部屋に入るシーン

ii) トラブルに伴うリスクを呈示する祖母

〈断片2〉

06 父 いけるんか。消毒ではないんか。

07 祖母 ない。ほなけど、一応 (0.5) 抜く? 気持ち悪いけん、[自分が入れてないけん。

08 父 [何を。水入れるん。

09 祖母 水入れる、白湯入れるん。

6行目では前述したように1行目のリフレインが為される。(父「いけるんか。」)そして、7行目で、祖母は消毒では「ない。」と明示はしたが、「**自分が入れてない**」ために「気持ち悪い」から「一応抜く?」と液体を変えることを提案している。ただ、祖母の強調された発話からも感じ取れるように、ここは相手に返事を求める『一応抜いてみようか?』ではない。「抜く」ことに理由づけを行ったうえでの「抜く」という発話であるため、ここは提案であると考えられる。さらに、前小項で祖母は「パパが」注射器に液体を入れたことを明示しているために、なおさら、この「自分が」という発話は際立ったものとなっている。言うなれば、介護行為を行った主体の不在により、新たに介護行為を行うべくして立ち上がった主体の表明である。「自分が入れてない」ために「気持ち悪い」から、「一応抜く」いて、私が入れなおすという役割交代を父に呈示しているのだ。つまり、祖母は医療行為におけるリスク—この場面では医療行為をした祖父の不在により、液体の確認がとれないことゆえに起こりうる液体の認識ミスというリスク、つまりAに消毒液を注入するリスク—を十二分に理解しており、それゆえに他者への表明を示したうえで、役割交代を図っている。そして、8行目で父は「何を」入れるのかと祖母に質問する。この会話は7行目祖母の「一応抜く?」に対応した発話である。そして、9行目「水((を))入れる」と祖母が答えることでこの場面は解決する。



【写真3】祖母が父のいるキッチンにまで戻るシーン

iii) 父の問題追及テクニック^{xxi}

〈断片3〉

- 10 父 ほな、ほら：、ほんなん人のなんか信用したらあかん。
11 祖母 <信用したらあかんな。
12 父 ほらずっと、洗ろうたらええんで。洗わな。
13 祖母 うん。白湯入れて、なんか気持ち悪いわ。
14 父 ほら、おとうはんのことやけん [ほんなもん。
15 祖母 [うん。(わかっ тонн) でないか。わしがしとった
16 んじゃわ。 っていうやろ。
17 父 いや、ほら、逆もあるわだ。
18 祖母 うん。
19 父 なんでも逆になるわ。

10 行目で父は「ほら：、人のなんか信用したらあかん。」と発言する。「ほら：」は前小項であったようにリスクマネジメントをしている祖母の行為を了解していることに志向しており、それゆえに『他人がしたことなんか』信用するなという祖母への教訓語りがある。11～13 行目では、10 行目の父の発話を受けて、「自分で作業をすること」が話題の焦点となっている。つまり、10～13 行目は「自分で作業することの大事さ」を、作業をしている祖母に伝えているのだ。

そして、自分で作業をすることの大事さを祖母に説いた父は、14 行目で作業をしたのが『祖父であるから』という家族であり、身近な存在である者への非難に変わる。（「ほら、おとうはんのことやけんほんなもん。」）ここでは、非難を受けているのは作業をしていた祖父である。つまり、この数行の間に父は祖母／祖父、作業をしている／作業をしていた、者への物言いをしていることになるのだ。この父の表明はリスクを招いた両者への注意勧告であると言えるだろう。そして、15～19 行目まではこの祖父の話が焦点化し、祖母もしばらくは父に同意している。



【写真4】祖母と父が話をしているシーン

iv) 祖母の問題回避テクニック

〈断片4〉

- 20 祖母 <まあ、なんだったらミルトンだったら匂うけどな。
21 父 ほな匂てみ。
22 祖母 ほなけど、やっぱり気持ちが悪い、自分でせな。(0.5) 白湯じゃ。
23 ((注射器を高く持ちあげて、注射器を見る))
24 父 うん。

父の非難で盛り上がっていた祖母と父であるが、祖母は20行目で「まあ、なんだったらミルトンなら匂うけどな。」と『たとえ、祖父が間違っただけをしても、私が匂えば理解可能だ』と、祖父の非難話から私という主体が解決可能だという語りに切り替える。ここでは、祖父への配慮も見られる。すると、21行目で父は『それならば、自分で匂ったらいい』と祖母に促す。22行目「ほなけど、やっぱり気持ちが悪い、自分でせな。」と祖母は匂うことで判断することは可能だけれど、確実性がない。「自分で」注射器の液体を入れなければと、今度は私という主体が介護をするために必要な行為(=注射器の中に白湯を入れる)をするという提示を父にすることで、次の24行目で父の同意を得ることができ、この場面のトラブルは解決する。



【写真5】祖母が注射器の中身を確認するシーン

4-3. 考察—在宅医療におけるアフォーダンス

今分析は在宅医療におけるリスクマネジメントについて考察してきた。発見されたリスクは注射器の液体を変えることで、起こりうるトラブルを回避できたと言えよう。しかし、注目すべきはトラブルを回避したこと、そのものではない。表面化したリスクに対し、祖母や父がいかに関心を持ってリスクを丁重に扱っていたかである。7行目の時点で祖母は注射器の液体を抜くことをすでに提案している。そして、実際には抜くことに共同理解を得るためには、24行目までかかった。その間には、父の祖母、祖父への注意喚起としての物言いや祖母の問題を解決へと導くテクニックが見られた。これらのことはつまり、人の判断というものがどのような風に創られているかをあらわしていると言える。定まったリスク管理だけではなく、誰も知っている常識的知識の活用やその場にある情報、資源をいかに有意義にしているかという在宅医療の専門家の姿がそこにはあるのではない。それは、在宅医療の「アフォーダンス」^{xxii}である。つまり、在宅医療という環境が私たちに「価値」を与えている、と同時に、私たちはその「価値」を使いこなしている。言い換えると、このことこそが、在宅医療化されたリスクマネジメントなのだ。

5節 まとめ

今研究は在宅介護により、家庭がどのように医療化するかという視点から考察をしてきた。2節では、チューブや注射器などの医療器具が家庭に浸食してくること、医療という新たなカテゴリーに対する新たなメカニズム創出、「家族」である被医療者を看ることなど、医療が家庭をどう変えるのかという視点から在宅医療の在り方を考えてもらったのではないと思う。

3節ではリスクマネジメントにおける相談場面を会話分析した。そこでは、「被医療者」に対するリスクを徹底的に管理している祖母と父（「家族」）の姿があった。確かに、在宅医療はリスクコントロールを図ることを強いられる側面があるのかもしれない。私も負担が増えるという意味合いでは否定をすることはできない。しかし、リスクコントロールを解決しなければならない家庭が導いた解決策は私たちにも分析可能で理解可能なものだった。つまり、医療は特別な出来事であり、医療は家庭を浸食するもの—医療化する家庭—ではない。医療は家庭に生きる人びとに柔軟に取り込まれていくもの—家庭化する医療—でもあったのだ。

しかし、今まで読まれた方にはお気づきの方もいるかもしれないが、この話はマッチポンプでありながら、ローカライズでもある。在宅医療的リスクマネジメントは従来の病院や実際の医療場面においても十二分にありうる出来事である。しかし、このことにより、私の主張が揺らぐものでは決して無い。本当に求めてやまないのは、在宅医療的リスクマネジメントの重要性を在宅医療に携わる人だけでなく、実際の医療関係者にも重要だと思われること、そのことである。

6節 卒業論文完成に向けて—これからの分析視点

卒業論文の完成に向けて、これからの分析視点を以下で述べる。

まず、在宅医療において最も顕著な医療化の例は特殊な器具がどのように扱われているかがある。今回のケースでは、胃瘻(いろう)のために被医療者につながれているチューブや、褥瘡(じょくそう)防止のために被医療者と寝具の間に挟まれた座布団がそれに相当する。その器具が焦点化される時場面の参加者はどのように行為しているのだろうか。西阪によれば、「私たちは、その時々々の活動に適切なやり方で、自分の身体と、身体に接続される道具を同時に構造化している。」(西阪、2008:120)と言う。その場面において、焦点化された器具に関する発話や身振りがどのような相互行為を成しているのか、その構造を明らかにすることで在宅医療の一側面を提示したい。

さらに、Aが失語症であることも見逃してはならないポイントである。Aの失語症はかなり重く、A自身が周りの参加者に何らかの意思をもった発話をすることは不可能である。つまり、自らの思いを表明できないAは周りの参加者にどのように扱われているのかということも重要な視点だ。発話困難な失語症というラベリングにより、理解することができない(ように思える)参加者がAを無碍に扱っているかもしれないという危惧は誰でも持つだろう。今まで失語症者における会話分析においては「『語る主体』である失語症者自身にとって言葉を語るということがどういうことなのかを研究対象」(川上、2003:256)とされてきたものが多い。しかし、私は失語症者と医療者の相互行為場面を分析することで失語症研究の一側面も提示したい。

謝辞

最後に、今回のゼミ論執筆にあたり、貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力をくださった、信州大学医学部井口高志氏と京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻木下衆氏、また調査協力の依頼に応じてくださったご家族の方々、特に被医療者であるAさんには厚く御礼を申し上げます。

参考文献

- 秋谷直炬(2008)「高齢者介護施設にみる会話構造—日常生活支援における自/他の会話分析—」、『保健医療社会学論集』19(2)、日本保健医療社会学会
- 秋谷直炬・川島理恵・山崎敬一(2009)「ケア場面における参与地位の配分—話し手になることと受け手になること—」、『認知科学』16(1)
- 天田城介(2003)『〈古い衰えゆくこと〉の社会学』、多賀出版
- 井口高志(2007a)『病いと〈つながり〉の場の民族誌』、明石書店
- 井口高志(2007b)『認知症家族介護を生きる—新しい認知症ケア時代の臨床社会学』、東信堂
- Douglas W. Maynard、2003、*BAD MEWS, GOOD NEWS*、The University of Chicago、(= 檜田美雄、岡田光弘訳、『医療現場の会話分析—悪いニュースをどう伝えるか』、勁草書房)
- 橋本久子(2004)「介護福祉におけるリスクマネジメントの研究(第1報): 介護老人保健施設の実態調査をもとに」、第一福祉大学紀要1、福岡医療福祉大学
- 橋本久子(2005)「介護福祉におけるリスクマネジメントに関する研究(第2報): ISO9001規格の認証資格で管理運営するケアセンターの調査」、第一福祉大学紀要2、福岡医療福祉大学
- 浜日出夫(2004)『実践エスノメソドロジー入門』、有斐閣
- 林佑香(2006)「施設内コミュニケーションの相互行為分析—身体の意義に注目して」、『生活の中の相互行為—平成17年度徳島大学総合科学部檜田ゼミナールゼミ論集』、徳島大学総合科学部社会学研究室
- H. Garfinkel(1967) *Studies in Ethnomethodology*、Polity Press
- 伊藤幸子(2009)「訪問介護におけるリスクマネジメントに関する研究—訪問介護に対するリスクマネジメントに関する調査から」、研究紀要16、奈良佐保短期大学
- J. Coulter(1979) *The social construction of mind.*、Palgrave Macmillan、(=(1998)西阪仰訳、『心の社会的構成—ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』、新曜社)
- 檜田美雄(2004)「エスノメソドロジー・会話分析からみた医師と患者の会話—患者の同意の共同的達成—」、『保健医療社会学論集』14(2)、日本保健医療社会学会
- 檜田美雄・岡田光弘・五十嵐素子・宮崎彩子・出口寛文・真鍋陸太郎・藤崎和彦・北村隆憲・高山智子・太田能・玉置俊晃・阿部智恵子・島田昭仁・小泉秀樹(2008)「高等教育改革の相互行為分析: ビデオ・エスノグラフィー研究の狙いと工学部都市工学演習の実際」大学教育研究ジャーナル5、徳島大学
- 河上燁子(2004)「或る失語症者における言葉と身体的所作—メルロー=ポンティの言語論と身体論を手がかりとして」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』43
- 川上道子(2007)「介護職と医療行為に関する研究(I): 訪問介護員の調査から見えてくるもの」、中国学園紀要6、中国学園大学
- Lucy A. Suchman、*PLANS AND SITUATED ACTIONS*、Cambridge University Press (=

- (1999)佐伯胖・上野水樹・水川善文・鈴木栄幸訳、『プランと状況的行為—人間—機械
コミュニケーションの可能性』、産業図書
- 前田泰樹・水川善文・岡田光弘編(2007)『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』、新
曜社
- 丸山優(2005)「高齢者デイケアにおけるリスクマネジメントの視点の検討」、埼玉県立大学
紀要 7、埼玉県立大学
- 三田寺裕治(2005)「高齢者福祉施設におけるリスクマネジメント：介護老人福祉施設にお
ける介護事故の状況及び関連要因の検討」、淑徳短期大学研究紀要 44、淑徳短期大学
- 西阪仰(2008)『分散する身体—エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』、勁草書房
- 岡田光弘(2005)「医学教育のための応用エスノメソドロジー」、『研究応用社会学研究』47、
立教大学
- 岡田光弘(2008)「ビデオ・エスノグラフィー—医学教育の中の身体と視線—」、応用社会学
研究 50、立教大学
- 岡本里香・西田厚子・玉水里美(2008)「地域看護論演習におけるロールプレイの評価— 家
庭訪問場面の会話分析から」、『人間看護学研究』6、滋賀県立大学
- 小澤勲(2003)『痴呆を生きるということ』、岩波書店
- 小澤勲(2005)『認知症とは何か』、岩波書店
- 齋藤静(2009)「認知症高齢者の社会的役割と適応に関する研究」、『現代社会文化研究』44
- 佐々木正人(1994)『アフォーダンス—新しい認知の理論』、岩波書店
- 島田智織・小松美穂子・服部満生子(2006)「病院組織におけるコーディネーションの実際：
指示出し・指示受けの会話分析から」、『茨城県立医療大学紀要』11
- 副田義也(2008)『福祉社会学宣言』、岩波書店
- 高山啓子(1995)「C.Heath とその共同研究者の研究」、『現代社会理論研究』5、人間の 科
学社
- 瀧野揚三(2006)「学校危機への対応：予防と介入」、教育心理学年報 45、日本教育心理学
会
- 田中妙子(1998)「会話における<先取り>について」、『早稲田大学日本語研究教育センター
紀要』10、早稲田大学
- 薄井明(2007)「「隣接ペア」再考」、『北海道医療大学看護福祉学部紀要』14
- 梅本仁美(2008)「高齢者のコミュニケーションに関する一考察」、『大阪大学言語文化学』17、
大阪大学言語文化学会
- 山崎敬一・西阪仰編(1997)『語る身体・見る身体』、ハーベスト社
- 山崎敬一編(2004)『実践エスノメソドロジー入門』、有斐閣

資料—トランスクリプト

【祖母と父が注射器の中身をめぐり話し合う場面】

- 01 父 いけるんか。ちゃんと。
- 02 祖母 いける：。あ：。ちゃんと入れてあるわ。パパが。注射が白湯だろな？（(注射器
03 を見ながら)) 消毒ではないだろな？
- 04 父 ちゃんと（見とけよ。）
- 05 祖母 え？（Aの寝室からキッチンへと引き返す）
- 06 父 いけるんか。消毒ではないんか。
- 07 祖母 ない。ほなけど、一応（0.5）抜く？気持ち悪いけん、[自分が入れてないけん。
08 父 [何を。水入れるん。
- 09 祖母 水入れる、白湯入れるん。
- 10 父 ほな、ほら：、ほんなん人のなんか信用したらあかん。
- 11 祖母 <信用したらあかん。
- 12 父 ほらずっと、洗ろうたらええんで。洗わな。
- 13 祖母 うん。白湯入れて、なんか気持ち悪いわ。
- 14 父 ほら、おとうはんのことやけん [ほんなもん。
- 15 祖母 [うん。(わかつとん) でないか。わしがしとった
16 んじゃわ。 っていうやろ。
- 17 父 いや、ほら、逆もあるわだ。
- 18 祖母 うん。
- 19 父 なんでも逆になるわ。
- 20 祖母 <まあ、なんだったらミルトンだったら匂うけどな。
- 21 父 ほな匂てみ。
- 22 祖母 ほなけど、やっぱり気持ちが悪い、自分でせな。（0.5）白湯じゃ。
23 ((注射器を高く持ちあげて、注射器を見る))
- 24 父 うん。

【トランスクリプト記号】

- ？ 語尾の音が上がっていることを示す
： 直前の音が延ばされていることを示す
< 急いで発話が始まっている状態を示す
[参加者の発話の重なりが始まる箇所を示す
下線 比較的大きな音、または強調されている部分を示す
() 何か言葉が話されているが、はっきりと聞き取れないことを示す
(数字) 数字の秒数だけ沈黙があることを示す
(()) そのつど必要な注記であることを示す

i 天田の研究に対抗しているのでは全くない。天田の研究とは別に見逃してはならないポイントがあるのではないかという立ち位置である。また、後述する井口も同様である。

ii 医療と介護については極めて繊細な差異がある。詳しいことは後述の2章を参照のこと。また、在宅医療に違和を感じる人も少なくないであろうが、在宅介護とほぼ同義であると捉えてもらってもよい。

iii その場に参与する専門家とは特別な職をさして専門家とするのではない。その場にいる人すべてが専門家である。会議で話を聞く人、遊具で遊ぶ人、学校で授業を受ける人など、その場において何かをしている人は、すべてその場の専門家なのだ。

iv エスノメソドロジーの説明をもう少し述べるならば、「相互反映性」と「文脈依存性」が挙げられる。両者については浜が以下のようにまとめている。

ある社会秩序について記述している記録が、それ自体、それが記述しているところの社会秩序の一部であるという、記録と社会秩序の間のこの循環的な関係を、ガーフィンケルは「相互反映性 (reflexivity)」と呼ぶ。また、それゆえに同じ記録であっても、記録が行われる状況やそれが利用される状況に応じて、その意味が変化することを、「文脈依存性 (indexicality)」と呼んだ。(浜、2004 : 11)

v 水川、池谷によれば、エスノメソドロジー的無関心とは、「分析者は研究対象について、その活動が正しいのか正しくないのか、申請のものなのか、そうでないのか、などについて判断することには、関心を持たない点である。」(水川、池谷 : 2004 : 48) とされており、私もこの態度にのっとり、今研究を進める。

vi 在宅医療と医療は別用語である。在宅医療は家庭での医療行為を指し、医療は医師、看護師が行う医行為を指すものと定義する。

vii 医療行為は厚生労働省の用いる医行為と同義である。医療行為のほうが一般認知も高く、理解もされやすいため、医療行為を主に使用する。

viii 嚥下とは「のみくだすこと。口腔内の食塊を胃に送り込む過程をいう。」であり、つまり嚥下障害とは、何らかの原因により、嚥下の機能に問題がみられる状態をいう。

ix 胃瘻とは「主に経口摂取困難な患者に対し、人為的に皮膚と胃に瘻孔作成し、チューブ留置し水分・栄養を流入させるための処置」のことである。

x 褥瘡とは「重症患者が長期間病床にある場合に、衣類・寝具によって圧迫を受ける部位に生ずるとこずれ。」のことである。

xi

xii A家以外ではなかなかみられないとあるが、それは事例として珍しさとしての意味である。私が考察している「家庭の医療化」についてはA家特有のものでは決してない。つまり、他の在宅介護の事例からも一他の在宅介護宅特有の事例からも一導きうる結論である。

xiii 関係対とは「2つずつ対関係をなすカテゴリーの集合であり、その集合全体をさす総称である。」(山崎、2004 : 18)

xiv 応答は明確な答えを聞き手に示しているわけではない。話し手が新たな問題を創出することも多く、そういった隣接対の連鎖構造が相談場面のトラブルには見てとれる。

xv 「隣接対とは、2つの発話が、「挨拶—挨拶」「呼びかけ—応答」「要請—受諾」などのように対（ペア）として類型化されたものである。」(Schegloff&Sacks、1973=1995)

xvi リスクマネジメントはケア場面、医療場面でのみ行われている訳ではない。

xvii厚生労働省より <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/04/h0422-2.html> を参照とのこと

xviii 事故につながりそうになった事例をヒヤリ・ハット事例とも言う。

xix 実際の医療のリスクマネジメントが完璧だと言っているのではない。在宅医療的リスクマネジメントと比べ幾分、システム化されているという点に注目していただきたい。

xx ここで言うパパ、おとうはんは上述した家族構成上の祖父に相当する。

xxi テクニックとは特別な人が持つ固有のテクニクという意味合いではない。もちろん、どの人も普遍的に持ちうるテクニクである。さらに、テクニクがあるからトラブルが解決しているのでもない。もちろんトラブルは場面の参加者との相互行為により解決されるという私の研究上の立ち位置は変わらない。テクニクとはあくまでも、表現を際立たせる私のテクニクである

xxii 佐々木によれば、「アフォーダンスとは、環境が動物に提供する『価値』のことである。」(佐々木、1994: 60) とある。

第3章

吹奏楽練習場面における相互行為分析

—「理想の音」を生み出すための指導活動に着目して—

渡邊裕美

0. はじめに

吹奏楽とは、木管楽器・金管楽器・打楽器から（基本的には）構成されている音楽演奏形態のことである。その形態で演奏される「曲」は、参与者たちが数種類の楽器・複数の音域に分かれ、それぞれの吹いた音が重ねられることによって成り立っており、そうした吹奏楽の演奏活動を、私たちは1つの完成された曲として、しばしば聞く機会があると思う。

では、大勢の参与者それぞれによって出された「音」は、いかにして1つの「曲」や「音楽」になっていくのだろうか。私はそのような「曲としての演奏がなされるまでに至る過程」である、演奏者全体で行われている「練習（合奏）」における活動へ興味を持った。また同時に、1対1ではなく大勢の参与者が集うといった練習活動の状況下において、どのようにして「曲」にするための「指導」が行われ、活動が進められているのかという疑問も持った。

そこで、練習場面に参与している吹奏楽団員たちの「音から曲にする」ための要となる「指導」活動に注目し、そこで実際に行われている参与者たち行為の様子を分析することから、本研究を進めることとした。

その際、次に挙げる2つの研究事例に注目した。1つは吉野（2005）によるギター教授場面における分析である。吉野は、参与者たちによる音楽的行為そのものの端的な把握を用いた数々の振る舞いによって、社会的生産物としての音楽を成し遂げているかについて言及している。もう1つは、西阪（2008）が行った幼児へのバイオリン教授場面における相互行為分析である。西阪は参与者の行う「振舞い」自体に着目し、バイオリンの弓と教授者である教師の指が近接されることによって、演奏への指導行為が行われていたことを明らかにするとともに、また、あらゆるもの（器具や身体）によって「振舞い（行為）」自体が構造化されていることに言及している。

吹奏楽練習も一種の教授場面であるが、本研究では、1対1ではなく大勢の参与者が違う旋律を奏でながら参与されている演奏練習活動はどのようにして理解可能な練習となっているのかに重きをおく。その上で上記2つの研究や疑問を基に、吹奏楽練習場面における指導活動の中で、参与者たちがいかに振舞うことで練習場면을達成させているのかという点に着目して分析を行うことで、活動に参与している大勢の吹奏楽団員がいかにして指導活動を達成しているかという、活動の構図を、紐解いていこうと思う。

1. 調査について

1-1. 研究方法

調査について述べていくにあたり、先にここで研究方法を記しておく。ここで研究方法について述べることは、後の1-2で述べていく調査の内容・概要が、本節の研究方法に沿っていることを示すことになると思う。つまりここでは、実際の分析に加え全体の調査の基盤ともなる部分といえるだろう。それでは以下で、本研究における研究方法について述べていく。

本研究では、エスノメソドロジーという方法論を用いて研究をすすめていく。なぜこの方法論を用いるのかについて述べるにあたり、まずはエスノメソドロジーという方法論について知っておく必要があるだろう。エスノメソドロジーの創始者であるH. ガーフィンケルは「*Studies in Ethnomethodology*」の序章において次のように述べている。

Their study is directed to the tasks of learning how members' actual ordinary activities consist of methods to make practical actions, practical circumstances, common sense knowledge of social structures, and practical sociological reasoning analyzeable; and of discovering the formal properties of commonplace, practical common sense actions, "from within" actual settings, as ongoing accomplishments of those settings. (Garfinkel, 1991:7-8)

和訳すると、「それらの（エスノメソドロジー的な）研究は、①人々の現実的なごく普通の活動が、どのようにして実践的な活動・実践的な環境・社会的構造の常識的知識や実践的な社会学的推論を分析可能にするための方法として成り立っているのかを研究することが目的である。そして同時に、②人々によって行われている進行中の活動として、つまり現実の活動の裏側から、実際に起こっている常識的行動や一見平凡な物事の形式的な特性を発見しようとするのも目的である」という。

つまりこの方法論においては、なにか特別な物事を対象にするのではなく、私たちが普段行っている活動を対象としているのだ。そして、その活動の中で実際何が起こっているのか、社会的構造がどのように分析可能となっているのかという、あくまでも私たちが現実に行っている活動に即して物事をみていく学問なのである。

例えば、友だちと会話をする、親と電話すること、また病院で医師の診察を受けること、教師として教壇にたって授業をすること、また生徒として授業を受けることなどの活動はすべて現実に行われているだろう。つまりこういった活動全てにおいて、エスノメソドロジーによる分析の対象となりうるのだ。

これらのことから、人々の活動に即した見方から研究をしていくエスノメソドロジーは、「(吹奏楽参加者の) 活動がどのように行われ、どのように場を達成させているのか」という、参加者の活動に焦点を当てて研究を行いたいという私の関心に適ったものであると

考える。この理由から、本研究においてもエスノメソドロジーという方法論を用いて、練習場面に参与している者たちの活動に沿った分析を進めていこうと思う。

また、このエスノメソドロジーの方法論を用いて研究を進める際、1つこだわったことがある。それは、「ビデオを使用した行為分析を行う」ということだ。その理由を以下で述べていく。

先にも述べたようにエスノメソドロジー研究においては、私たちの行う活動自体が研究対象となっているのだが、この活動自体を研究するにあたり、その活動が1人で行われていればその場で起きていることを紙に記述する、音声を録音するなどして活動を記録することが可能であったと思う。しかし、本研究で対象となっている吹奏楽練習場面において場面参加者の人数が多いことから、本研究を進めていくにあたり、参加者1人1人の、一度に多く行われるかもしれない仕草や視線などの活動をその場で記述することは、かなり難しいと予測された。

そこで本研究を進めていくにあたってビデオカメラでの撮影を行うことにした。ビデオを使用した分析は、エスノメソドロジーにおいても研究を行うための手段の1つとして挙げられている。先ほども述べたように、本研究の場面には多くの参加者がおり、その参加者による音楽練習活動がどのように行われているのかということをつまみとす以上、それぞれの視線や、行為、発話などの活動をつぶさに確認、観察し分析を行う必要があると考えている。そのためビデオ分析という方法をとることが、吹奏楽練習場面の研究を行うにおいて適当であるという結論に至った。

私たちが行うあらゆる活動は、視線や発話、身振りなどといった行為・状況が組み合わさり、さらにその本人の行為が他者から見たときにも明らかになることによって初めて、その活動自体を理解可能にすることができる。そのことを他者（＝ビデオ）の目から観察し、本研究対象である吹奏楽練習場面について分析・考察を進めていくものとする。

以上、本研究における重要な手続きとして用いていくエスノメソドロジー方法論について非常に粗雑ではあるが、述べておいた。

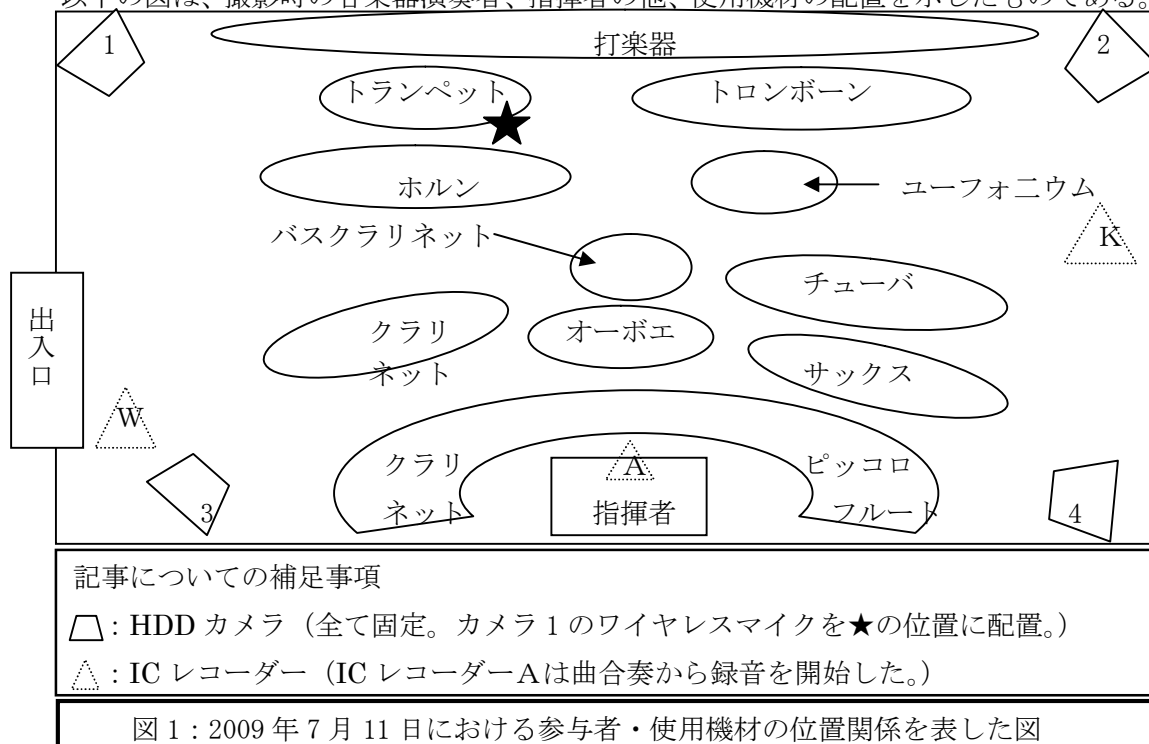
1-2. 撮影概要

先の1-1で述べた研究方法にのっとりた形（＝研究方法としてエスノメソドロジーを用いること、またビデオなどの機材を用いた分析を行うこと）で実際の調査を行ってきたので、ここ1-2では、実際行った調査における手続きを述べておこうと思う。以下、本研究で使用した撮影日における概要を、機材配置も含め、箇条書きで記述していく。

- ・日時 2009年7月11日 18:30～21:00
- ・使用機材：HDDカメラ4台（ワイヤレスマイクを1つ使用）、ICレコーダー3台
- ・撮影者：檜田美雄教員、齋藤雅彦、渡邊裕美
- ・被撮影者：T県で活動しているZ楽団（撮影時は演奏者27人）

- ・簡単な流れ：18:00～18:50 頃：音だし、個人練習
 - 18:50～19:00：チューニング（音程合わせ）
 - 19:00～20:45：合奏（楽団員全員が定期的に集まって練習すること）開始
 - 第3指揮者Bによる基礎合奏、その後第2指揮者Aによる曲合奏
 - 20:45～：団内連絡・片づけ

以下の図は、撮影時の各楽器演奏者、指揮者の他、使用機材の配置を示したものである。



1-3. 撮影にあたっての留意事項

撮影にあたって、Z 楽団には、練習場面のビデオ撮影や録音機材（IC レコーダー）での録音が可能かどうか、事前をお願いをした。その後、責任者の方より撮影可能との連絡を頂いたので、承諾書記入という形で正式に許諾を得た。その際、一部の参加者から「諸事情により自分が映る場所はぼやかして欲しい」との申し出があったため、参加者に差し障りが無いよう、画像処理を行っているところがある。

2009年7月11日の撮影当日は調査によって参加者たちの練習を妨害することがないように、カメラの位置などは邪魔にならない程度の場所に設置させていただいた。ワイヤレスマイクを1つ使用するに際し、撮影当日に演奏者の方をお願いしてワイヤレスマイクを譜面台に装着させていただいた。また撮影当日に責任者の方が不在だったため、副責任者である方に挨拶をした。また事前承諾は得ていたが、練習中 IC レコーダーを装着させて頂くことになっていた指揮者の方への説明を当日改めて行った。

2. 分析

2-1. 事例紹介

この〈断片1〉は、指揮者Aによって、演奏者の一部が吹いたある演奏練習箇所（ α とする）が指導されている一幕である。この〈断片1〉が始まる以前に、 α は既に2度練習がなされている。その2度目の練習直後に「もう一回ね（1行目）」と演奏への評価がなされた所から指導が開始される。

〈断片1〉 指揮者Aによる演奏指導

日時：2009年7月11日 19:59:21～

場面の参与者：A（指揮者）、演奏者たち

- 01A はいもう一回ね： で フレーズは繋がるのね で音ははっきり発音してください
02 ティイ:ティイ:ティイ: ティイ:ティイ:ティイ: この流れの中で発音だけはつき
03 りね：



▽2009年7月11日カメラ4 19:59:24～

写真1 右手を平らにする指揮者A

2-2. 分析視点

次節以降で詳しくみていくが、この演奏者に対する α への指導の最中、Aは多くの「(トランスクリプトに載せられないぐらいの)動作」を行っている。このような、指揮者Aが行う動作は、一体どのようにして「指導」の中で機能し、指導活動を構成しているのか。そういった「動作」の起こりから、指導活動を見ていく。

ここで西阪(2008)のいう「モデル身体」、特に「代理身体」「理想身体」「比喩身体」という見方に言及しておく必要がある。

西阪は「代理身体」を、「身振りを行なう者が、現に目の前にいる他人（その相互行為の他の参加者）の身体の代理として自らの身体を用いているとき(西阪、2008:207)」の状態

から定義した。また、「理想身体」を、「相手の身体の現在の（現実の）状態を否定し、それと両立不可能な別の（理想の）身体として自分の身体を打ち立てる身振りである（西阪、2008:226）」としている。そして、「相手の身体の特定位位について語る時、自分の身体のまったく異なる位置を用いて説明する（西阪、2008:247）」ときに用いられる身体を、「比喩身体」と呼んだ。そして、それらが産婦人科医師の診断場面やバイオリンレッスンにおける教授場面において、参加者によって適切な形で、適切な位置で行われることで、それぞれの場面の活動を達成していたことを述べていた。

つまり、このような身体を用いた活動は、その場面ごとにおける活動の中で、参加者によって、適切に用いられることによって、行為を形成するとともに、場面自体を構成する際の「1つの活動」として組織されているというのだ。このような西阪の見解は、今回の事例で起こっている「Aの動作」においても、十分参考になるものと考えられる。

しかし忘れてはならないのは、こうした「モデル身体」が場面の中で、参加者たちにとってどのようにして指導場面として組織されているのかということである。この「モデル身体」の考え方を本研究における場面分析への視点とし、実際に吹奏楽練習場面の指導活動において何が起こっているのか、どのようにして指導活動が起こっているのかについてみていき、考察を行っていく。

3. 考察

では実際に「動作」を用いた指導場面を分析する。以下では、〈断片 1〉で行われている発話と動作を順に、写真と合わせて掲載している。この以下における 5 枚の画像や発話から、指導活動がいかに行われているのかについて観察し、考察していこうと思う。



▽2009年7月11日カメラ4 7:59:24～

01 行目「フレーズは繋がるのね」

写真1 右手を平らにする指揮者A



▽2009年7月11日カメラ4 7:59:25～

01行目「で音ははっきり発音して下さい」

写真2 右手を口に当てる指揮者A



▽2009年7月11日カメラ4 7:59:26～

02行目「ティイ:ティイ:ティイ:」

写真3 オノマトペと共に手を拳状にしてフレーズを表す指揮者A



▽2009年7月11日カメラ4 7:59:29～

02行目「ティイ:ティイ:ティイ:」

写真4 オノマトペと共に手を平らにしてフレーズを表す指揮者A



▽2009年7月11日カメラ4 7:59:32～

02行目「この流れの中で発音だけはっきりね」

写真5 フレーズと発音を同時に示して指示する指揮者A

3-1. 「適切な」指導がなされること

ここでは上記に挙げた写真1～5の箇所（トランスクリプト01～03行目）を写真と共に分析する。

まず写真3、4の部分を比較していくと、02行目の「ティイ:ティイ:ティイ:」という2回のオノマトペは同一であるが、その発話に際してのAの動作が異なっている。この写真3・4における動作の詳細を述べておくと、写真3では拳を握ったまま右上へ動かしているのに対し、写真4では手を広げ水平にした形で右上へ動かしている。こうした違いは何故起きているのか。

それを紐解くために、まず指揮者の「右手」に注目する。写真3の右手の形が、拳を握った形なのに対し、写真4では「フレーズは繋がるのね」と指導する（写真1参照）ときと同じ手の形に戻る。そして、直後の発話である写真5での動作における「この流れ」という発話では、写真4と同じ手の形がなされている。つまり、写真3・4・5の一連の動作の中で、写真3の手の形が消去されるとともに、写真4・5の手の形（「フレーズ」）に志向され直していることが読み取れる。よって、Aは「フレーズは繋げる」という指導内容に志向しそれを達成しようとしていたことが理解可能となっている。つまり、Aの行為により、「フレーズ」と「発音」の課題が順に説明される形となり、適切な指導活動として理解可能となっているのだ。ⁱⁱ

そして、注目すべきはその「フレーズは繋げる」という指導活動の内容に志向を修正することが、指揮者の手を用いて行われている、ということだ。このようにAがこの一連の流れにおいて、右手や左手を「フレーズ」「発音」それぞれにきちんと定義づけながら、指導を行っていたこと、それはここでの指導全体を構成するための要素となっている。さらにAは単に動作を行っている「手」を、活動のための要素、つまり「活動を構成するための道具」として行為の中で用いて指導活動を達成しているだけではない。今みてきた写真

3・4 からもわかるように、「道具（手）」は常に場面の適切性を保つために、参加者によって変化を遂げることが可能なものとして扱われている。そして実際に、指揮者が変形させて用いながら行為が行われることで、その場その場において最も相応しく適切な指導活動を成し遂げているのだ。

3—2. 口の構造化

さらにここでは的を絞って、写真2で行われているAの行為に着目していく。

「音ははっきり発音して下さい」という発話の瞬間、Aは写真2のように口元に右手を持っていく。通常「発音」する行為は口を用いて行うことから、この行為は、指導が口に関係するものであることを端的に表示する。そこへさらに右手を添えることにより、Aの口元が演奏練習ⁱⁱⁱのための指導となる箇所であることを強調するものとしてこの場が組織されているのだ。これらのことより、この瞬間においてAは「口」をキーワードに指導を行おうとしていることが理解可能となる。

ここで、「指導」という活動について考えてみる。吹奏楽練習場面において、指導は必ず演奏の直後に行われていた。言い換えると、「指導」は直前の演奏に対する指導として構成されていると考えてよいだろう。そしてその指導は、演奏を行っている演奏者たちに宛てられるものとして聞ける必要がある。つまり、「指導」は演奏者の演奏に対して行われる「演奏指導」として成り立っているといえる。


こうしたことから言えるのは、この場の指導でキーワードとなっている「口」は、Aの「口」や「右手」を用いた行為によって、演奏者の演奏中の「口」に代替するものとして組織されているということである。つまり、指導中に演奏者の口が「演奏指導」のために、指揮者の口を置き換えているということが起こっているのだ。

この口の代替と右手の強調によって次のようなことが分かる。吹奏楽で使われる管楽器は、演奏者自身の口と楽器が接続し、その接続場所から息を吹き込むことで初めて音が出る。つまりAの口を演奏者の口の代替物として用いることで、Aの行為自体を、演奏行為の背景に則った適切な行為として理解可能なものとする。それは言い換えると、指導を受けている演奏者たちも、Aの指導が自分たちにあてられたものであることが理解できるということなのだ。

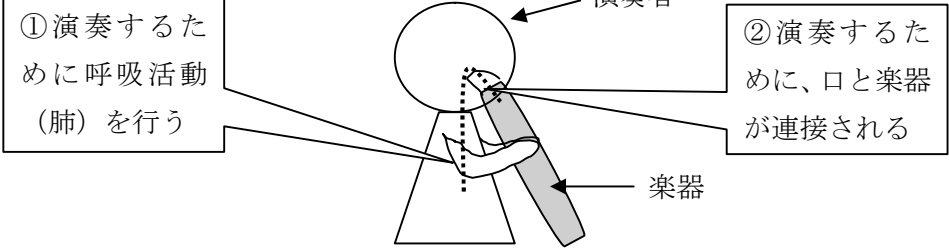
さらに2点注意すべきことがある。1点目に拳を握った状態の右手は、口の代替を強調するだけでなく、右手を口に近接させる行為から楽器と口を接続させた演奏活動（詳しくは図2参照）を連想させている。^{iv}つまり、この動作とAの「発音」という発話も、こうした口の代替を際立たせる。2点目に、口もとに手を近接させながら「発音」と発話することは、図2のように、演奏者の活動に適切に沿った発話であり、逆に言うと指導を構成するうえでも適切となっているといえる。

まとめると、1点目に、「演奏者の口を指揮者の口で代替する」（図2）という形でAが指導を行うことで、図3で示した点線部分で繋がっている「演奏をするための演奏者の活動」

の1つとなっている「口」が、Aの指導の対象として扱われているということが理解可能となっている。²点目に、そうした動作や発話を行っているのは指揮者であるAであるが、「指導」は、直前に行われた演奏者たちの演奏行為なしには生み出すことができない活動だと考えられることから、つまり、この場は「演奏者たち」も場面に参与している状態によって構成されていることがわかる。このような「演奏行為は楽器と身体を結び付けて構造化することにより構成されるものであり、また、次に行われる指導行為をも結び付けて場面を展開させつつ構成していく」ことが、両参与者（指揮者・演奏者）によって適切に成されていることを、私たちの目にも理解可能にしているのだ。

指導中の指揮者の口	演奏中の演奏者の口
 <p data-bbox="252 1182 427 1211">▽19:59:25～</p> <p data-bbox="252 1227 699 1256">写真2 右手を口にあてる指揮者A</p>	 <p data-bbox="810 1182 986 1211">▽19:59:17～</p> <p data-bbox="799 1227 1353 1256">写真6 断片1直前に行われていた演奏場面</p>
<p data-bbox="368 1272 1214 1301">⇒指揮者Aの口が、直前に行われていた演奏者の口を代理している</p>	
<p data-bbox="475 1339 1118 1368">図2 この場面における代替物・被代替物について</p>	

演奏をするための、演奏者の活動



→①・②より、点線のように「楽器—口—肺」の活動が一体となっている

⇒この、上記のような活動が、指揮者Aによって明らかにされている。

図3 指揮者Aの口を代替した指導によって明らかとなった、身体と楽器が一体となった演奏活動

この場において参加者たちは指導活動を達成するために、活動にふさわしい振舞いに応じて、楽器はもちろん、発話・身体といったものでさえも「指導のための道具」として用いるだけでなく、実際にそれを用いている指揮者・演奏者といった参加者たちが、「演奏直後」というタイミングにおいてこうした構造化を行うことによって、この一連の行為が「演奏練習の指導活動」として構成される、指導活動の一端となっているのである。

3—3. 理想の音を成し遂げるための活動

3—1 では「フレーズ」「発音」というものを、Aが手を用いつつ行って定義付けながら、「一貫した指導」を達成し、また、3—2 では口元に手をあてる行為から、指導行為が直前の演奏者の演奏と結び付けて行われていたことをみてきた。

まず 3—2 のように、「指導」の場の中で、演奏者の口が指揮者によって代替され置き換えられていたように、参加者による指導活動の中で、指揮者・演奏者の口が指導のための道具として用いられ、指揮者の口自体を「理想身体」として組織し、「演奏指導」の場を適切に創り上げ達成していた。これはつまり、西阪が指摘しているように、「自らの身体を、相手のモデルとして用い(西阪、2008:201)」て行われる身体の構造化が、練習場面における参加者たち(指揮者・演奏者)による、適切な位置による適切な行為として起こっていたと理解可能である。言うなれば、適切な演奏行為を達成するための「演奏者の理想的な身体活動」、つまり、直前に行っていた演奏中の演奏者の口でなく、またこの場面におけるAの指導を聞いている演奏者の口でもなく、この場の次に展開するであろう演奏中における演奏者の口となる「理想(の)身体」として、AがAの口を用いることで、この場に相応しい指導活動を構成していたのだ。

付け加えると、3—2 でみてきた「理想の演奏」を達成するための演奏者の口を指揮者の口で代替する行為の中において、指揮者 1 人の口がこの場面における複数人の演奏者たちの口 1 つ 1 つを代替し、「理想の口」として指揮者Aの行為を構成している。このことが大勢の演奏者に向けて指導するにあたっての適切な行為となっているだけでなく、それぞれの演奏者たちもそのことを理解できているという、「練習(合奏)」場面にふさわしい相互関係があることが、このAの行為から理解可能となるのだ。

では、3—1 でみてきたAの行為全体についてはどうだろうか。指導が「直前の演奏に対する指導」として組織されていることから、ここ一連の発話の相手は「直前の演奏の担い手である演奏者」であると聞ける。だが、「フレーズ」や「発音」などの写真 3・4・5 でみられる全体活動が、「相手の身体部位」について「自らの身体部位」を用いて言及している面だけではないように思える。例えば、もちろん「発音」は身体を用いた活動であるしそれを行う演奏者の演奏活動を指導の中で指揮者が行為することは、「理想身体」を用いた適切な指導活動となっている。しかしその一方で、この場における「フレーズ」というものは、演奏をするための演奏者の身体活動ではなく、演奏行為が開始し終了されるという

結果によって生まれる産物である。このことから、相手（演奏者）の身体をモデル化しているというよりはむしろ、彼ら参加者が志向している「演奏」、この場面であれば「フレーズ」といった、「吹かれる音（演奏）の理想」を、指揮者の身体の一部（右手）でモデル化して表示しているといえる。

つまりこの場面は、「演奏者」という人間をモデルにして行われる（指揮者の）身体の構造化だけではなく、「理想の音」という「（この指導後におこなわれるであろう）演奏者たちの行為の産物である演奏」をモデルとし、それに志向したものとして指揮者の身体が構造化されている。言い換えると、演奏者の身体活動を指揮者の身体でモデル化しているとともに、その先にある演奏者の活動によってなされる「音」の理想をも指揮者の身体でモデル化するという、複合的な意味合いを持った身体の道具化が一連の指導の中で起こっているのである。

そしてこの場に至るまでに2度、 α についての演奏練習が行われていることも加味しても、演奏の直後に指揮者によって「理想の音」について言及がなされることは適切であり、こうした両参加者による「理想の音から生まれる良い演奏活動」を生むための適切なテクニクとして、この場に組み込まれているのだ。

4. まとめ

吹奏楽練習場面における指導活動では、参加者たちが発話や身体といったものを「道具」として扱いつつ、また参加者によって扱われた「道具」は、どんな形で場面に参加していても、参加者たちによって参加者たち自身の行為や活動と強く結びつけられ、「道具」を用いた行為が複雑に組み合わせられ、指導活動が構成されていた。そのことは逆に、数々の「道具」があることが吹奏楽練習場面における指導活動を理解可能にしていたとも言えるであろう。

さらにこの場でその「道具」自体に着目すると、単に指揮者と演奏者の「身体」という「それぞれの参加者の所有物である道具」を介して指導活動を構成するだけでなく、そして時に、身体を用いて行われた活動の先にある「演奏」という「参加者全員の所有物である道具」を身体で表示し、演奏者たちに対して表示することが可能であることを、指導活動の中で達成していたのだ。そうした「1対複数人」（指揮者／演奏者たち）の状態でも「複数人にあてられた指導」であると聞けるように参加者が振る舞うことで場面が成り立っていること、このことも吹奏楽練習場面における演奏指導活動を達成するに不可欠な参加者の活動として指導場面を構成していた。

「複数の音」が存在するところから「1つの曲」として演奏されるまでの過程となる吹奏楽における指導活動は、演奏会で行われている演奏活動と同様に、参加者による適切な社会行為の積み重ねによる、1つの社会活動として起こっていたといえるのだ。

参考文献

- H. Garfinkel, 1991, " *Studies in Ethnomethodology (Social & political theory)* ", Polity; Reprint:7-11.
- J. L. オースティン著、坂本百代訳、1985、『言語と行為』、大修館書店——J. L. Austin, 1962, " *How to Do Things with Words* ", Oxford University Press.
- 木許隆、2009、「教育現場における指揮法の一考察」『埼玉純真短期大学研究論文集』2号:49-52。
- 串田秀也、2006、『相互行為秩序と会話分析 「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社。
- 高山啓子・行岡哲男、1997、「道具と身体の空間的秩序—救急医療における身体参与の分析—」——山崎敬一・西阪仰編『語る身体・見る身体』ハーベスト社:147-167。
- 西阪仰、1994、「直接知覚・論理文法・身体の配置—見ることの相互行為分析—」『現代思想』22-13(11):306-316。
- 、1997、『相互行為分析という視点』金子書房。
- 、2008、『分散する身体』勁草書店。
- 前田泰樹・水川善文・岡田光弘編、2007、『エスノメソドロジー 人びとの実践から学ぶ』新曜社。
- 丸山慎、2004、「指揮者の身体—協調行為としての指揮者の身振りの分析—」認知科学 11(2):83-108。
- 水川喜文、1997、「ビデオゲームのある風景—インタラクションの中のデザイン—」——山崎敬一・西阪仰編『語る身体・見る身体』ハーベスト社:123-143。
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正、1993、「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力—<車いす使用者>のエスノメソドロジー的研究—」社会学評論 44(1)。
- ほか、1998、「指示・道具・相互性—遠隔共同作業システムの設計とそのシステムを用いた人々の共同作業の分析」認知科学 5(1):51-63。
- 編、2004、『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣。
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰編、1999、『会話分析への招待』、世界思想社。
- 吉野秀紀、2005、「音を取り巻く相互行為分析—ギター教授演奏場面を事例として—」徳島大学総合科学部国際社会文化研究コース卒業論文。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの人にお世話になり、大変感謝しています。

本研究の調査に際して、調査の依頼を引き受けてくださり、撮影に協力して下さった Z 楽団の皆様には大変お世話になりました。楽団の責任者の方や IC レコーダーでの録音を快諾して下さった指揮者の方をはじめ、皆様の協力がなければ論文は執筆できませんでした。本当に感謝しています。ありがとうございました。

トランスクリプト記号一覧

以下に示すものは、本研究のトランスクリプトで用いられている記号である。

∴ コロンの列：直前の音が伸ばされていることを示す。

—— 下線：当該箇所之音が大きいことを示す。

注釈

ⁱ この西阪の議論・考察は、チャック・グッドウィンの「共生的身振り（環境に接続された身振り）」という考え方に端を派す。この「共生的身振り」は身体と環境、発話の構造などが場面の中で結び付けられる（接続される）ことによって、その場面において意味を帯びる身振り（動作）のことを指すという。本研究では西阪が考察を行った、環境に接続した「身体の構造化」から述べていく。

ⁱⁱ 補足すると、ここで行われているオノマトペ（擬態語・擬音語）からも、指導活動への適切な構造化がみられていた。1つ例を出すならば、この〈断片1〉以前において指揮者Aが演奏箇所αを指示する際に用いられていたオノマトペ（「ティラ ティラ ティラ」）と〈断片1〉で行われていた02行目のオノマトペ（「ティイ:ティイ:ティイ:」）を比較すると、発話のされ方が違う。前者が「って発音きっちりして」という発話と相互的關係になっていることから発音に重きを置くものとして指示されていると聞け、後者は01行目「フレーズは繋げる」という演奏後の指導に沿ったものとして聞ける。つまり、こうしたオノマトペの違いは、それぞれの指示・指導における適切な発話の仕方でもなされていたといえるし、また〈断片1〉の部分における指導活動の適切な要素として構造化されているのだ。

ⁱⁱⁱ 本研究の中で「演奏」「演奏練習」という言葉が多く出てくるが、これはあくまでも「練習としての演奏」である。もし「演奏会」という場であれば、私たちは演奏会の観客として演奏を聴くとき、1つの曲の演奏が指揮者によってとめられてから拍手をするだろう。（もちろん、1楽章・2楽章と続けて演奏される場合などには、途中で拍手をすることが求められる場合もある。）つまりそうした演奏会という場における「演奏がとまること＝演奏の終了」は、創出側（指揮者・演奏者）、受け手側（観客）たち参加者の相互理解が働くことによって成り立っているといえる。逆にいうと、この練習場面においては「練習」が故に、途中で演奏をとめることが可能な場面となっているのだ。そしてそれは、指揮者が指揮をとめることが可能だということに加え、演奏者の吹いている音がとまることも可能になっているという相互行為によって「練習」場面が構築されているともいえるのだ。

^{iv} もちろんこの右手は、単なる「口の代替行為を強調するもの」として組織されているだけかもしれない。しかし、この瞬間において右手が拳状であること、その状態で口と近接されて行為されていることから、このように考察することは決して「独りよがり」な考察ではないと考えている。また、強調として組織されていたとしても、「演奏に対する指導」にそったものとして右手が構成されていることには、変わりないだろう。そして、真実がどちらであろうと、それは私の関心外である。

^v 今回のトランスクリプト上には掲載していないが、この〈断片1〉の後に行われた演奏後の指導において、Aより「タンギング（音を切って発音すること）」という、まさにここで言われていた口の活動についての言及が、再度なされている。

^{vi} ここでいう「適切な演奏行為」とは練習場面におけるものだけでなく、後の「演奏会」などの本番場面をも見越しつつ発話されていると考えるべきだろう。

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊 (国立国会図書館等所蔵)

- | | | |
|----|--|------------|
| 1 | エスノメソドロジーとその周辺
ー平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 1998年3月発行 |
| 2 | ラジオスタジオの相互行為分析
ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー | 1998年10月発行 |
| 3 | エスノメソドロジーと福祉・医療・性
ー平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 1999年2月発行 |
| 4 | 障害者スポーツにおける相互行為分析
ー平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版)ー | 2000年2月発行 |
| 5 | 日常生活の諸相
ー平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 2000年2月発行 |
| 6 | 現代社会の探究
ー平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 2001年2月発行 |
| 7 | インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) | 2003年2月発行 |
| 8 | インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) | 2003年9月発行 |
| 9 | 社会学の窓ードラマティックな日常生活ー
ー平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 2004年2月発行 |
| 10 | 義肢・装具のエスノメソドロジー
ー平成16年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書ー | 2005年2月発行 |
| 11 | 生活の中の相互行為
ー平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 2006年2月発行 |
| 12 | 鍼灸のエスノメソドロジー
ー平成18年度地域調査実習報告書&
大学院人間・自然環境研究科地域社会論Ⅲ・社会組織論レポート集ー | 2007年2月発行 |
| 13 | 社会学とともに
(水曜読書会 100 回記念誌& 2007年度徳島大学榎田ゼミ論集) | 2008年9月発行 |
| 14 | 現場で起きていることーエスノメソドロジーの立場からー
(平成20年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー) | 2009年2月発行 |

認知症のエスノメソドロジー

(平成21年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書&榎田ゼミ ゼミ論集)

発行日 2010年2月19日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088) 656-9512 E-mail:kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成21年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書発刊プロジェクト
